

神戸大学 文学部
神戸大学大学院 人文学研究科

2024 年（令和 6 年）度

年次報告書

神戸大学文学部・大学院人文学研究科 評価委員会編

2025 年（令和 7 年）

目次

はじめに	i
------	---

第1部

I. 教育（文学部）	1
I-1. 文学部の教育目的と特徴	1
I-2. 教育の実施体制	4
I-3. 教育内容	11
I-4. 教育方法	18
I-5. 学業の成果	23
I-6. 進路・就職の状況	28
II. 教育（人文学研究科）	29
II-1. 人文学研究科の教育目的と特徴	29
II-2. 教育の実施体制	33
II-3. 教育内容	39
II-4. 教育方法	48
II-5. 学業の成果	54
II-6. 進路・就職の状況	60
III. 研究（文学部・人文学研究科）	63
III-1. 文学部・人文学研究科の研究目的と特徴	63
III-2. 研究活動の状況	65
III-3. 競争的外部資金の獲得状況	68

第2部

I. 外部資金による教育研究プログラム等の活動	76
I-1. 戦略的事業経費（ミッション実現戦略分）	
「人文学推進インスティテュートに係る戦略的事業経費」	76

I-2. 科学研究費補助金「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」(研究代表者：奥村弘、課題番号：19H05457)	79
II. 部局内センター等の活動	81
人文学推進インスティテュート	81
II-1. 地域連携センター	82
II-2. 倫理創成プロジェクト	87
II-3. 日本語日本文化教育プログラム	95
II-4. 神戸雰囲気学研究所 (KOIAS)	96
II-5. 文化交渉学	98
III. 社会貢献	101
III-1. 公開講座	101
III-2. 高大連携事業	103
第3部	
I. 外部評価	104
I-1. 外部評価委員会	104
I-2. 外部評価報告書	105

はじめに

大学院人文学研究科長・文学部長
白鳥義彦

この報告書は3部構成になっています。第1部は人文学研究科および文学部の教育と研究、第2部は外部資金による教育研究プログラム等の活動と、部局内センターおよびインスティテュートの活動、第3部は外部評価委員による評価です。加えて、各教員の教育・研究・社会貢献等に関わるプロフィールを附しています。

2024年度は、第4期中期目標・中期計画期間(2022年4月～2028年3月までの6年間)の3年目の年度に当たります。データの客観性と評価の継続性を維持するため、これまでに毎年出してきた年次報告書の体裁を本年度も大きくは変えず、人文学研究科および文学部の教育研究活動に関する基礎資料を収集して自己評価を行っています。また毎年実施している外部評価でのご指摘に基づき、正確なデータを掲載し、学外者にもわかりやすい記述にすることに努めました。

新型コロナウイルス感染症は2023年5月8日から「5類感染症」の位置づけとなり、2024年度は、教育・研究の両面で通常通りの活動が可能となりました。

現在の人文学研究科・文学部は、哲学(哲学・倫理学)、文学(国文学・中国文学・英米文学・ヨーロッパ文学〔学部ではドイツ文学・フランス文学〕)、史学(日本史学・東洋史学・西洋史学)、知識システム(心理学・言語学・芸術学)、社会文化(社会学・美術史学・地理学・文化資源論〔博士課程後期のみ〕)の各講座から構成されています。つまり、伝統的な「哲・史・文」+知識システム・社会文化という構成になっており、文学部の中核(哲・史・文)と現在社会が求める学問領域(知識システム・社会文化)が併存するという、まさに「人類の叡智の蓄積としての古典と現代的問題を結びつけて考える」(ディプロマ・ポリシー)教育研究組織となっています。このポリシーと構成の合致、どの分野もその専修名を見れば即座に学問領域がわかるという明快さ、これが文学部の魅力であるとともに強みにもなっています。

また、人文学研究科・文学部では2022年4月に、従来の「日本文化社会インスティテュート」を発展させて「人文学推進インスティテュート」を立ち上げました。本インスティテュートは、研究科内の各センターが進めている教育・研究・社会連携を統括し、国内外の大学や大学共同研究機関、自治体や地域社会等との協力関係を推進する異分野共創プラットフォームとして機

能させること、および、新たな人文学研究科の共同事業の育成と発展のための支援を目的としています。設立からこれまで、「雰囲気学」や「文化交渉学」という新たなプロジェクトを立ち上げ、また倫理創成プロジェクトでは ELSI プロジェクトを開始し、各々着実に研究を進めています。こうした活動を通して、本研究科は積極的に新たな分野に挑戦し、成果を社会に還元しています。

人文学研究科・文学部の教育目的は、人類がこれまで蓄積してきた人間および社会に関する古典的な文献の原理論的研究に関する教育並びにフィールドワークを重視した社会文化の動態的分析に関する教育を行い、新たな社会的規範および文化の形成に寄与する教育研究を実践することです。また、文学部の目標は人類の長い歴史の中で培われてきた豊かな知的遺産に学びつつ、現代世界で生起するさまざまな現象にも新鮮な関心を持ち、両者の相互参照を通じて新しい世界認識の基盤を構築することを目指す「場」となることです。

このような目的・目標を達成するために、従来からの伝統的な学問分野の高い専門性を追求しながら、同時に総合性・応用性も確保するために、上述のインスティテュートをはじめさまざまなプログラムを実施しています。今回の報告書の作成とそれをふまえた評価にもとづいて、現在の教育・研究状況を把握して検証し、課題を解決することによって、人文学研究科・文学部の一層の充実と発展を期したいと考えています。

第1部

I. 教育（文学部）

I-1. 文学部の教育目的と特徴

文学部は、人類の長い歴史の中で培われてきた豊かな知的遺産に学びつつ、現代世界で生起するさまざまな現象にも新鮮な関心を持ち、両者の相互参照を通じて新しい世界認識の基盤を構築することを目指す「場」である。以下に本学部の教育目的、組織構成、教育上の特徴について述べる。

I-1-1. 教育目的

- 1 文学部は、広い知識を授けるとともに、言葉と文化、人間の行動、歴史や社会に関する教育研究を行い、人間文化および現代社会に対する深い教養、専門的知識、柔軟な思考能力、豊かな表現能力を有する人の育成を目的とする。そして、磨かれ鍛えられた能力を十分に生かして学生が積極的に社会に貢献できるようになることを目指している。
- 2 このような教育目的を達成するために、現行の中期目標では、「教育憲章」に掲げた、「人間性」、「創造性」、「国際性」および「専門性」を身に付けた個性輝く人材を養成し、「豊富な研究成果を活かして、社会の変化を先導し、個人と国際社会が進むべき道を切り拓く高度な知識・能力を有する、次世代の研究者をはじめとした多様な人材の養成に努め、教育の更なる高みを目指す」ことを定めている。
- 3 神戸大学全学のディプロマ・ポリシー（DP）を踏まえ、人材育成の基本となる文学部 DP およびカリキュラム・ポリシー（CP）を2015年度に作成し、2024年度に改訂した《資料 I-1-1・I-1-2》。

《資料 I-1-1：神戸大学文学部ディプロマ・ポリシー（DP）》

神戸大学文学部ディプロマ・ポリシー

神戸大学文学部は、人類の文化的営みの蓄積としての人文学を、古典を通して深く理解するとともに、社会的対話によりそれを実践して行く能力を身につけ、現代社会において活躍できる人材を育成することを目的としている。また、徹底した少人数教育により、個々の学生の好奇心に応え、自ら問題を設定し、解決するスキルを学生に伝授することを目的としている。この教育の目的を達成するため本学部は、神戸大学が定める学位授与に関する方針に基づき、以下のように学士（文学）の学位授与に関する方針を定める。

1. 本学部は学修の目標を、神戸大学の学位授与に関する方針で定められた能力等に加え、以下の能力等を身につけることとする。

- ・人文学に関わる課題について自ら主体的に学び、協働して解決することができる能力（人間性）
- ・人文学の意義と重要性を理解し、複眼的に思考することで、人文学の発展に貢献することができる能力（創造性）
- ・異なる文化によって育まれた多様性を理解・受容し、必要な外国語でコミュニケーションをはかる能力（国際性）
- ・自らの好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことを通じて、人文学の幅広い知識を獲得する能力（専門性）
- ・人類の知的営みの蓄積である古典を通じた人文学共通の問題・課題についての理解力（専門性）
- ・文化・言語・学域の壁を越えた意思疎通および連携を可能にする社会的対話力（専門性）
- ・固有の学問的課題を知の普遍的課題に位置づける深い洞察力（専門性）

2. 本学部は、学士（文学）の学位を授与するための卒業の要件を、本学の所定の期間在学し、学部規則に定められた単位を修得して、神戸大学及び本学部の定める学修の目標を達成することとする。

《資料 I-1-2：神戸大学文学部カリキュラム・ポリシー（CP）》

神戸大学文学部カリキュラム・ポリシー

神戸大学文学部は、本学部が定める学位授与に関する方針および神戸大学が定める教育課程の編成及び実施に関する方針に基づき、以下の方針に則り教育課程を編成及び実施する。

1. 幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養し、本学のすべての学生に共通する学修の目標を達成するため、教養科目を開設する。
2. 人類の文化的営みの蓄積としての人文学を、古典を通して深く理解するとともに、社会的対話により、それを実践することを通じて人文学的素養を涵養し、「専門性」を学生に身につけさせるため、以下の専門科目及びその他必要と認める科目を開設する。
 - ・自らの好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積み、幅広い知識を身につけることができるように初年次セミナー、専門科目基礎科目、教養科目を開設する。
 - ・人類共通の叡智の蓄積である古典を通して人文学共通の問題・課題を発見できる理解力を身につけることができるように専門科目基礎科目、専門科目、教養科目を開設する。
 - ・文化・言語・学域の壁を越えた意思疎通および連携を可能にする社会的対話力を身につけることができるように専門科目、教養科目を開設する。
 - ・固有の学問的課題を知の普遍的課題に位置づけられる洞察力を身につけることができるように卒業論文、卒業論文関連科目を開設する。
3. 授業は、講義、演習、実験、実習、実技のいずれか、又はこれらの併用により行う。
4. 成績評価は、筆記試験、レポート、参加度、発表内容等により、学修目標に即して多面的、包括的な方法で行う。

I-1-2. 組織構成

上記の教育目的を実現するために、文学部は《資料 I-2》のような組織構成をとっている。人文学の古典的な学問領域である哲学、文学、史学を学ぶ3講座と、人間的知識と感性をシステムとして捉える「知識システム」講座、社会文化に関わる問題をフィールドワーク等によって深めていくことを目指す「社会文化」講座を置き、徹底した少人数教育によって専門的能力を陶冶することに重点を置いた教育課程を編成している。

《資料 I-2：組織構成》

学 科	講 座	専 修
人文学科	哲学	哲学
	文学	国文学、中国文学、英米文学、ドイツ文学、フランス文学
	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム	心理学、言語学、芸術学
	社会文化	社会学、美術史学、地理学

I-1-3. 教育上の特徴

- 1 文学部では、① 初年次に大学における人文学の基礎を学び、② それを踏まえて《資料 I-2》の15専修から1つを選び、2年次からその専修において少人数教育により専門的能力を鍛え、③ 各専修内の複数の専門分野で自身の関心を絞り込み、卒業論文を書きあげる。文学部では特に、学部教育の集大成として卒業論文の作成を重視し、1～2年間の指導期間を設定している。
- 2 文学部は、少人数教育による課題探究能力の開発を重視している。具体的には、個別の主題を掘り下げる「特殊講義」などのほか、数人から十数人で行う「演習」が専修ごとに豊富に用意されている。「実験」や、フィールドワークを含む「実習」も同じく少人数で実施される。これらの授業において共通の文献や資料を精読し、さらに自分で選択したテーマについて研究報告を行い、互いに議論をして深め合うことで、学生は各専門の研究姿勢・基礎知識・研究方法および研究倫理等を習得する。それと同時に、自ら課題を発見し、解決する能力を磨く。

3 文学部は、2011年3月にオックスフォード大学アジア・中東学部（締結時は東洋学部）と学術交流協定を締結し、「神戸オックスフォード日本学プログラム」（略称 KOJSP=Kobe-Oxford Japanese Studies Program）として、2012年10月から毎年オックスフォード大学アジア・中東学部で日本学を専攻する2年生全員を受入れている《資料 I-3》(<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/graduate/kojsp.html>)。これはユニット受入れ型のプログラムであり、文学部とオックスフォード大学アジア・中東学部との間の綿密な連絡・連携のもとに実施されており、派遣元から高い評価を受けるとともに、その交流は全学の取組みにも寄与している《資料 I-4》。オックスフォード大生は午前中に日本語の授業を受講し、午後は文学部の様々な授業を他の学生とともに受けている。全員が参加する「KOJSP 演習」では、各自が自由に課題を選び、指導教員や学生チューターとともに日本の諸相についての研究を進め、その成果をプログラム修了時の発表会で披露することになっている。「KOJSP 演習」で選んだ課題をオックスフォード大学での卒業論文とする学生も少なくない。彼らの学習・生活面でのサポートを文学部の学生チューターが担うなど、世界最高レベルの学生とともに勉学し、大学生活を送ることで、文学部の日本人学生に対しても大きな影響を与えており、勉学に対する意識を高め、国際的な視野を獲得することに貢献している《資料 I-5》。2013年度からはハートフォード・カレッジにて夏季英語講習が神戸大学文学部と共同で実施されており、毎回20名前後の神戸大学生がオックスフォード大学で学んでいる。これらの事業を中心に、文学部ではグローバル教育の一層の活性化を図っている。

《資料 I-3：神戸オックスフォード日本学プログラム留学生数》

年 度	所属大学名	出身国	奨学金	期 間
2020 ～ 2024 年 度	オックスフォード 大学 (7名)	連合王国 (5名) デンマーク (1名) ブルガリア (1名)	JASSO (COVID-19の影響 により渡日ができ ないため支給でき ず、返還)	2020年10月1日～2021年8月10日
	オックスフォード 大学 (13名)	連合王国 (9名) フランス (1名) ポーランド (1名) リトアニア (1名) ルーマニア (1名)	JASSO (COVID-19の影響 により2021年3月ま でに渡日できてい なかったため支給で きず、返還)	2021年10月1日～2022年8月4日
	オックスフォード 大学 (12名)	連合王国 (11名) 中国 (1名)	JASSO	2022年10月1日～2023年8月4日
	オックスフォード 大学 (9名)	連合王国 (8名) アイルランド (1名)	JASSO	2023年10月1日～2024年8月2日
	オックスフォード 大学 (9名)	連合王国 (5名) アメリカ (1名) 中国 (2名) アイルランド (1名)	JASSO	2024年10月1日～2025年8月4日

《資料 I-4：文学部の主導によって進むオックスフォード大学との交流》

神戸大学 HP に掲載されたニュースから抜粋：

- このプログラム (KOJSP) は、オックスフォード大学東洋学部日本語専攻の2年生全員が1年間を神戸大学文学部で学習するという、ユニット受け入れ型のプログラムです。
- (武田廣学長一行、当時) はオックスフォード大学副学長 Louise Richardson 教授を訪問し、オックスフォード大学側から東洋学部長 Ulrike Roesler 教授、日本学科長・元東洋学部長 Bjarke Frellesvig 教授と国際戦略室の Craig Morley 氏が懇談に参加しました。リチャードソン副学長が神戸オックスフォード日本学プログラムによる学生の受入に対して感謝を表明するとともに、オックスフォードと日本の交流事例を紹介しました。また、留学の重要性、日本の学生に留学を勧める方法等、活発な議論が行われました。
- 「一行はフレズビッグ教授とレイネル博士によるハートフォード・カレッジのキャンパスツアーに参加しました。フレズビッグ教授主催のランチミーティングでは神戸オックスフォード博士研究員フェローシップと

いう神戸大学の人文学研究科がオックスフォード大学の若手研究者を受け入れる新しい取組について活発な協議が行われました。この訪問は両機関の強力な関係を再確認する有意義な契機になりました。今後オックスフォード大学との更なる連携が期待されます。」

(2018年度、参照：http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2018_11_09_02.html)

(以下で随時更新：<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/graduate/kojisp.html>)

《資料 I-5：KOJSP に関するオックスフォード大学生および本学部チューターの声》

神戸大学文学部 HP から抜粋 (http://www.lit.kobe-u.ac.jp/let/pdf/0802_LET2020.pdf)：

○ オックスフォード大学生：「このプログラムを通して、日本語の授業に出るだけでなく、日本の学生と一緒に文学部の講義にも参加しています。また、4月から受講している「KOJSP 演習」では、「相撲は近代スポーツか」という、自ら選んだ論文テーマに取り組んで自らの研究を進めています。」

○ KOJSP チューター：「留学生と会話をするなかで日本の文化についてはもちろんですが、日本語そのものについて改めて考えることが増えました。自分と同世代の留学生の眼から見た世界に触れることが自分のなかで大きな経験になっていることを日々実感しています。」

(文学部案内パンフレットに最新情報を掲載)

I-2. 教育の実施体制

I-2-1. 基本的組織の編成

文学部では、学生1人1人の好奇心を、現代の人文学の学問的状況に即して問題化し検証する訓練を積むことで、人間文化に対する幅広い知識と深い洞察力を身につけた社会人および研究者を育成するという目的を達成するために、1学科（人文学科）を設け、その下に学問分野の観点から5大講座を置いている《資料 I-2》。教育組織の編成については、社会動向および学問動向を勘案した上で専門性に応じた適切な教育を実施するために適宜見直しており、現行の1学科制は2001年度に3学科（哲学科、史学科、文学科）から再編統合して新たに設置したものである。

教員の配置状況は、《資料 I-6》および《資料 I-7》のとおりである。教育の単位となる15の専修にはそれぞれ専任教員が配属され、演習・特殊講義・概論・入門・人文学基礎といった主要な科目を担当している。非常勤講師に担当を依頼している授業は、各専修の専任教員でカバーしきれない分野と、学芸員・教員などの免許・資格に関するものに限定されている。100名（2016年度以前の入学生は115名）の入学定員に対し専任教員は51名であり、大学設置基準が要求する専任教員数を十分に確保している。

《資料 I-6：教員の配置状況 2024年5月1日現在》

学科	収容定員	専任教員数 (現員)											助手		非常勤教員数 (R6年度)	
		教授		准教授		講師		助教		計						
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	総計	男	女	男	女
人文学科	400	17	7	10	3	5	7	2	1	34	18	52	1	0	47	26

※特任教員、兼務教員、専修外の教員を含む。

《資料I-7：専修別教員数 2024年5月1日現在》

専修	教授	准教授	講師	助教	専修	教授	准教授	講師	助教	専修	教授	准教授	講師	助教
哲学	2	1	2	0	フランス文学	1	0	1	0	言語学	3	0	0	0
国文学	1	2	3	0	日本史学	3	0	1	0	芸術学	2	0	1	0
中国文学	1	0	1	0	東洋史学	1	2	0	0	社会学	2	1	1	0
英米文学	2	1	0	1	西洋史学	3	1	0	0	美術史学	1	0	1	0
ドイツ文学	1	1	0	0	心理学	1	1	0	1	地理学	0	2	0	0

※兼務教員を含む。

入学者の選抜については、全学的な理念を踏まえながら文学部として求める学生像（アドミッション・ポリシー）を定め《資料I-8》、大学入試センター試験（2021年度より大学入学共通テスト）利用による基礎学力判断の後、個別学力試験では「国語」「外国語」「数学」（前期）、「外国語」「小論文」（後期）を課すことにより、理解力、読解力、語学力、問題解決能力、論理的思考力、表現能力などを総合的に判定している。

学生定員と現員の状況（2018～2024年度）については《資料I-9》、専修別の学生数は《資料I-10》の通りである。在籍学生数は毎年学生定員を若干超過しているが、その数は、標準卒業年限を超える学生を含めて学生定員の106～116%であり、おおむね適正範囲であると考えている。

《資料I-8：求める学生像（アドミッション・ポリシー）》

神戸大学が求める学生像

神戸大学は、世界に開かれた国際都市神戸に立地する大学として、国際的で先端的な研究・教育の拠点になることを目指しています。

これまで人類が築いてきた学問を継承するとともに、不断の努力を傾注して新しい知を創造し、人類社会の発展に貢献しようとする次のような学生を求めています。

1. 進取の気性に富み、人間と自然を愛する学生
[求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲]
2. 旺盛な学習意欲をもち、新しい課題に積極的に取り組もうとする学生
[求める要素：知識・技能、主体性・協働性、関心・意欲]
3. 常に視野を広め、主体的に考える姿勢を持った学生
[求める要素：主体性・協働性、関心・意欲]
4. コミュニケーション能力を高め、異なる考え方や文化を尊重する学生
[求める要素：知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・協働性]

●入学選抜の基本方針

以上のような学生を選抜するために、神戸大学のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーを踏まえ、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」「関心・意欲」を測るため、多面的・総合的な評価による選抜を実施します。

文学部が求める学生像

文学部では、人間がつくり上げてきた文化に対する好奇心を高め、多様な角度から人間存在の深みに光をあてる教育研究を行っています。各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につけた人を育成することを目標にしています。そのために、次のような学生を求めています

●文学部の求める学生像

1. みずみずしい感受性と想像力を持っている学生
[求める要素：思考力・判断力・表現力、関心・意欲]
2. 言葉や文化、人間の行動、歴史や社会に対する幅広い関心と好奇心を持っている学生
[求める要素：知識・技能、思考力・判断力・表現力、関心・意欲]
3. 基礎学力、とりわけ論理的思考力、日本語および外国語の読解力・表現力、情報リテラシーをそなえている学生
[求める要素：知識・技能、思考力・判断力・表現力]
4. 既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、探求していくことができる学生

〔求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲〕

※高等学校等で修得しておいてもらいたい内容

「国語」：文章を読み解く力。的確に表現する力。

「地歴・公民」：幅広い視野と総合的な知識。様々な社会現象を分析し捉える力。

「数学」：数学的に思考し、表現する力。

「理科」：自然を科学的に理解する力。

「英語」：外国語の読解力と表現力。外国語によるコミュニケーション能力。

●入学選抜の基本方針

以上のような学生を選抜するために、文学部のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーを踏まえ、以下の選抜を実施し下記の要素を測ります。

一般入試では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を測ります。

「志」特別入試では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」「関心・意欲」を測ります。

私費外国人（留）学生特別選抜では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」「関心・意欲」を測ります。

第3年次編入学試験では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」「関心・意欲」を測ります。

《資料 I-9：学生定員（収容定員）と現員の現況：各年度12月1日現在》

学科	年度	収容定員	現員	定員充足率 (年)
（人文学科 1学科のみ）	2018年度	430	457	106%
	2019年度	415	473	114%
	2020年度	400	463	116%
	2021年度	400	459	115%
	2022年度	400	455	114%
	2023年度	400	447	111%
	2024年度	400	441	110%

《資料 I-10：専修別の学生数（2024年度）》

専修	2年	3年	4年	専修	2年	3年	4年	専修	2年	3年	4年
哲学	8	11	9	フランス文学	4	1	2	言語学	5	8	6
国文学	13	12	16	日本史学	11	10	12	芸術学	8	8	9
中国文学	0	3	4	東洋史学	3	5	6	社会学	16	17	18
英米文学	7	9	6	西洋史学	6	1	6	美術史学	5	8	8
ドイツ文学	3	1	3	心理学	10	8	13	地理学	2	6	7

I-2-2. 教育内容、教育方法の改善に向けた取組み

文学部では、1年次生を対象として、少人数ゼミ、オムニバス形式の講義、専門分野ごとの入門科目を開講しており、専門的知識の修得とともに、広い人文学的な視座の獲得が可能となっている。

教育の実施体制を点検し改善していくため、評価委員会を置き、授業評価アンケートの実施など、教育に関わる評価作業を行うだけでなく、教員の教育方法および技術の向上を図るためにファカルティ・ディベロップメント（以下、「FD」と略称）を開催している。文学部のFDは、2011年度からは評価委員会が中心となり、教務・学生の2委員会の協力を得て行われている。また、学生による授業評価アンケート、教員相互の授業参観・評価（ピアレビュー）を定期的実施し、その結果は、FDにおいて評価委員長から報告され、

今後のカリキュラム編成や授業方法の改善のために活用するとともに、中期目標の実現に向けた教育課程の改善が図られている《資料 I-11》《資料 I-12》。さらに、毎年度、評価報告書を作成し、独自に外部評価を受け、達成点と改善点を的確に把握し、それを教員・職員間で共有することに努めている《資料 I-13》。

こうした活動を通して、個々の科目の授業内容を改善することはもちろん、カリキュラム構成や授業方法等の改善も頻繁になされており、たとえば、グローバル化に対応した授業として「グローバル人文学プログラム」に加えて、神戸オックスフォード日本学プログラムで受け入れているオックスフォード大学の学生が受講する授業等も展開されている。

《資料 I-11：2020年度～2024年度の FD 実施状況》

開催日	テーマ	参加者数
2020年5月27日	Zoom、YouTube、Google Forms を利用したオンデマンド講義の準備について	55
2020年7月29日	学生アンケートの集計結果について	56
2020年9月2日	大型科研費応募に向けて	55
2020年9月23日	ピアレビューの実施結果および今後の検討について	54
2020年9月23日	対面授業等の実施に係る注意事項について	54
2020年7月13～17日	リアルタイムのオンライン講義、オンデマンド形式の講義を含む8科目を対象にピアレビューを実施し遠隔授業実施のためのスキルを身につける	37
2020年10月7日	これまでの研究力強化の取り組みの報告と R3 年度科研費について	53
2021年3月19日	JSPS 特別研究員（学振 DC）の制度概要および獲得に向けた申請書の書き方・準備について	59
2021年4月28日	ハイフレックス型授業の実施にあたって	52
2021年6月23日	ハラスメントの防止に向けて	53
2021年7月28日	学生アンケート各種の集計結果について	53
2021年7月28日	科研費セミナー「大型科研費の応募に向けて」	53
2021年8月27日	ICT を活用した授業形態：実践編	16
2021年11月24日	神戸大学の存在感向上のために一プレスリリースのお願い	56
2022年1月19日	2021 年度文学部・人文学研究科ピアレビューについて	57
2022年2月9日	外国語による教育：問題と機会	58
2022年3月19日	JSPS 特別研究員（学振 DC）の制度概要および獲得に向けた申請書の書き方・準備について	54
2022年5月25日	ICT を活用した授業にむけて	54
2022年6月8日	大型科研費の獲得へ向けて	55
2022年7月27日	KAISER2022 の導入について	53
2022年9月7日	2022 年度ピアレビューの結果報告と分析	48
2022年12月21日	各種学生アンケート集計結果についての分析	55
2023年6月14日	2022 年度後期の「授業振り返りアンケート」について	52
2023年6月28日	科研費の申請に向けて ー申請書の書き方ー 基盤研究 B、C の対策	54

2023年11月15日	2023年度ピアレビューについて（報告）	55
2023年12月20日	神戸大学の広報サービス等について	58
2023年12月20日	Short Introduction to the Philosophical and Atmospheric Research at Rome Tor Vergata University	58
2024年4月24日	JSPS 特別研究員（学振 DC）の獲得に向けた準備について	52
2024年6月26日	調書の基本的な書き方	54
2024年7月24日	2024年度文学部・人文学研究科ピアレビュー（授業参観）について	52
2024年10月2日	ハラスメントの防止に向けて	50
2024年10月16日	LIER-FYT: an interdisciplinary research center dedicated to the study of social reflexivity	54
2024年11月20日	The challenges to UK higher education resulting from the withdrawal of the UK from the EU and the COVID-19 pandemic	60
2025年2月18日	KOJSP の現状と課題	56

《資料 I-12：2024年度 ピアレビュー実施結果 抜粋》

<p>(1) 実施期間 2024年7月1日(月)～5日(金)</p> <p>(2) 参観の対象とした授業について 参観対象の授業総数：8</p> <p>講座入門および人文学導入演習：8 → 文学部のカリキュラムにおいて重要かつ特色ある初年次教育・グローバル科目を対象に対面で実施。 → 講義の参観とは異なる独自の意義があるとの判断から、演習科目も対象とした。</p> <p>(3) 参観レポート提出者 31名 ※ 61%の提出率（全教員数：51名）</p> <p>(4) 授業参観レポートの集計結果</p> <p><u>1. 授業改善上、参考になった項目（複数回答）</u></p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">説明の仕方</td> <td style="text-align: right;">23</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">配布資料・板書などの視覚資料</td> <td style="text-align: right;">22</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">学生とのインタラクション</td> <td style="text-align: right;">13</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">TAの使い方</td> <td style="text-align: right;">4</td> </tr> </table> <p><u>2. 自由記述の主な内容（特に参考になった点）</u></p> <p><入門講義></p> <ul style="list-style-type: none"> ・一年生向けの授業で求められる分かりやすい授業の進め方・語り方は、学生とのインタラクティブな進め方も含めて、とても参考になった。 ・コメントシートの内容を丹念に拾いながらリプライする方法は、自分の授業でも実践しようと思った。 ・配布資料や授業準備はいつもどの程度準備すべきか悩んでいたが、今回授業を見学することで、ある種の客観的な準備量が知れてよかった。 ・授業での抽象的な内容ともうまく調和・融合していて、とても良かった。授業のはじめに、前回書かせたコミュ 	説明の仕方	23	配布資料・板書などの視覚資料	22	学生とのインタラクション	13	TAの使い方	4
説明の仕方	23							
配布資料・板書などの視覚資料	22							
学生とのインタラクション	13							
TAの使い方	4							

ニケーションペーパーの一部を紹介し、丁寧にコメントしていたのがよかった。

- ・授業冒頭に、前回授業での学生コメントを紹介する時間を設けていた。大教室にも関わらず双方向的な授業を実現する手法で、参考になった。
- ・身近なトピックに話題をしぼり、1回生にも親しみやすい授業であったと感じました。配布資料も丁寧に作成されており理解の助けになりました。
- ・身近なテーマを取り上げることにより、初学者にもわかりやすい授業を心がけておられたことが印象的だった。
- ・身近な話題を例に出して、黒板を使いつつ(教室の一番後ろからだ、私の視力が悪いこともあり、少し見えにくかったが)、レジュメの議論を補っているところが参考になった。
- ・学生にわかりやすいレジュメを作成している点が参考になりました。特に、具体的な事例を使って理解を促している方法が非常に有用だと感じました。自身の授業でもこの手法を取り入れてみたいと思います。
- ・今回の授業で扱うテーマのほか、教員の持ちネタをいくつか示しているのが参考になった。これから専修選択を行う1年生が相手なので、様々な話題を最初に示すのが、むしろよいのかもしれないと思った。
- ・後期の人文学基礎の内容が紹介されていた。当該専修を検討する学生にとっては、様々な情報が有機的につながるように思われる。
- ・学生たちにとって身近なテーマで専門的な内容を講じる筋立ては参考になりました。
- ・専門的な事項について、噛んで含めるような前置きをせずとも学生たちは付いて行っていたように見受けられましたので、自分の授業でも概説的な説明を省いてもいいのかもしれないと考えました。
- ・これはピアレビューの運営上の問題かもしれませんが、配布資料は紙媒体ではなく、BEEF 配布の電子媒体だったようです(学生の多くが机上でPCを見ていましたので)。ただピアレビューに参加する教員は、当該授業のBEEF コンテンツを見られませんので、配布資料についての知見を得ることはできません。
- ・331 教室の最後尾の席からは、PPT 画面の小さい赤い文字が読みづらかった。
- ・講座教員で作成された教科書を使用しつつ、パワーポイント資料なども併用していて非常にわかりやすかった

<人文学導入演習>

- ・学生間の活発な討議を促す手腕は流石であった。
- ・3人の1年生が書籍を読み発表し、その発表内容に対して教員や先輩がコメント・質問するというスタイルであった。報告者は「演習」という形式に不慣れであるため、人文系の正統的な演習スタイルを学べるよい機会となった。発表者が作成した資料も充実したものであり、質問・コメントへの受け答えも積極的であったことが印象に残った。学生たちが演習に主体的に取り組む姿から、今後の演習運営のヒントを得たような気がする。
- ・まだ1年生向けの演習の授業を受け持った経験がなく、今回の授業見学は大変勉強になりました。その研究の手法や考え方は、広く人文学研究一般に応用できるものだと感じました。上級生(院生?)からも積極的なコメントがあつて、発表担当の1年生にも色々気づきがあったことと思います。
- ・アクチュアルなテーマを扱った英語文献を読み、内容について考える授業は、導入演習とは思えないレベルの高さで、驚きました。教員が一方向的にしゃべる形にならないよう、学生の発言を促していた点がとてもよ

いと思いました。

- ・まずは、学生が英文による配布資料を翻訳した上で、その段落で筆者は何を語ろうとしているのかを、深く読み取ることを念頭に入れた授業でした。学生の理解が追いつかない箇所では、教員がその解を導き出せるよう、段階的に問いかけをしていました。効果的なスキヤフォールディングにより、学生の理解が促されていた点で、大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・学生さんに馴染みの（おそらく誰もが読んだことのある）作品を取り上げ、作者の人生、時代背景を簡潔かつ的確に説明し、英語の朗読も交えながら、ひとつの解釈を提示し、さらなる問いも提示していて、非常に興味深い導入になっていたと思います。導入のための教材選択の参考にさせていただきます。
- ・リアクションペイバを授業開始時に配布し、学生が随時コメント、質問を書き込めるようにしていたところが良かった。また英文テキスト原文の読み上げが美しく、聴覚に訴えるところも良かった。
- ・学生にわかりやすい事例を織り交ぜながら説明している点や、学生とコミュニケーションを取りながら授業を進めている点が、自身の授業にあたってより積極的に取り入れるべきこととして参考となった。
- ・講義内容および配付資料が大変よく整理されており、門外漢でも隔々まで理解することができた。大学の講義については、必ずしもわかりやすさを追求する必要はないと考える向きもあるとは思いますが、わかりやすいという点はやはり魅力であるし、また、講義者が本当の意味においてその分野に通じていることの証左となり得る重要な点でもあると思う。
- ・人文学導入演習ということで1年生向けの授業かと思いますが、内容はかなり専門的であるように感じました。しかし1年生向けでもそのようにしっかりと専門的な話をするのはとても良いと思いました。
- ・2つの対立する考え方を理論面・実践面の両面から考察されており、非常に興味深く感じました。このような対立は、現代社会の様々な面で見られるように思われ、人文学からの貢献の可能性を感じました。質の高い教育を行うためには、研究と教育の往還が重要であることを改めて感じました。
- ・授業の内容はもちろんのこと、スライドの構成、文章と画像の配置、分量、強調の仕方と、そのスライド資料を用いた授業の進行方法や受講者との質疑の挟み方について、とても参考になりました。自分の授業にも活かせるようにいたします。
- ・資料作成の技術が高く魅力的であった。
- ・学生の考える余地が適度に残された講義だと思いました。その点がとても参考になりました。課題の難易度はやや高い（日頃から色々なものに興味を持ってアンテナを張っていない学生にとっては、調べ物をするのに結構な労力を要するし、講義内容をきちんと理解できていなければ、事例の分析が十分にできずとんちんかんな回答になってしまいそう）ように感じましたが、その分、理解度、思考力を問うことができるものになっていたと思います。意欲のある学生なら、講義内容から発展した素材を楽しんで見つけ出すことができそうですし、仮に課題自体が上手くこなせなかったとしても今後の学習のきっかけになりそうです。課題設定の仕方も勉強になりました。
- ・設定したテーマについて、具体的事例をいくつか丁寧に紹介されながら論じられたため、門外漢であっても大変理解しやすかった。また、解説した事例について結論は述べずに、学生に多角的に考えさせるような課題を最後に出題することで、能動的な考察を促す工夫がなされていて、授業のスタートとゴールの設定が素晴らしいと思った。

- ・1回生にはやや難しいのかな、とも思いましたが、学生たちが意外と付いていく姿を見て、自分は分かりやすく説明しすぎる傾向があるのかも、と反省しました。1回生だからこそ、専門的学問に対するあこがれや恐れ（良い意味での）を感じることも重要なかと思いました。それから、資料が細かく作りこんであり、感心しました。
- ・情報や知識をたくさん教え込むのではなく、事例から学生に考えさせ、それをレポートの形でまとめさせるのは、思考能力を伸ばすうえで良い試みと思った。
- ・まずは単純に講義内容が興味深かったです。学生に戻った気分で前のめりで拝聴させていただきました。異なる分野の人間にも非常に刺激的なお話でした。なかなか専門性の高い内容だったと思いますが、先生が様々な具体例を挙げてくださるので、学生も内容を理解しやすかったのではないかと思います。また、スライドも要点が簡潔にまとめられていて見やすかったです。色々と参考になりました。

《資料 I-13：2020年～2024年の外部評価実施状況》

実施日	外部評価委員
2020年9月2日	上田功（名古屋外国語大学外国語学部・教授）
2021年11月30日	伊藤公雄（京都産業大学・教授、京都大学・大阪大学名誉教授）
2022年9月16日	大城直樹（明治大学文学部・教授）
2023年10月11日	山上浩嗣（大阪大学大学院人文学研究科・教授）
2024年10月30日	谷口淳一（京都女子大学文学部・教授）

I-3. 教育内容

I-3-1. 教育課程の編成

文学部では、ディプロマ・ポリシーにおいて、学生が卒業までに達成を目指す目標として、特に次の3点を重視している。1) 各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につける。2) 人文学共通の問題・課題を、人類の知的営みの蓄積である古典を通じて理解する。3) 文化・言葉・学域の壁を越えた意思疎通および連携を可能にする社会的対話力を身につける。これらを実現するために、以下のような教育課程を組んでいる。

教育課程は、「専門科目」および「専門科目以外の科目」で構成されている。「専門科目以外の科目」は、「全学共通科目」である基礎・総合・高度教養科目、外国語科目、情報科目、健康・スポーツ科目および「資格免許のための科目」から成り、多様な授業科目を開講するとともに教育職員免許および学芸員資格を取得するために必要な授業科目も提供している。「専門科目」は、講義形式による概論、演習と特殊講義を中心に構成され、多彩な研究領域に対応する多様な内容、形態の授業科目が設けられている。また、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、韓国語、古典ギリシア語、ラテン語の外国語科目のほか、専門科目を学ぶにあたって必要となる語学力を涵養する授業も開設されている。以上の形で、幅広い知識と深い洞察力を身につけることができるようにしている。

文学部では、新入生全員を対象とした導入教育として、1年次前期に5つの講座がそれぞれ入門の講義を行うとともに、「人文学導入演習」を複数開講し、今後の教育に必要とされる基本的な視座や研究・学習方法の基礎を実践的に身につけさせている。また、2016年度より「初年次セミナー」を実施し、神戸大学生および文学部生として身につけておくべき初歩的知識の修得を目指している。さらに、1年次後期には15の専修がそれぞれ開講する「人文学基礎」においてより具体的かつ専門的な研究内容を学ぶ準備となる授業を提供している。文学部の学生は、このようにして人文学の基礎を学び、人文学共通の問題と課題を理解し、それを踏まえて15専修の中から1専修を自ら選び、その専修において、徹底した少人数教育によって専門的能力を陶冶し、さらに、各専修内に複数ある専門分野の中で自身の関心を絞り込んで卒業論文を作成することになる。

「専門科目」の内容としては、例えば、「西洋史演習」では、フランス語論文を精読することで文献読解力

の向上を図るとともに、学生間の議論をとおして問題探求能力を高めることを目指している。このような授業は古典理解をとおして人文的課題を考える良い例であろう。

文学部の教育方針を明確化するため、2006年度には履修モデルケースを専修毎に作成し提示した。また2014年度から取り組んできた開講科目すべてに固有のナンバーを割当てる作業（ナンバリング）が完了し、2016年度以降はそれぞれの学年・専修において必要とされる科目が明確化されている。

I-3-2. 学生や社会からの要請への対応

文学部では、グローバル化が進む現代社会における諸問題に対応し、また社会からの要請に応えるため、教育課程の編成やそれらに配慮した取組みを以下のとおり実践している。

1. 他学部科目の履修

文学部では、他学部の専門科目を文学部開講専門科目の自由選択科目と同等に扱い、卒業要件単位として認めている。学生は、一定の要件のもとで、文学部の専門科目と他学部の専門科目から30単位を自由選択科目として修得し、卒業に必要な単位とすることができる。また、文学部、国際人間科学部、経済学部、農学部、工学部および医学部が共同で実施する「神戸大学 ESD コース」(Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育)が設定されており、関係学部の授業を体系的に履修することができるようになった。ESD コースを修了しようとする学生は修了要件《資料 I-14》の定めるところに従い、13 単位以上を修得しなければならない。修了が認定された者には修了認定書が授与される。「神戸大学 ESD コース」の授業科目として、文学部では「環境人文学」を開講し、広く環境問題に関わるアクションリサーチ型演習と講義を行っている。持続可能な社会のためには、特に市民・住民によるイニシアチブが重要であることを踏まえ、ボランティア活動や NPO 活動といった事例を積極的に講義で扱っている。(「ESD コース」については、「第2部 II-5. ESD コース」を参照。)

《資料 I-14: ESD コース修了要件 授業科目名、単位数、開講時期および開講学部等

授業科目区分等	授業科目名	単位数	必要修得単位数	配当年次	開講学部等	
基礎科目	実践農学入門	2	1	1年次	農学部	
	I 群 ESD基礎 (持続可能な社会づくり1)	1		1年次	教養教育院	
	ESDボランティア論	1		2年次	教養教育院	
	ESD実践論	1	1年次	国際人間科学部		
	II 群	ESD論 (持続可能な社会づくり2) A	1	2	1年次	教養教育院
		ESD論 (持続可能な社会づくり2) B	1		1年次	教養教育院
ESD生涯学習論A		1	1年次		教養教育院	
ESD生涯学習論B		1	1年次		教養教育院	
関連科目	環境人文学講義 I	2	6	2年次	文学部	
	環境人文学講義 II	2		2年次	文学部	
	比較政治社会論	2		2年次	国際人間科学部	
	スポーツコミュニティ形成論	2		3年次	国際人間科学部	
	幼児心理学演習	2		2年次	国際人間科学部	
	初等理科論	2		2年次	国際人間科学部	
	生活空間計画論	2		2年次	国際人間科学部	
	緑地環境論	2		2年次	国際人間科学部	
	知覚と行為(知覚・認知心理学)	2		2年次	国際人間科学部	
	グローバル開発政策論	2		2年次	国際人間科学部	
	生物多様性科学	2		2年次	国際人間科学部	
	環境社会学	2		2年次	国際人間科学部	
	環境経済学	2		2年次	国際人間科学部	
	途上国農村地域開発論	2		2年次	国際人間科学部	
	メディア論	2		3年次	国際人間科学部	
	ライフコースの心理学(発達心理学)	2		3年次	国際人間科学部	
市民科学教育論	1	1年次	国際人間科学部			

	障害共生教育論	2		2年次	国際人間科学部
	コミュニティ・ジェンダー論	2		2年次	国際人間科学部
	国際法Ⅰ	2		2年次	法学部
	国際政治経済	2		2年次	法学部
	環境法	2		3年次	法学部
	社会保障法	2		2年次	法学部
	国際法Ⅱ	2		2年次	法学部
	国際法Ⅲ	2		3年次	法学部
	社会コミュニケーション入門	2		2年次	経済学部
	社会環境会計	2		2年次	経営学部
	人的資源管理	2		2年次	経営学部
	海洋生物学	2		2年次	理学部
	生態科学	2		3年次	理学部
	地域医療学	1		1～3年次	医学部医学科
	地域医療システム学	1		3年次	医学部医学科
	行動科学	1		3年次	医学部医学科
	公衆衛生学	3		3年次	医学部医学科
	国際保健	1		2年次	医学部保健学科
	災害保健	1		3年次	医学部保健学科
	緩和ケア論	1		4年次	医学部保健学科
	リハビリテーション工学・福祉用具学	1		3年次	医学部保健学科
	現代医療と生命倫理	1		1年次	医学部保健学科
	I PW概論	1		1年次	医学部保健学科
	公衆衛生学	1		2年次	医学部保健学科
	環境・食品・産業衛生学	1		2年次	医学部保健学科
	小児疾病論	1		2年次	医学部保健学科
	地球環境論	1		1年次	工学部
	水文学	1		3年次	工学部
	河川流域工学	1		3年次	工学部
	国際関係論	1		3年次	工学部
	都市地域計画	2		2年次	工学部
	合意形成論	1		3年次	工学部
	農と植物医科学入門	2		1年次	農学部
	熱帯有用植物学1	1		3年次	農学部
	熱帯有用植物学2	1		3年次	農学部
	樹木学	2		1年次	農学部
	食料生産管理学	2		2年次	農学部
	森林生態学	2		2年次	農学部
	土壌と環境	2		3年次	農学部
	森林保護学	2		3年次	農学部
	食料産業論	2		3年次	農学部
	途上国経済論	2		3年次	農学部
	現代海洋政策概論-1	1		2年次	海洋政策科学部
	現代海洋政策概論-2	1		2年次	海洋政策科学部
	海洋法政策概論-1	1		2年次	海洋政策科学部
	海洋法政策概論-2	1		2年次	海洋政策科学部
	阪神・淡路大震災と都市の安全	1		2年次	教養教育院
	ボランティアと社会貢献活動A	1		1年次	教養教育院
	ボランティアと社会貢献活動B	1		1年次	教養教育院
フィールド 演習科目	E S D演習Ⅰ（環境人文学）	2	4	2年次	文学部
	E S D演習Ⅱ（環境人文学）	2		2年次	文学部

E S D演習 I 1 (国際人間科学)	1	2年次	国際人間科学部
E S D演習 I 2 (国際人間科学)	1	2年次	国際人間科学部
E S D演習 II 1 (国際人間科学)	1	2年次	国際人間科学部
E S D演習 II 2 (国際人間科学)	1	2年次	国際人間科学部
環境法演習	2	3年次	法学部
国際法演習	2	3年次	法学部
国際関係論演習	2	3年次	法学部
E S D演習 I (環境経済学 I)	2	3年次	経済学部
E S D演習 II (環境経済学 II)	2	3年次	経済学部
初期体験臨床実習	1	1年次	医学部医学科
早期臨床実習 1	1	2年次	医学部医学科
早期臨床実習 2	1	3年次	医学部医学科
地域社会医学実習	1	4年次	医学部医学科
I P W	1	4年次	医学部医学科
初期体験実習	1	1年次	医学部保健学科
I P W統合演習	1	4年次	医学部保健学科
研究ゼミナール	1	2年次	医学部保健学科
看護研究方法論	1	3年次	医学部保健学科
寄生虫検査学実習	1	3年次	医学部保健学科
検査統合演習	1	3年次	医学部保健学科
日常生活活動学実習	1	2年次	医学部保健学科
理学療法地域医療実習	1	3年次	医学部保健学科
基礎作業学実習 I	1	2年次	医学部保健学科
基礎作業学実習 II	1	3年次	医学部保健学科
兵庫県農業環境論 A	1	2年次	農学部
兵庫県農業環境論 B	1	2年次	農学部
実践農学	2	2年次	農学部
E S D総合演習	2	3年次	教養教育院
必要修得単位数の合計		13単位 以上	

2. 海外協定校との単位互換

文学部は全学協定および部局間協定に基づき海外の大学と単位互換協定を締結している《資料 I-15》。この制度に基づく2019年度～2024年度の実績は、受け入れ39名、派遣12名である。2019年度～2024年度の実績の受入・派遣状況詳細についてはそれぞれ《資料 I-16》、《資料 I-17》を参照されたい（注：2020年度および2021年度は COVID-19の影響により受入・派遣ともに大幅に制限されたため、元年度の実績を通常時の例として示した）。交換留学等によりこれら海外の協定校で取得した単位のうち60単位までを卒業に必要な単位として認定することで、より積極的な留学を支援している。

《資料 I-15：単位互換協定を締結している海外の大学 2025年3月現在》

協定校	国名	大学間協定	部局間協定
木浦大学校	大韓民国	○	
成均館大学校	大韓民国	○	
韓国海洋大学校	大韓民国	○	
ソウル国立大学校	大韓民国	○	
高麗大学校	大韓民国	○	
韓国外国語大学校	大韓民国		○
山東大学	中華人民共和国	○	

華東師範大学思勉人文高等研究院	中華人民共和国	○	
中山大学	中華人民共和国	○	
南京大学	中華人民共和国	○	
中国海洋大学	中華人民共和国	○	
復旦大学	中華人民共和国	○	
北京外国語大学	中華人民共和国	○	
武漢大学	中華人民共和国	○	
上海交通大学	中華人民共和国	○	
清華大学	中華人民共和国	○	
江南大学	中華人民共和国		○
鄭州大学	中華人民共和国		○
浙江大学	中華人民共和国		○
香港大学	中華人民共和国		○
東北大学	中華人民共和国		○
国立台湾大学	台湾	○	
国立政治大学	台湾	○	
モンゴル国立大学	モンゴル	○	
西オーストラリア大学	オーストラリア	○	
ウーロンゴン大学	オーストラリア	○	
オーストラリア商船大学	オーストラリア	○	
オタワ大学	カナダ	○	
グラーツ大学	オーストリア	○	
インスブルック大学	オーストリア		○
カレル大学	チェコ	○	
パリ第2大学	フランス	○	
パリ第10大学	フランス	○	
パリ第7大学	フランス	○	
リール大学	フランス	○	
エクス=マルセイユ大学	フランス	○	
バルセロナ大学	スペイン	○	
バーゼル大学	スイス	○	
バーミンガム大学	連合王国	○	
SOAS ロンドン大学東洋アフリカ研究学院	連合王国	○	
エセックス大学	連合王国	○	
ライデン大学	オランダ	○	
ソフィア大学	ブルガリア	○	
ブリュッセル自由大学	ベルギー	○	
ヴェネツィア大学	イタリア	○	
ボローニャ大学	イタリア	○	

トリノ大学	イタリア	○	
ヤゲウォ大学	ポーランド		○
ニコラウス・コペルニクス大学	ポーランド	○	
ワルシャワ大学	ポーランド		○
キール大学	ドイツ	○	
マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク	ドイツ	○	
トリーア大学	ドイツ	○	
ハンブルク大学	ドイツ	○	
ダルムシュタット工科大学	ドイツ	○	
ベルリン自由大学	ドイツ	○	
ブカレスト大学	ルーマニア	○	
「ディミトリエ・カンテミル」キリスト教大学	ルーマニア		○
サンクトペテルブルク大学	ロシア	○	
エトヴェシュ・ロラーンド大学	ハンガリー	○	
ブタペルト・コルヴィヌス大学	ハンガリー	○	
プーラ大学	クロアチア		○
ベオグラード大学	セルビア		○
ヘブライ大学	イスラエル	○	

《資料 I-16 : 交換留学 (受入) 実績》

年度	所属大学名	出身国	奨学金	期 間
2019 年度	北京外国語大学	中国		2019年4月1日～2020年3月31日
	清華大学	中国	JASSO	2019年4月1日～2019年9月30日
	清華大学	中国	JASSO	2019年4月1日～2019年9月30日
	バーミンガム大学	連合王国	JASSO	2019年4月1日～2019年9月30日
	サンクトペテルブルク大学	ロシア		2019年4月1日～2019年9月30日
	木浦大学校	韓国	HUMAP	2019年10月1日～2020年9月30日
	中山大學	中国	HUMAP	2019年10月1日～2020年9月30日
	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	2019年10月1日～2020年3月31日
	武漢大学	中国	JASSO	2019年10月1日～2020年9月30日
	エクス=マルセイユ大学	フランス	JASSO	2019年10月1日～2020年9月30日
	プーラ大学	クロアチア		2019年10月1日～2020年3月31日
	プーラ大学	クロアチア		2019年10月1日～2020年3月31日
2022 年度	パリ大学	フランス		2022年4月1日～2022年9月30日
	バーミンガム大学	連合王国		2022年4月1日～2022年9月30日
	リール大学	フランス		2022年4月1日～2022年9月30日
	木浦大学校	韓国		2022年4月1日～2023年3月31日
	カレル大学	チェコ		2022年4月1日～2023年3月31日
	国立政治大学	台湾		2022年4月1日～2023年3月31日
	インスブルック大学	オーストリア		2022年10月1日～2023年3月31日
	北京外国語大学	中国	HUMAP	2022年10月1日～2023年9月30日

	トリーア大学	ドイツ		2022年10月1日～2023年9月30日
	ソフィア大学	ブルガリア		2022年10月1日～2023年9月30日
	モンゴル国立大学	モンゴル		2022年10月1日～2023年9月30日
2023 年度	ベオグラード大学	セルビア		2023年4月1日～2024年3月31日
	南洋理工大學	シンガポール		2023年4月1日～2023年9月30日
	中山大學	中国		2023年4月1日～2024年3月31日
	中国海洋大學	中国		2023年4月1日～2023年9月30日
	南京大學	中国		2023年4月1日～2023年9月30日
	国立政治大學	台湾		2023年4月1日～2024年3月31日
	ヤゲウォ大学	ポーランド		2023年4月1日～2023年9月30日
	木浦大学校	韓国		2023年10月1日～2024年3月31日
	北京外国語大学	中国		2023年10月1日～2024年9月30日
	バーミンガム大学	連合王国		2023年10月1日～2024年9月30日
	パリ・シテ大学	フランス		2023年10月1日～2024年9月30日
	エクス=マルセイユ大学	フランス		2023年10月1日～2024年9月30日
	オタワ大学	カナダ		2023年10月1日～2024年9月30日
	モンゴル国立大学	モンゴル		2023年10月1日～2024年9月30日
	武漢大学	中国		2023年10月1日～2024年3月31日
	バーゼル大学	スイス		2023年10月1日～2024年3月31日
2024 年度	木浦大学校	韓国	神戸大学基金	2024年4月1日～2025年3月31日
	南洋理工大學 (4名)	シンガポール		2024年4月1日～2024年9月30日
	山東大學	中国	神戸大学基金	2024年10月1日～2025年3月31日
	中山大學	中国	神戸大学基金	2024年10月1日～2025年9月30日
	北京外国語大学	中国	HUMAP	2024年10月1日～2025年9月30日
	インスブルック大学	オーストリア		2024年10月1日～2024年11月30日
	ブリュッセル自由大学	ベルギー	神戸大学基金	2024年10月1日～2025年3月31日
エクス=マルセイユ大学	フランス		2024年10月1日～2025年9月30日	

※ HUMAP：兵庫・アジア太平洋大学間交流ネットワーク、JASSO：日本学生支援機構

《資料I-17：交換留学（派遣）実績》

年度	派遣大学名	派遣国	奨学金	期 間
2019 年度	国立台湾大学	台湾	JASSO	2019年9月2日～2020年6月19日
	パリ・ナンテール大学	フランス	JASSO	2019年9月2日～2020年6月30日
	パリ・ナンテール大学	フランス	JASSO	2019年9月2日～2020年6月30日
	パリ・ディドロ(第7)大学	フランス	JASSO	2019年9月3日～2020年6月29日
	エセックス大学	連合王国	JASSO	2019年9月30日～2020年6月26日
	トリーア大学	ドイツ		2019年10月28日～2020年2月14日
	エクス=マルセイユ大学	フランス	JASSO	2020年1月9日～2021年1月16日
2022 年度	ニューサウスウェールズ大学	オーストラリア		2023年1月3日～2023年5月18日
	グラーツ大学	オーストリア		2023年2月7日～2023年6月30日

2023年度	ソウル国立大校	韓国		2024年3月4日～2024年12月19日
	トリーア大学	ドイツ		2024年4月14日～2025年2月17日
	エクス=マルセイユ大学	フランス		2024年1月22日～2024年6月28日
2024年度	ヴェネツィア大学	イタリア		2024年9月9日～2025年2月1日
	トリーア大学	ドイツ		2024年9月25日～2025年7月19日
	グラーツ大学	オーストリア		2025年2月4日～2025年6月27日
	トリーア大学	ドイツ		2025年3月19日～2025年7月25日

3. グローバル教育への取組み

2008年度からは、語学科目以外に全てを英語で行う授業科目を開講し、アカデミックかつ実践的な英語能力の涵養を目指している。具体的には、「グローバル英語力教科演習」「グローバル人文学特殊講義」などから成る「グローバル人文学英語科目」を、2単位必修としている。語学学習への多様な支援として、1年生のTOEFL ITP受験者に対し受験料を補助する制度を設けており、海外留学や国際交流への意識向上を図っている。

文学部では、神戸オックスフォード日本学プログラムなどによって、国際的な場で活躍できる学生を育成してきており、2012年度から2022年度まで、文部科学省「グローバル人材育成推進事業（タイプB特色型）」で採択された「問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成」プログラム（2014年度より名称変更）に基づき「グローバル人文学プログラム」を実施していた。この教育プログラムは現在終了しているが、目的として掲げた「人文学的課題をグローバルな視点から考察し、日本文化の深い理解を基に異文化との対話を重ねながら、現代社会における諸問題を解決に導いていくリーダーシップとコミュニケーション能力を持った人材」の育成に、相応の成果を上げることができた。このときに得られた知見は少なくなく、オックスフォード大学ハートフォード・カレッジにおける2週間の短期留学プログラムである「オックスフォード夏季プログラム」など、グローバル社会で活躍できる優れた外国語能力とコミュニケーション能力を育成するための授業科目の一部は、現在でも存続している。長年にわたる蓄積の中で、グローバルな視座を有した学生を多く輩出している。

4. 地域との連携による新たな教育研究の開発

地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成を目的とした「地域歴史遺産保全活用基礎論A・B」「地域歴史遺産保全活用演習A・B」を文学部専門科目として開講し、史料の保全と活用を通じて、地域との有機的な交流がなされている。

I-4. 教育方法

I-4-1. 授業形態の組合せと学習指導法上の工夫

授業形態は、主として講義と演習からなり、2024年度の開講科目数は講義科目が582（約56%）、演習・実習科目等が464（約44%）となっており、少人数教育を徹底している（資料I-18）。

講義科目の次に演習科目が多いのは、人文学の学問の根幹をなす文献読解能力、資料調査分析能力、表現力の鍛錬に重点を置き、研究の集大成として卒業論文を重視する、文学部の教育目的に沿う措置による。演習の質は学生の研究報告によって担保される。そのため、文学部では1年次生を対象とする各講座の入門講義によって人文学の全体像を俯瞰させるとともに、各専修が人文学導入演習や人文学基礎といった少人数教育を開講することによって、人文学の研究手法や調査技法について丁寧な手解きを行い、専門教育への円滑な導入を図っている。演習の授業は同時に研究倫理教育の実践的な場でもあり、盗用などの研究不正について各専修で適切な指導がなされている。

2024年度は、20の講義、41の演習および実習1つに対してティーチング・アシスタント（TA）を配置した。授業運営の補助や受講者のための事前学習・事後学習のフォローを適宜担わせ、少人数教育の一助としてい

る《資料 I-19》。TA に対しては各学期始めにガイダンスを実施し、TA ハンドブック等による指導をしている。また業務終了後には実施報告書を提出してもらい、その分析・検討および TA に対するフィードバックを行っている。

なお2016年度より、神戸大学では一部の学部・研究科を除いて新たに「2学期クォーター制」を導入し、従来、前期・後期にそれぞれ2単位を付与してきた課程を改変し、1クォーターごとに1単位を付与することになり、文学部にもこれが導入された。ただし、文学部での学修をより充実させるため、「初年次セミナー」等の一部の科目を除き、2020年度から文学部はセメスター制（教職関連科目はクォーター開講のセメスター的運用）に戻している。

数年間実施していた新型コロナウイルス感染症対応は、段階的に縮小してきた。対面授業の復活などに続き、2023年度には教室の収容人数など、ほぼコロナ前の水準に戻った。

コロナ禍の中で生じた変化として、遠隔授業が一般化したことが挙げられる。感染症対策としては役目を終えたものだが、教育効果の高い授業方法としての評価も得られ、一部の授業では積極的に遠隔形式が取り入れられている。遠隔授業での単位は60単位まで卒業単位に含められるようにするなど制度の整備も行われ、一つの形式として定着するに至った。

本学では2019年度より全学的に PC 必携化を進めてきた。学生は各自の PC を学内外で使用し、BEEF・BEEF+など大学の各種 web システムを日常的に利用している。このことによりコロナ禍でも授業を継続することができた反面、PC 本体のみならず、ヘッドセットや自宅の通信環境など、各自の金銭的負担は少なくない。またレポートなどの課題作成がインターネット頼みにならないよう、読解力や文章を書き推敲する力を個人任せにしない対策の必要も感じられる。

《資料 I-18：2024年度の授業形態》

授業形態	講義	演習	実習	実技	研究指導
授業数	582	464	20	3	52

《資料 I-19：2020年度～2024年度 TA の文学部への配置実績》

授業形態	TA 配置人数				
	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
講義	36	23	21	20	20
演習	42	45	47	48	41
実習	0	0	2	0	1
実技	0	0	0	0	0

教育を展開する上での指導法の工夫として、文学部ではフィールド型授業も重視している。「地域歴史遺産保全活用演習」では、事前指導で古文書・絵図等の取扱いを学んだ後、実際の地域歴史遺産資料を用いた実習を行うことで、地域遺産の保全と活用に関する実践的な知識・技能を身につけることを目指している《資料 I-20》。

また、「グローバル・アクティブ・ラーニング」として、他大学の学生らとともに学外のワークショップに参加し、より開かれた場での討論に参加し、公開成果発表会でプレゼンテーションを行うことで、受講生にさらに積極的な学びの場を提供している《資料 I-21》

《資料 I-20: 「地域歴史遺産保全活用演習 B」 シラバス》

基本情報

科目分類	専門科目	開講年次	1・2・3・4年
時間割コード	3L509	開講区分	後期
開講科目名	地域歴史遺産保全活用演習 B	曜日・時限等	他(対面)
成績入力担当	古市 晃	単位数	2.0
授業形態	演習	ナンバリングコード	

担当教員一覧

詳細情報

■授業のテーマ

地域歴史遺産のうち、とくに古文書・絵図等の地域史料に直接触れ、その解読と整理、さらにその指導方法について学ぶ。これを通じて受講生が、今後、それぞれの職場や居住地などにおいて、地域遺産の保全と活用に関する実践的・応用的な知識・技能を得られるよう努力する。

■授業の到達目標

古文書等の地域史料の調査に参加し、調査の意味を理解すること。

■授業の概要と計画

対面で実施する。

学内で事前指導をおこない、その後合宿形式で集中的に古文書の取り扱い方について実習する(学外。1泊2日2月実施予定)。

事前指導と合宿の日取り等の詳細については、後日BEEF+にて発表するので注意しておくこと。なお、合宿経費・交通費等はすべて受講生負担となるので、受講を希望する学生はその旨を了解しておくこと。

■成績評価方法

整理作業への積極的参加など、授業への参加状況(50点)と合宿後のレポート(50点)による。事前指導と合宿日程すべてに参加しなければ、単位は認めないので注意すること。

■成績評価基準

文書の読解や目録の作成に取り組む姿勢で50点分を評価する。読解能力そのものは問わない。さらに、古文書が地域歴史遺産の保全と活用にどのように関係するのかについての考察をレポートで求め、それにより50点分を評価する。

■履修上の注意(関連科目情報)

受講生は、古文書の読解と整理についての基礎的な技能を身に付けていることが望ましく、その上に立ってそれらの指導方法を学ぶように努めてほしい。

■事前・事後学修

事前指導に参加し、注意事項を確認すること。

事後は調査で学んだことをまとめ、地域史料の調査とは何か、その本質を把握するよう努めること。

本学では1単位あたりの学修時間を45時間としています。毎回の授業にあわせて事前学修・事後学修を行ってください。

《資料 I-21 : 「グローバル・アクティヴ・ラーニング」 シラバス》

基本情報

科目分類	高度教養科目	開講年次	2・3・4年
時間割コード	1L999	開講区分	前期
開講科目名	グローバル・アクティヴ・ラーニング A (高度教養)	曜日・時限等	他(対面)
成績入力担当	大河内 瞳	単位数	1.0
授業形態	講義	ナンバリングコード	

担当教員一覧

詳細情報

■授業のテーマ

広島に投下された原爆、被爆の歴史、広島に住む人々の経験等を学ぶことを通して、平和についての理解を深める。その理解を出発点として、被爆や関連する経験によって生きにくさやしんどさを抱える人々についての理解を深め、さらに、異なる生きにくさやしんどさを抱える人々についても想像する力、理解しようとする姿勢を養う。

■授業の到達目標

本授業では、広島原爆資料館の視察や広島在住の人との交流を通して、以下の目標を達成することを目指す。
 ①広島に投下された原爆や被爆の歴史、現代の世界が直面する核問題について理解することができる。
 ②直接的・間接的に被爆を経験した人々の生きにくさやしんどさなどを含むさまざまな思いを理解することができる。
 ③現代社会に存在するさまざまな生きにくさやしんどさを抱える人々について想像し、理解することができる。

■授業の概要と計画

[0] 事前説明会

5月7日(火) 5限(17:00-18:30) 教室: B334

この事前説明会で参加者・履修者を確定するため、特別の理由がない限り必ず出席すること。

[1] 事前学習

第1回: 5月21日(火) 5限(17:00-18:30) 教室: B334

第2回: 5月28日(火) 5限(17:00-18:30) 教室: B334

※第2回は映画『オッペンハイマー』をもとに議論をしますので、映画を見ておいてください。また、神戸での上映終了日に注意してください。(5月に入ると上映が終わってしまう可能性が高い)

[2] 広島でのアクティブラーニング

6月7日(金)、8日(土)、9日(日)に開催。

高速バスで金曜日の夕方出発し、日曜日夜に神戸に戻る予定。6月8日は、資料館を見学したり、現地で様々な活動に取り組む人々と交流・意見交換したりする。

[3] 事後学習

6月18日(火) 5限(17:00-18:30) 教室: B334

■成績評価方法

ワークショップや事前・事後学習などにおける参加度、また振り返りを含め総合的に判断する。

シラバスは、すべてウェブサイト上に公開しており、学修の便宜を図っている。2017年度からは『履修要項』に履修モデルを掲載し、4年間の学修の流れを可視化している《資料I-22》。加えて、入学時、1年次の後期開始時、専修配属決定後の12月に合計3回のガイダンスを実施ことによって、学生が適切な履修計画を立てられるように配慮している。単位が不足する学生に対しては従来から各教員・各専修で適切に対応してきたが、教務学生係および教務委員と連携してより手厚い就学指導を行うことのできる体制を2015年度に整えている。なお、ここに例示する「文学部履修モデル」は2018年に改訂されたものであり、2019年度から適用された。

ハラスメント対策としては、1年生に対して毎年、「初年次セミナー」の一環としてセミナーを開催している。

《資料I-22：文学部履修モデル》



I-4-2. 主体的な学習を促す取組み

自主学習を促すために、《資料I-23》のように制度面・環境面の整備を行ってきた。例えば、学生が授業時間以外にも教員から勉学上の指導を受けることができるようにオフィスアワーや連絡先が各教員のシラバスに明記され、周知が図られている。また、本学部同窓会がレポートコンテストにより「文窓賞」を授与し、勉学や課外活動に対する意欲の向上を図っている。2013年には、人文科学図書館に神戸大学では初のラーニングコモンズが設置され、グループ学習、外国人教員との自由な英語会話、協働作業を中心とした新しいタイプの授業などでさまざまな活用されている。

《資料 I-23：制度面および環境面での整備項目》

項 目		内 容
制 度 面	オフィス アワー	学生は授業時間以外にも教員から指導を受けることが容易である。オフィスアワーは2008年度からはシラバスに明記し、周知されている。
	キャップ制 の免除	単位の実質化を図るためにキャップ制（1年間に履修できる単位数の上限：文学部は54単位）を設けるとともに、さらに学生の学習意欲を高めるため、成績優秀な学生に対しては、キャップ制の適用を免除する優遇措置を与えている。
	表彰制度	2007年度から本学部同窓会がレポートコンテストにより「文窓賞」を授与している。
環 境 面	図書館 （日本文化 資料コー ナー）	文学部の人文科学図書館は書籍約33万冊を有し、毎年確実に蔵書数を増やしている。開館時間は、平日（8時45分～19時）および土曜日（11～17時）である。（注：現在、日祝日は閉館している） 「日本文化資料コーナー」を設けて資史料、貴重図書、参考図書類を集中的に配架し、複数の辞書類・資料を同時に縦覧する必要がある歴史・文学系等の学生の利便を図っている。当該学生等の利用・貸出は比較的多い状況である。
	学生用 共同研究室	学生が個人あるいはグループで調査・研究するために使用できる「共同研究室」を教育研究分野ごとに設置し、学生の自主学習へ配慮している。共同研究室には辞書や専門書等も整備されており、学生はここで授業の予習や復習、研究発表のための資料作成などを行うことができる。
	コモン ルーム	学生がグループ学習や研究会などのために自由に使用することのできる「コモンルーム」を3カ所設置し、学生の自主学習へ配慮している。ホワイトボードを使つての議論の場として活用したり、研究発表や面接の練習をしたりするなどさまざまな形で使われている。
	共同談話室	教員と学生が共同研究、読書会などを行うために使用することができる「共同談話室」を5カ所設置し、自由な共同学習や演習等の授業に活用している。各種の読書会、研究会の会合などが活発に行われている。
	情報機器	各専修の共同研究室や実験室などに、学生が利用できるパーソナル・コンピューターを適宜配置している。実習などの授業のほか、学生の自主学習に利用されている。
	教育機器	視聴覚機材を2009～2011年度に B 棟、2012年度に C 棟にも設置し、ほぼ全ての教室で視聴覚機材（プロジェクター、スクリーン、DVD など）を活用した授業ができるようになった。パワーポイントを使った授業も多くなされている他、パソコン（インターネット）による具体的な資料検索・資料収集の方法を実践することも可能である。Web カメラなどの遠隔設備を数カ所導入し、双方向の遠隔授業を可能とするなど、機器の更新を随時行っている。
	ラーニング commons	自由に机と椅子を組み合わせ、図書館資料を自在に使用し、グループで話し合いながら学習を進めることができるスペースとして、「ラーニングcommons」が人文科学図書館とA棟に設置された。他学部にも広く開かれた文学部のラーニングcommonsは、2013年度の運用開始以来、アクティブラーニングや演習、自主学習、グループ学習、留学報告会等、さまざまな形で活用され、大きな学習成果を挙げている。

I-5. 学業の成果

I-5-1. 学生が身に付けた学力や資質・能力

最近の文学部学生の卒業状況は、《資料 I-24》のとおりである。学部学生の卒業率（入学者総数に対する既卒業者の比率）は2014年度入学者以降、平均94.9%という良好な数字を保っている。また、標準修業年限で卒業した学生（4年間で卒業した学生）の比率も2014年度入学者以降、平均84%以上の数字を維持し、大半の学部生が4年間で卒業している。なお、学部生の場合、卒業以前に留年・休学して海外留学を経験する者も多い。

また、文学部における学びの集大成となる卒業論文について、2024年度卒業生が提出した論文題目一覧は《資料 I-25》に挙げるとおりである。

《資料 I-24：修業年限内の卒業率 2025 年 3 月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者数 (a)	卒業生数 (b)	標準年限内 卒業生数 (c)	標準年限内 卒業率 (c/a)
2017年 (2020年)	108	104	87	80.6%
2018年 (2021年)	110	110	96	87.3%
2019年 (2022年)	108	108	95	88.0%
2020年 (2023年)	111	104	93	83.8%
2021年 (2024年)	107	103	94	87.8%

《資料 I-25：2025年3月卒業生の卒業論文題目一覧表》

専修	卒業論文題目
哲学	ホラー作品の恐怖とその分類
哲学	「押し」と幸福
哲学	反応的態度に基づく非難・道徳についての考察
哲学	「道徳のサークル」から外れた人は見捨てても良いのか
国文学	御伽草子『和泉式部』論
国文学	『新蔵人物語』の姫君に関する考察
国文学	『閑居友』における源頭基と遊女の位置付け
国文学	夏目漱石「琴のそら音」論
国文学	『新蔵人絵巻』の研究
国文学	『更級日記』時雨の夜の物語
国文学	『時代不同歌合』の配列に関する一考察
国文学	泉鏡花「龍潭譚」論
国文学	草双紙を擬人化する草双紙
国文学	現代日本の児童向け小説における文章表現
国文学	『宇治拾遺物語』の猥雑性について
国文学	『和泉式部日記』「手習のやうに書きゐたる」についての考察
国文学	『今昔物語集』巻二十七第十三段について
国文学	『枕草子』の研究
国文学	石原吉郎研究
中国文学	『論語』「克己復礼」の解釈とその変遷
英米文学	<i>The Great Gatsby</i> におけるアダプテーション研究
英米文学	ジョン・スタインベック『怒りの葡萄』研究
英米文学	オスカー・ワイルド『真面目が肝心』におけるヴィクトリア朝の偽善への風刺
英米文学	『ドリアン・グレイの肖像』におけるオスカー・ワイルドの芸術観
英米文学	サマセット・モーム『お菓子とビール』研究
英米文学	<i>A Midsummer Night's Dream</i> における“Dream”の考察
ドイツ文学	E. T. A. ホフマンの『牡猫ムルの人生観』における直線的な物語進行の破壊
日本史学	大正期尾崎における市街地信用組合の設立と展開
日本史学	日中戦争期における神戸華僑の生活実態と戦時統制

日本史学	日露戦後期における伊藤長次郎と報徳思想
日本史学	クニノミコトモチに関する基礎的考察
日本史学	院政期の北部九州における中央権力支配の浸透
日本史学	中世前期肥前国小値賀嶋における「下沙汰」の再検討
日本史学	一九二〇年代の神戸市街地における青年団体の地域的展開
日本史学	南北朝期の弓削島荘における東寺の支配と在地勢力の動向
日本史学	紀伊国阿弓河荘支配をめぐる地頭湯浅氏と高野山
日本史学	明治・大正期尼崎における士族会と地域社会に関する一考察
日本史学	中世における自然災害と荘園の動向
東洋史学	サファヴィー朝の外交政策とサラブの和約
東洋史学	イブン・ルザイク著『明白な開示』におけるブーサイド朝君主たち
東洋史学	ティムール朝スルターン・フサイン治下ヘラートにおけるバグの利用
東洋史学	良岳造営からみる徽宗の政治姿勢
東洋史学	清朝統治下の台湾における寡婦の権利
東洋史学	趙烈文『能静居日記』からみる湘軍解散問題
西洋史学	初期ソヴィエトにおける労働現場と労働者の主体性をめぐる問題
西洋史学	イングランド宗教改革とウィリアム・セシル
西洋史学	前古典期ギリシアの魂観・来世観
西洋史学	異端審問に対する抵抗の地域性
西洋史学	古典期アテナイにおけるエレウシスの秘儀について
西洋史学	ミハイル・ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』を通して見る 1920～30年代におけるソ連の社会状況と検閲
心理学	事故状況における自動運転車ユーザーへの評価
心理学	ロールモデルによる女性のリーダーシップ志向の向上についての検討
心理学	ウェブサイトのボタンのマイクロインタラクションがコンバージョン率に与える影響
心理学	所属欲求の高まりが過食傾向に及ぼす影響
心理学	コンセンサスからの逸脱と孤独感の関係の検討
心理学	刺激どうしの結びつきにおける感情強度の影響
心理学	家事に関するジェンダー・ステレオタイプ
心理学	地位の異なる他者の不正行為が観察者に与える影響
心理学	ボランティアのジレンマにおける利得と損失の影響
心理学	コストがオンライン購入時の確証バイアスに与える影響
心理学	名誉の文化が苦情生起傾向に及ぼす影響
心理学	道徳的幸運と不誠実な行動の関連
心理学	同義語・対義語の意味関連性がヒト大脳皮質に引き起こす調和的記憶信号
言語学	関西方言における複合名詞アクセントの平板化と音韻構造
言語学	許可を求める形式で依頼を行う間接発話行為について
言語学	終助詞的用法の「けど」について
言語学	日本語副詞「きっと」の意味・生起環境について
言語学	ブージャ語の生成規則と音韻形態制約

言語学	日本語歌謡曲における自立モーラの脱落とその条件について
芸術学	谷川俊太郎の初期作品におけるメタポエトリー的性質
芸術学	ミュージカル映画としての『オペラ座の怪人』
芸術学	ヴァーチャル・リアリティ・メディアがもたらす経験のリメディエーション
芸術学	芸術におけるマゾヒズムの快楽
芸術学	「いいちこ」のポスターにおける空気感
芸術学	待庵の空間構成にあらわれる千利休の意図の考察
芸術学	ドストエフスキー『白痴』における「自然(природа)」
芸術学	自伝のジャンルの特性から考える『彼自身によるロラン・バルト』
社会学	アイドルファンのコミュニケーションが消費行動に与える影響について
社会学	学校経験が教職志望学生の学級経営観に与える影響について
社会学	女性ファッション誌から見る「女らしさ」の変容
社会学	現代若年女性と美的価値基準
社会学	犯罪被害者の報道から見る日本の公私
社会学	人間とペットとアニマルセラピー
社会学	「押し」に「貢ぐ」ということ
社会学	なぜ演劇人は演劇をつづけるのか
社会学	カバディ
社会学	地方における教育と労働
社会学	大学生の生活における時間意識
社会学	若者の出産・子育て意識と「子育てプレッシャー」
美術史学	歌川国芳「源頼光公館土蜘蛛妖怪図」考察
美術史学	バルトロメ・エステバン・ムリーリョ研究
美術史学	月岡芳年の西南戦争錦絵について
美術史学	林園苑「青緑山水図」について
美術史学	ベアト・アンジェリコ《サン・マルコ祭壇画》について
美術史学	カラヴァッジョ《聖パウロの回心》の研究
美術史学	ヒエロニムス・ボス研究
美術史学	エル・グレコ《受胎告知》について
地理学	上映形態の変遷からみる映画館という場の変化
地理学	瀬戸内海の島嶼部の地域医療の体制
地理学	ネット通販の流通システムにおける宅配ロッカーの空間的特性
地理学	中山間地域の拠点を中心とした地域イノベーション・システム
地理学	オフィス空間形成に対するデベロッパーの性格の差異が与える影響
地理学	地域における歴史的環境の保全と複合的な「活用」

在学中に教育職員免許（中学校教員一種・高等学校教員一種）、学芸員資格、社会調査士資格等を取得する者が多く、その内訳は《資料 I-26》の通りである。これらのうち、高等学校教員一種の資格取得者が多いのは例年の傾向である。ただ、就職に向けた解禁日も流動化する傾向にあり、教育実習期間に中小企業の面接が入るなどの理由で実習辞退者が出るといった影響が見られ、今後の問題を残している。

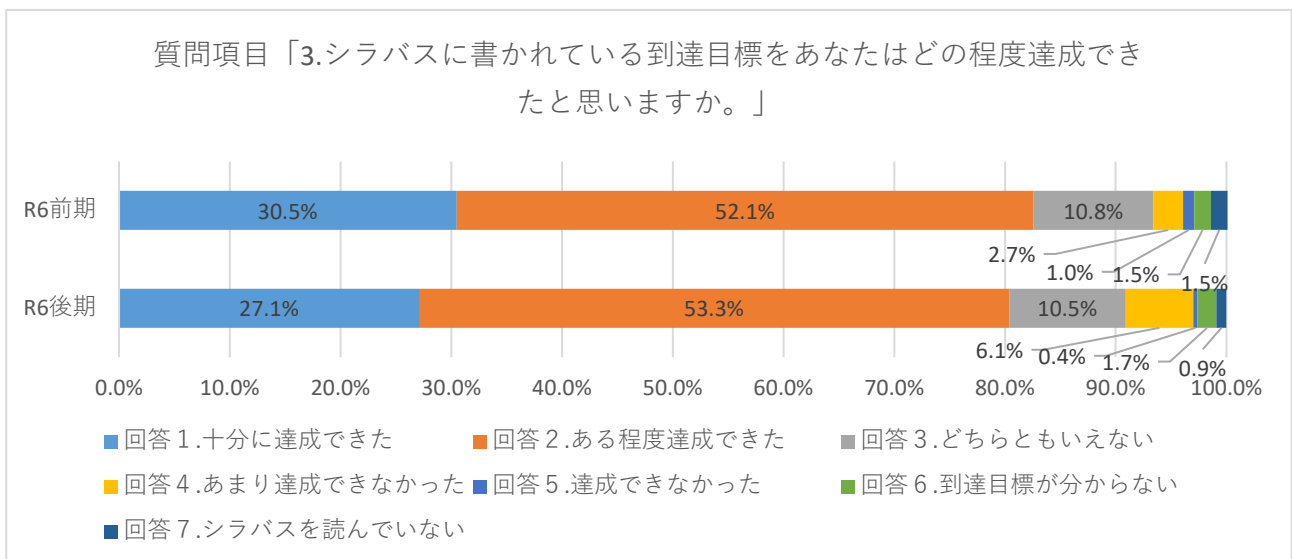
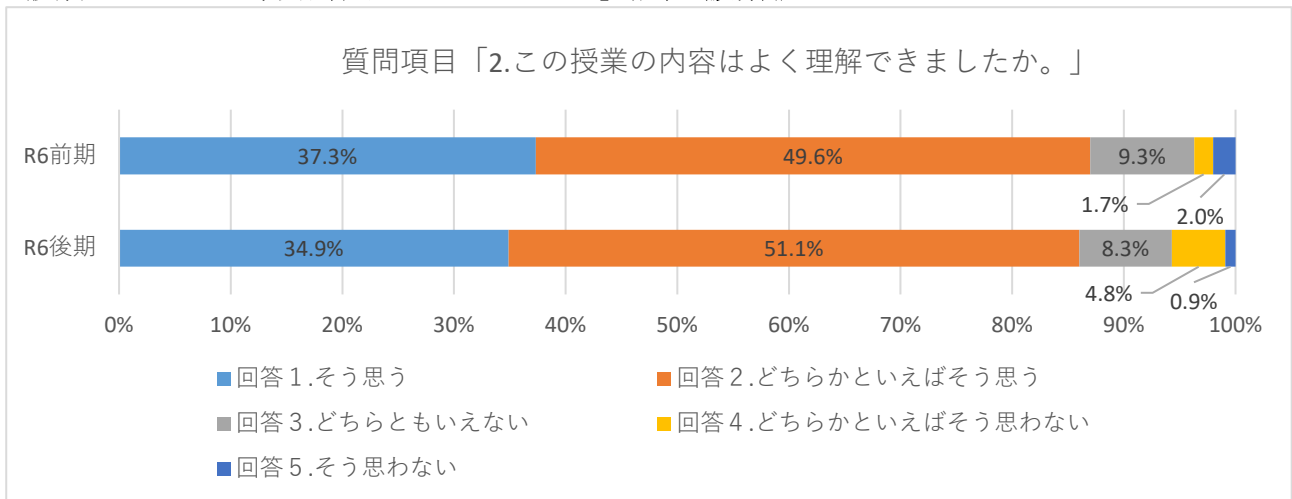
《資料 I-26：2020 年度～2024 年度資格取得者数》

年 度	資格取得者数			
	教育職員免許		学芸員資格	社会調査士 資格
	中学校一種	高等学校一種		
2020年度	12	19	14	3
2021年度	16	22	8	4
2022年度	13	18	10	2
2023年度	10	27	8	3
2024年度	12	23	9	2

I-5-2. 学業の成果に関する学生の評価

在学生を対象とした「授業振り返りアンケート」2024年度の結果では、教育の成果や効果に関する質問項目の「2. この授業の内容はよく理解できましたか。」「3. シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。」のうち、2については最上点および次点の回答者が前期約87%、後期約86%、3については最上点および次点の回答者が前期約83%、後期約80%といずれも良好な結果が得られており《資料 I-27》、例年、同様の傾向となっている。

《資料 I-27：「2024年度授業振り返りアンケート」結果（抜粋）》



I-6. 進路・就職の状況

I-6-1. 卒業後の進路の状況

文学部卒業生の就職率および進学率については《資料 I-28》のとおりで、この状況は安定している。2020～2024年度の本学部における卒業生の進路は《資料 I-29》に示した。文学部の強みは公務員・中・高教員その他教育関係・メディア関係など教育成果を直接活用できる職種であったが、それ以外にも金融・保険業、製造業、情報・通信業など、幅広い業種にわたっている。近年では特に情報・通信業への就職も増えており、時代の要請に適した能力を学生がしっかりと培っていることがわかる。

就職状況は概ね良好である。学部における教育および就職対策が奏功していることが理解される。

大学院進学者が10%強という状況は、「専門的知識」を有する人材の育成を目的の一つに掲げている文学部の教育方針に合致しており、研究大学として社会からの期待に適った成果をあげている。

《資料 I-28：文学部卒業生の就職率および進学率》

卒業年度	卒業生数	進学者	就職者	就職希望者	進学率	就職希望者の就職率
2020年度	104	16	75	88	15.6%	81.8%
2021年度	110	19	78	84	17.2%	92.8%
2022年度	108	15	79	83	13.9%	95.2%
2023年度	104	13	82	91	12.5%	90.1%
2024年度	106	8	91	96	7.5%	94.8%

《資料 I-29：文学部卒業生の進路状況》

卒業年度	製造業	情報・通信産業	卸売・小売業	金融・保険業	学校教育・その他教育	国家公務員・地方公務員	その他の業種
2020年度	9	9	7	7	5	13	25
2021年度	7	17	4	6	11	12	21
2022年度	15	16	5	5	12	13	13
2023年度	20	17	5	9	6	7	18
2024年度	21	16	4	5	9	12	24

II. 教育（人文学研究科）

II-1. 人文学研究科の教育目的と特徴

人文学研究科は、大学院文学研究科（修士課程）および文化学研究科（独立研究科：後期3年博士課程）の改組・統合により2007年4月に新たに設置された研究科である。

本研究科は、人文学すなわち人間と文化に関わる学問を扱い、哲学・文学・史学・行動科学などの人文系諸科学の教育を包括している。以下に本研究科の教育目的、組織構成、教育上の特徴および想定する関係者とその期待について述べる。

II-1-1. 教育目的

- 1 人文学研究科は、人類がこれまで蓄積してきた人間および社会に関する古典的な文献の原理論的研究に関する教育並びにフィールドワークを重視した社会文化の動態的分析に関する教育を行い、新たな社会的規範および文化の形成に寄与する教育研究を行うことを目的としている。
- 2 このような教育目的を達成するため、現行の中期目標では「教育憲章」に掲げた、「人間性」、「創造性」、「国際性」および「専門性」を身につけた個性輝く人材を養成するため、国際的に魅力ある教育を学部・大学院において展開する。また、豊富な研究成果を活かして、社会の変化を先導し、個人と国際社会が進むべき道を切り拓く高度な知識・能力を有する、次世代の研究者をはじめとした多様な人材の養成に努め、教育の更なる高みを目指すことを定めている。
- 3 本研究科のディプロマ・ポリシー（DP）およびカリキュラム・ポリシー（CP）はそれぞれ《資料II-1》《資料II-2》のとおりである。これらDP、CPに基づき、本研究科は専攻ごとに、以下のような人材の育成を目指している。文化構造専攻の前期課程では、人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことのできる基礎的能力を備え、人文学を知識基盤社会に活かすことのできる人材を養成し、後期課程では、人文学の高度な研究方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことのできる能力並びに共同研究を企画し、組織する能力を持つ人材を養成する。社会動態専攻の前期課程では、社会文化の動態的分析の基礎的な能力を備え、人文学を知識基盤社会に活かすことのできる人材を養成し、後期課程では、社会文化の高度な動態的分析能力を備え、新たな社会規範および文化の形成に寄与できる能力並びに共同研究を企画し、組織する能力を持つ人材を養成する。この目的や人材養成は、現行の中期目標において、「高度な専門的知識を修得させ、個人と社会が進むべき道を切り拓く能力を涵養すること」を達成することと大いに対応している。

《資料II-1：人文学研究科ディプロマ・ポリシー（DP）》

博士課程前期課程ディプロマ・ポリシー

神戸大学人文学研究科博士課程前期課程は、人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会において活躍できる人材を養成することを目的としている。この目的を達成するため、以下に示した方針に従って修士の学位を授与する。

学位：修士（文学）

神戸大学のディプロマ・ポリシーにもとづき、人文学研究科は以下に示した方針に従って当該学位を授与する。

- ・本研究科博士課程前期課程に2年以上在学し、研究科共通科目、選択科目、特別研究に関してそれぞれ所定の単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文または特定の課題についての研究成果の審査および最終試験に合格すること。
- ・神戸大学のディプロマ・ポリシーに定める能力に加え、修了までに、本研究科学生が、身につけるべき能力を次のとおりとする。
 - 「人間性」「創造性」「国際性」
 - ・人文学の意義を理解し、その発展に貢献することのできる能力。また、人文学に関わる課題について、共同して解決することのできる能力。さらに、異なる文化に由来する多様性を受容し、必要な外国語

でコミュニケーションをはかる能力。

○「専門性」

- ・人類がこれまで蓄積してきた人間と社会に関する古典的な文献の原理論的研究という人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる能力。
- ・古典研究を踏まえて、フィールドワークを重視した社会文化の動態的分析を行い、なおかつ新たな社会的規範や文化の形成に寄与できる能力。
- ・研究者としての基礎能力を具えるとともに、人文学を知識基盤社会に活かすことができる能力。

博士課程後期課程ディプロマ・ポリシー

神戸大学人文学研究科博士課程後期課程は、人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応できる人材を養成することを目的としている。この目的を達成するため、以下に示した方針に従って博士の学位を授与する。

学位：博士（文学）

神戸大学のディプロマ・ポリシーにもとづき、人文学研究科は以下に示した方針に従って当該学位を授与する。

- ・本研究科博士課程後期課程に3年以上在学し、研究科共通科目、特別演習に関してそれぞれ所定の単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格すること。
- ・神戸大学のディプロマ・ポリシーに定める能力に加え、修了までに、本研究科学生が、身につけるべき能力を次のとおりとする。
 - 「人間性」「創造性」「国際性」
 - ・人文学の意義を理解し、その発展に貢献することのできる能力。また、人文学に関わる課題について、共同して解決することのできる能力。さらに、異なる文化に由来する多様性を受容し、必要な外国語でコミュニケーションをはかる能力。
 - 「専門性」
 - ・人文学の高い専門性を追求し、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する能力
 - ・人類がこれまで蓄積してきた人間と社会に関する古典的な文献の原理論的研究という人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる能力。
 - ・古典研究を踏まえて、フィールドワークを重視した社会文化の動態的分析を行い、なおかつ新たな社会的規範や文化の形成に寄与できる能力。
 - ・自立した研究者として、研究を企画し、組織できる能力。

学位：博士（学術）

神戸大学のディプロマ・ポリシーにもとづき、人文学研究科は以下に示した方針に従って当該学位を授与する。

- ・本研究科博士課程後期課程に3年以上在学し、研究科共通科目、特別演習に関してそれぞれ所定の単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上で、博士論文の審査及び最終試験に合格すること。
- ・神戸大学のディプロマ・ポリシーに定める能力に加え、修了までに、本研究科学生が、身につけるべき能力を次のとおりとする。
 - 「人間性」「創造性」「国際性」
 - ・人文学の意義を理解し、その発展に貢献することのできる能力。また、人文学に関わる課題について、共同して解決することのできる能力。さらに、異なる文化に由来する多様性を受容し、必要な外国語でコミュニケーションをはかる能力。
 - 「専門性」
 - ・人文学の高い専門性を追求すると同時に、専門性にもとづく学際性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する能力。
 - ・人類がこれまで蓄積してきた人間と社会に関する古典的な文献の原理論的研究という人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる能力。
 - ・古典研究を踏まえて、フィールドワークを重視した社会文化の動態的分析を行い、なおかつ新たな社会的規範や文化の形成に寄与できる能力。
 - ・自立した研究者として、研究を企画し、組織できる能力。

《資料Ⅱ-2：人文学研究科カリキュラム・ポリシー（CP）》

神戸大学のカリキュラム・ポリシーにもとづき、人文学研究科は以下の方針に則りカリキュラムを編成する。

博士課程前期課程

学位：修士（文学）

1. 「人間性」「創造性」「国際性」を身につけさせるため、研究科共通科目を開設する。
2. 人文学の「専門性」を身につけさせるため、以下の専門科目を開設する。
 - ・各分野の高度に専門的な知識を身につけることができるよう特殊研究科目を開設する。
 - ・各分野の研究に必要なスキルと語学の能力を身につけることができるよう、少人数で展開される演習科目を開設する。
 - ・学位論文完成のため、指導教員による特別研究科目を開設する。

なお、これらの科目は講義・演習等の授業形態に応じて、アクティブラーニング、体験型学習などを適宜組み合わせで行う。

指導体制については、各学生に対して3名からなる指導教員チームを編成し、そのうち必ず他専攻の教員が参加する体制をとっている。それにより、高い専門性ばかりでなく、幅広い学際的視野のもとで研究する能力を育成する。また論文の提出までに、計画書の提出、準備論文の提出、公開研究報告会の開催など、研究の進捗状況をその都度上記の体制でチェックしながら、研究遂行の能力を総合的に育成する。

学修成果の評価は、次の方法で行う。

- ・講義科目については、筆記試験、レポート、参加度等により、学修目標に即して多元的、包括的な方法で到達度を判定する。
- ・演習・実習等については、筆記試験、レポート、参加度、発表内容等により、学修目標に即して多元的、包括的な方法で到達度を判定する。

博士課程後期課程

学位：博士（文学）

1. 「人間性」「創造性」「国際性」を身につけさせるため、研究科共通科目を開設する。
2. 秀れた「専門性」を有する学位論文完成のため、指導教員による特別演習科目を開設する。

指導体制については、各学生に対して3名からなる指導教員チームを編成し、そのうち必ず他専攻の教員が参加する体制をとっている。それにより、高い専門性ばかりでなく、幅広い学際的視野のもとで研究する能力を育成する。また論文の提出までに、計画書の提出、予備論文の提出、公開研究報告会および博士予備論文公開審査の開催など、研究の進捗状況をその都度上記の体制でチェックしながら、研究遂行の能力を総合的に育成する。

学修成果の評価は、筆記試験、レポート、参加度、発表内容等により、学修目標に即して多元的、包括的な方法で到達度を判定する。

博士課程後期課程

学位：博士（学術）

1. 「人間性」「創造性」「国際性」を身につけさせるため、研究科共通科目を開設する。
2. 秀れた「専門性」とそれにもとづく学際性を有する学位論文完成のため、指導教員による特別演習科目を開設する。

指導体制については、各学生に対して3名からなる指導教員チームを編成し、そのうち必ず他専攻の教員が参加する体制をとっている。それにより、高い専門性ばかりでなく、幅広い学際的視野のもとで研究する能力を育成する。また論文の提出までに、計画書の提出、予備論文の提出、公開研究報告会および博士予備論文公開審査の開催など、研究の進捗状況をその都度上記の体制でチェックしながら、研究遂行の

能力を総合的に育成する。

学修成果の評価は、筆記試験、レポート、参加度、発表内容等により、学修目標に即して多元的、包括的な方法で到達度を判定する。

II-1-2. 組織構成

これらの目的を実現するため、本研究科では、《資料II-3》のような組織構成をとっている。

《資料II-3：組織構成》

専攻	コース	教育研究分野
文化構造	哲学	哲学、倫理学
	文学	国文学（国語学を含む）、中国・韓国文学、英米文学、ヨーロッパ文学
社会動態	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム論	心理学、言語学（英語学を含む）、芸術学
	社会文化論	社会学、美術史学、地理学、文化資源論（連携講座：後期課程のみ）

II-1-3. 教育上の特徴

- 1 人文学研究科は、学生が明確な目的意識をもって専門分野の研究を深めるようにするため、一貫性のある明確なプログラムに従って学修・指導を進めている。また、年次ごとのプログラムを具体的に定めることにより、後期課程からの編入生も、他大学院の前期課程（修士課程）で学修した成果を本研究科での学修にスムーズに移行できるようにしている。
- 2 人文学研究科は、次のような指導体制を構築して、学生の研究教育を支援している。①教育研究分野ごとに、各年次で学修する内容を具体的に定め、その修得を学生に徹底している。②学生1名に対して3名からなる指導教員チームを編成している。また、このチームには必ず他専攻の教員が1名参加し、学生が高い専門性ととも幅広い学問的視野を獲得できるように配慮している。③学生ごとに履修カルテを作成し、これによって指導教員チームは学生の学修に関する情報を共有している。この履修カルテは、指導プロセスの透明化にも役立てられている。指導方法については常に検証・改善に努めている。
- 3 学域全体における研究の位置付けを見失うことなく、研究の社会的意義に対する省察を行うため、本研究科は、教育プログラムとして研究科共通科目を設定し、これを必修としている。研究科共通科目は本研究科内の共同研究教育組織（海港都市研究センター、地域連携センター、倫理創成プロジェクト、日本語日本文化教育プログラム）の支援のもとで実施されている。
- 4 本研究科は、《資料II-4》のような文部科学省等の推進する各種の教育改革プログラムに採択されており、これらとの連携のもとで教育改革を積極的に推進してきた。

《資料Ⅱ-4：採択されたプログラム一覧》

プログラム名		採択課題名	期間
日本学術振興会	大学院教育改革プログラム	古典力と対話力を核とする人文学教育—学域横断的教育システムに基づくフュージョンプログラムの開発	2008～2010年度
日本学術振興会	若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム	東アジアの共生社会構築のための多極的教育研究プログラム	2008～2012年度
日本学術振興会	組織的な若手研究者等海外派遣プログラム	国際連携プラットフォームによる東アジアの未来を担う若手人文研究者等の育成	2009～2012年度
文部科学省	国際共同に基づく日本研究推進事業	日本サブカルチャー研究の世界的展開	2010～2012年度
文部科学省	グローバル人材育成推進事業（タイプB特色型）※1	問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成 ※2	2012～2016年度
日本学術振興会	頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム ※3	国際共同による日本研究の革新—海外の日本研究機関との連携による若手研究者養成	2013～2015年度
文部科学省	運営費交付金機能強化経費「実践型グローバル人材育成事業」※4	日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業	2017～2021年度

※1 2014年度より、「スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に改称。

※2 国際文化学部を代表部局とし、文学部・人文学研究科、発達科学部、法学部、経済学部・経済学研究科、経営学部の共同のプログラムを推進してきた。

※3 2014年度より、「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」に改称。

※4 運営費交付金（機能強化経費）による「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」に特化したプロジェクトである。

Ⅱ-2. 教育の実施体制

Ⅱ-2-1. 基本的組織の編成

本研究科は、上記（29頁）の教育目的を達成するため、前期課程（修士課程）、後期課程（博士課程）ともに一貫性のある明確なプログラムの下に文化構造および社会動態という2つの専攻を設けている。各専攻は哲学、文学（以上、文化構造専攻）、史学、知識システム論、社会文化論（以上、文化動態専攻）のコースに分かれている。後期課程社会動態専攻には奈良国立博物館および大和文華館との連携講座（文化資源論）も置いている《資料Ⅱ-3》。

教員の配置状況は、《資料Ⅱ-5》《資料Ⅱ-6》のとおりである。授業の根幹をなす演習と研究指導および研究科共通科目の授業は、いずれも専任教員が担当している。専任教員のほとんどは博士号を有している。また、入学定員が前期課程44名、後期課程20名であるのに対し、専任教員は54名であり、質量ともに必要な教員が確保されている。

《資料Ⅱ-5：教員の配置状況 2024年5月1日現在》

専攻	課程	収容定員	専任教員数（現員）											助手		非常勤教員数（2024年度）	
			教授		准教授		講師		助教		計						
			男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	総計	男	女		
文化構造	前期	34	7	4	4	1	3	4	1	0	15	9	24	0	0	11	0
	後期	24															
社会動態	前期	54	14	3	6	2	2	2	0	1	22	8	30	1	0	24	11
	後期	36															

※兼務教員を含む。

《資料Ⅱ-6：教育研究分野別教員現員数 2024年5月1日現在》

教育研究分野	教授	准教授	講師	助教	教育研究分野	教授	准教授	講師	助教	教育研究分野	教授	准教授	講師	助教
哲学	1	1	1	0	ヨーロッパ文学	3	1	1	0	言語学	4	0	0	0
倫理学	1	0	1	0	日本史学	3	0	1	0	芸術学	2	0	1	0
国文学	2	2	3	0	東洋史学	1	2	0	0	社会学	2	2	1	0
中国・韓国文学	2	0	1	0	西洋史学	3	1	0	0	美術史学	1	0	1	0
英米文学	2	1	0	1	心理学	1	1	0	1	地理学	0	2	0	0

※兼務教員を含み、文化資源論の教授2名を除く。

入学者の選抜については、全学および人文学研究科として求める学生像（アドミッション・ポリシー）を定め《資料Ⅱ-7》、これに基づき、前期課程における一般学生、外国人特別学生を対象とするⅠ期およびⅡ期、並びに特別入試（2014年度より導入）、後期課程における一般学生、外国人特別学生を対象とする入学試験など多様な選抜を実施している。

学生定員と現員の状況については《資料Ⅱ-8》、教育研究分野別の学生数は《資料Ⅱ-9》のとおりである。

《資料Ⅱ-7：求める学生像（アドミッション・ポリシー）》

神戸大学が求める学生像

神戸大学は、世界に開かれた国際都市神戸に立地する大学として、国際的で先端的な研究・教育の拠点になることを目指しています。

これまで人類が築いてきた学問を継承するとともに、不断の努力を傾注して新しい知を創造し、人類社会の発展に貢献しようとする次のような学生を求めています。

1. 進取の気性に富み、人間と自然を愛する学生
[求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲]
2. 旺盛な学習意欲をもち、新しい課題に積極的に取り組もうとする学生
[求める要素：知識・技能、主体性・協働性、関心・意欲]
3. 常に視野を広げ、主体的に考える姿勢を持った学生
[求める要素：主体性・協働性、関心・意欲]
4. コミュニケーション能力を高め、異なる考え方や文化を尊重する学生
[求める要素：知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・協働性]

●入学者選抜の基本方針

以上のような学生を選抜するために、神戸大学のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーを踏まえ、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」「関心・意欲」を測るため、多面的・総合的な評価による選抜を実施します。

人文学研究科が求める学生像

大学院博士課程前期課程

人文学研究科は博士課程前期課程に次のような学生を求めています。

1. 人文学の諸分野に関心を持ち、既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、追究していく情熱を持っている人。
[求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲]
2. 自ら選んだ専門分野の研究を深め、その学術的展開を志す人。
[求める要素：知識・技能、思考力・判断力・表現力、関心・意欲]
3. 社会の一員としての自覚を持って、自らの学術研究を社会との係わりで展開していく意欲を持っている人。
[求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲]

●入学者選抜の基本方針

以上のような学生を選抜するために、人文学研究科博士課程前期課程のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーを踏まえ、以下の選抜において様々な要素を測ります。

一般入試、特別入試および外国人特別入試では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」「関心・意欲」を測ります。

大学院博士課程後期課程

人文学研究科は博士課程後期課程に次のような学生を求めています。

1. 人文学の諸分野に関心を持ち、既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、追究していく情熱を持っている人。

〔求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲〕

2. 自ら選んだ専門分野の研究を深め、その学術的展開を行って研究者を志す人。

〔求める要素：知識・技能、思考力・判断力・表現力、関心・意欲〕

3. 研究者としての自覚をそなえ、自らの学術研究を学際的かつ国際的な幅広い視野のなかで展開していく意欲を持っている人。

〔求める要素：思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲〕

●入学者選抜の基本方針

以上のような学生を選抜するために、人文学研究科博士課程後期課程のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーを踏まえ、以下の選抜において様々な要素を測ります。

一般入試、進学者入試および外国人特別入試では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性」「関心・意欲」を測ります。

《資料Ⅱ-8：学生定員（収容定員）と現員の状況 各年5月1日現在》

人文学研究科博士課程前期課程

専攻	年度	収容定員	現員	定員充足率（年）	定員充足率(5年間)
文化構造	2020年度	34	48	141%	114.7%
	2021年度	34	40	118%	
	2022年度	34	41	121%	
	2023年度	34	38	112%	
	2024年度	34	28	82%	
社会動態	2020年度	54	51	94%	100.0%
	2021年度	54	51	94%	
	2022年度	54	56	104%	
	2023年度	54	57	106%	
	2024年度	54	55	101%	

人文学研究科博士後期課程

専攻	年度	収容定員	現員	定員充足率（年）	定員充足率(5年間)
文化構造	2020年度	24	43	179%	162.5%
	2021年度	24	38	158%	
	2022年度	24	41	171%	
	2023年度	24	34	142%	
	2024年度	24	39	162%	
社会動態	2020年度	36	57	158%	155.0%
	2021年度	36	58	161%	

	2022年度	36	55	153%
	2023年度	36	55	153%
	2024年度	36	54	150%

《資料Ⅱ-9：教育研究分野別の学生数 2024年4月1日現在》

人文学研究科

専攻	博士課程前期課程		博士課程後期課程	
	教育研究分野	学生数	教育研究分野	学生数
文化構造	哲学	2	哲学	2
	倫理学	0	倫理学	0
	国文学	12	国文学	19
	中国・韓国文学	6	中国・韓国文学	8
	英米文学	4	英米文学	7
	ヨーロッパ文学	4	ヨーロッパ文学	3
社会動態	日本史学	10	日本史学	9
	東洋史学	0	東洋史学	0
	西洋史学	6	西洋史学	1
	心理学	0	心理学	1
	言語学	6	言語学	6
	芸術学	3	芸術学	7
	社会学	16	社会学	14
	美術史学	10	美術史学	13
	地理学	4	地理学	2
			文化資源論	1
	合計	83	合計	93

Ⅱ-2-2. 教育内容、教育方法の改善に向けた取組み

人文学研究科評価委員会は、授業評価アンケートの実施など、教育に関わる評価作業を行うとともに、教員の教育方法および技術の向上を図るためにファカルティ・ディベロップメント（FD）を開催している。人文学研究科のFDは、評価委員会が中心となり実施している。学生による授業評価アンケート、教員相互の授業参観・評価（ピアレビュー）を定期的に行い、その結果は、FDにおいて報告され、カリキュラム編成や授業方法の改善に活用され、中期目標の実現に向けた教育課程の改善が図られている《資料Ⅱ-10》。さらに、毎年度、評価報告書を作成し、独自に外部評価を受けて、FDの達成点と改善点を的確に把握し、それを教員・職員間で共有している《資料Ⅱ-11》。

こうした活動が個々の授業科目の内容に反映されることはもちろん、カリキュラム構成や教授法等の改善も適宜行っており、たとえば、人文学に必須の古典力を強化することやグローバル人材を育成することなどを目的として、前期課程の研究科共通科目の充実を行ってきている《資料Ⅱ-12》。

《資料Ⅱ-10：2020年度～2024年度のFD実施状況》

開催日	テーマ	参加者数
2020年5月27日	Zoom、YouTube、Google Forms を利用したオンデマンド講義の準備について	55
2020年7月29日	学生アンケートの集計結果について	56
2020年9月2日	大型科研費応募に向けて	55

2020年9月23日	ピアレビューの実施結果および今後の検討について	54
2020年9月23日	対面授業等の実施に係る注意事項について	54
2020年7月13-17日	リアルタイムのオンライン講義、オンデマンド形式の講義を含む8科目を対象にピアレビューを実施し遠隔授業実施のためのスキルを身につける	37
2020年10月7日	これまでの研究力強化の取り組みの報告とR3年度科研費について	53
2021年3月19日	JSPS 特別研究員（学振 DC）の制度概要および獲得に向けた申請書の書き方・準備について	59
2021年4月28日	ハイフレックス型授業の実施にあたって	52
2021年6月23日	ハラスメントの防止に向けて	53
2021年7月28日	学生アンケート各種の集計結果について	53
2021年7月28日	科研費セミナー「大型科研費の応募に向けて」	53
2021年8月27日	ICT を活用した授業形態：実践編	16
2021年11月24日	神戸大学の存在感向上のために一プレスリリースのお願い	56
2022年1月19日	2021年度文学部・人文学研究科ピアレビューについて	57
2022年2月9日	外国語による教育：問題と機会	58
2022年3月19日	JSPS 特別研究員（学振 DC）の制度概要および獲得に向けた申請書の書き方・準備について	54
2022年5月25日	ICT を活用した授業にむけて	54
2022年6月8日	大型科研費の獲得へ向けて	55
2022年7月27日	KAISER2022 の導入について	53
2022年9月7日	2022年度ピアレビューの結果報告と分析	48
2022年12月21日	各種学生アンケート集計結果についての分析	55
2023年6月14日	2022年度後期の「授業振り返りアンケート」について	52
2023年6月28日	科研費の申請に向けて 一申請書の書き方ー 基盤研究B、Cの対策	54
2023年11月15日	2023年度ピアレビューについて（報告）	55
2023年12月20日	神戸大学の広報サービス等について	58
2023年12月20日	Short Introduction to the Philosophical and Atmospheric Research at Rome Tor Vergata University	58
2024年4月24日	JSPS 特別研究員（学振 DC）の獲得に向けた準備について	52
2024年6月26日	調書の基本的な書き方	54
2024年7月24日	2024年度文学部・人文学研究科ピアレビュー（授業参観）について	52
2024年10月2日	ハラスメントの防止に向けて	50
2024年10月16日	LIER-FYT: an interdisciplinary research center dedicated to the study of social reflexivity	54

2024年11月20日	The challenges to UK higher education resulting from the withdrawal of the UK from the EU and the COVID-19 pandemic	60
2025年2月18日	KOJSPの現状と課題	56

《資料Ⅱ-11：2020年～2024年の外部評価実施状況》

実施日	外部評価委員
2020年9月2日	上田功（名古屋外国語大学外国語学部・教授）
2021年11月30日	伊藤公雄（京都産業大学・教授、京都大学・大阪大学名誉教授）
2022年9月16日	大城直樹（明治大学文学部・教授）
2023年10月11日	山上浩嗣（大阪大学大学院人文学研究科・教授）
2024年10月30日	谷口淳一（京都女子大学文学部・教授）

《資料Ⅱ-12：2010年度と2024年度の人文学研究科博士課程前期課程研究科共通科目の比較》

2010年度 研究科共通科目	2024年度 研究科共通科目
海港都市研究交流演習	古典力基盤研究
海港都市研究	海港都市研究交流演習
地域歴史遺産活用演習	地域歴史遺産活用演習
地域歴史遺産活用研究	地域歴史遺産活用研究
倫理創成論研究	倫理創成論研究
倫理創成論演習	倫理創成論演習
日本語日本文化教育演習	日本語日本文化教育演習
多文化理解演習	多文化理解演習
日本語教育研究Ⅰ・Ⅱ	日本語教育研究Ⅰ・Ⅱ
日本語教育内容論Ⅰ・Ⅱ	日本語教育内容論Ⅰ・Ⅱ
日本語教育方法論Ⅰ・Ⅱ	日本語教育方法論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
日本語研究	日本語研究
日本語研究	日本社会文化演習Ⅰ・Ⅱ
日本社会文化演習Ⅰ・Ⅱ	グローバル人文学特殊研究
	比較現代日本論特殊研究
	比較日本文化産業論特殊研究
	グローバル対話力演習Ⅰ・Ⅱ
	アカデミック・ライティングⅠ・Ⅱ
	オックスフォード夏季プログラム
	海外日本語日本文化教育実習
	臨時科目1・2

II-3. 教育内容

II-3-1. 教育課程の編成

前期課程の教育課程は、「研究科共通科目」「専門科目」および「特別研究」、後期課程の教育課程は、「研究科共通科目」と「特別演習」から構成されている。

前期課程・後期課程の研究科共通科目として、古典力・海港都市・地域歴史遺産・倫理創成・日本語日本文化教育等に関わる授業科目を設け、個別の研究や学域を越えた幅広い視野のもとに自らの研究の社会的意義を自覚させるように配慮している。なお、2012年度の文部科学省グローバル人材育成推進事業への採択を受け、翌年度から実践的な英語能力の育成を目的とする科目を加えた《資料II-12》。

前期課程の「専門科目」は、演習と講義形式による特殊研究からなる。科目数は演習科目（「特別研究」を含む）と特殊研究科目がほぼ同数となっている。人文学における研究の根幹をなす文献読解能力、資料調査分析能力、表現力の養成には演習がふさわしく、前期課程に多くの演習科目が開講されているのはそのためである。修士論文の作成は、これらの演習を受講することで初めて可能となる。後期課程の授業形態は、研究科共通科目・特別演習ともに演習が基本となる。「特別研究」および「特別演習」は、学位論文の作成に特化した演習であり、指導教員3名が、修士論文作成計画書・博士論文作成計画書《資料II-13》を参照しながら、連携して指導に当たる。

II-3-2. 学生や社会からの要請への対応

人文学研究科では、グローバル化が進む現代社会における諸問題に対応し、また社会からの要請に応えるため、教育課程の編成やそれらに配慮した取組みを以下のとおり実践している。

1. 他研究科の授業科目の履修

本研究科では、他研究科の授業科目を本研究科での専門科目と同等に扱い、修了に必要な単位として認めている。

2. 他大学との単位互換

本研究科は、国内では奈良女子大学大学院人間文化研究科、大阪大学大学院文学研究科、神戸松蔭女子学院大学大学院文学研究科、神戸市外国語大学大学院外国語学研究科と交流協定を締結しており、これらの授業科目中10単位を上限として修了に必要な単位として認めている。

海外では、全学協定および部局間協定に基づき、単位互換協定を締結している《資料II-14》。

《資料II-14：単位互換協定を締結している海外の大学 2025年3月現在》

協定校	国名	大学間協定	部局間協定
木浦大学校	大韓民国	○	
成均館大学校	大韓民国	○	
韓国海洋大学校	大韓民国	○	
ソウル国立大学校	大韓民国	○	
高麗大学校	大韓民国	○	
韓国外国語大学校	大韓民国		○
山東大学	中華人民共和国	○	
華東師範大学思勉人文高等研究院	中華人民共和国	○	
中山大学	中華人民共和国	○	
南京大学	中華人民共和国	○	
中国海洋大学	中華人民共和国	○	
復旦大学	中華人民共和国	○	
北京外国語大学	中華人民共和国	○	
武漢大学	中華人民共和国	○	
上海交通大学	中華人民共和国	○	
清華大学	中華人民共和国	○	
江南大学	中華人民共和国		○
鄭州大学	中華人民共和国		○
浙江大学	中華人民共和国		○
香港大学	中華人民共和国		○
東北大学	中華人民共和国		○
国立台湾大学	台湾	○	
国立政治大学	台湾	○	
モンゴル国立大学	モンゴル	○	
西オーストラリア大学	オーストラリア	○	
ウーロンゴン大学	オーストラリア	○	

オーストラリア商船大学	オーストラリア	○	
オタワ大学	カナダ	○	
グラーツ大学	オーストリア	○	
インスブルック大学	オーストリア		○
カレル大学	チェコ	○	
パリ第2大学	フランス	○	
パリ第10大学	フランス	○	
リヨン高等師範学校	フランス	○	
パリ第7大学	フランス	○	
リール大学	フランス	○	
エクス=マルセイユ大学	フランス	○	
バルセロナ大学	スペイン	○	
バーゼル大学	スイス	○	
バーミンガム大学	連合王国	○	
SOAS ロンドン大学東洋アフリカ研究学院	連合王国	○	
エセックス大学	連合王国	○	
ライデン大学	オランダ	○	
ソフィア大学	ブルガリア	○	
ブリュッセル自由大学	ベルギー	○	
ヴェネツィア大学	イタリア	○	
ボローニャ大学	イタリア	○	
トリノ大学	イタリア	○	
ヤゲウォ大学	ポーランド		○
ニコラウス・コペルニクス大学	ポーランド	○	
ワルシャワ大学	ポーランド		○
キール大学	ドイツ	○	
マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク	ドイツ	○	
トリーア大学	ドイツ	○	
ハンブルク大学	ドイツ	○	
ダルムシュタット工科大学	ドイツ	○	
ベルリン自由大学	ドイツ	○	
ブカレスト大学	ルーマニア	○	
「ディミトリエ・カンテミル」キリスト教大学	ルーマニア		○
サンクトペテルブルグ大学	ロシア	○	
エトヴェシュ・ロラーンド大学	ハンガリー	○	
ブタペスト・コルヴィヌス大学	ハンガリー	○	
プーラ大学	クロアチア		○
ベオグラード大学	セルビア		○
ヘブライ大学	イスラエル	○	

この制度に基づき、2022年度から2024年度の3年間に、協定校との間で受け入れ41名、派遣12名の留学生交換実績がある。2020～2021年度は新型コロナのために交換留学が実質上ストップしてしまったが、2022年

度になりまた従来の動きが戻っている。交換留学生（受け入れ）実績は《資料Ⅱ-15》、交換留学生（派遣）実績は《資料Ⅱ-16》のとおりである。

《資料Ⅱ-15：交換留学生（受入）実績》

年度	所属大学名	出身国	奨学金	期 間
2022 年度	トリノ大学	イタリア		2022年4月1日～2022年9月30日
	中国海洋大学	中国		2022年4月1日～2022年9月30日
	中国海洋大学	中国		2022年4月1日～2022年9月30日
	中国海洋大学	中国		2022年4月1日～2022年9月30日
	北京外国語大学	中国		2022年4月1日～2022年9月30日
	リヨン高等師範大学	フランス		2022年4月1日～2022年9月30日
	リール大学	フランス		2022年4月1日～2022年9月30日
	ブリュッセル自由大学	ベルギー		2022年4月1日～2022年9月30日
	ボンペウ・ファブラ大学	スペイン		2022年4月1日～2022年9月30日
	ヤゲヴォ大学	ポーランド		2022年4月1日～2022年9月30日
	ヤゲヴォ大学	ポーランド		2022年4月1日～2022年9月30日
	復旦大学	中国	JASSO	2022年10月1日～2023年3月31日
	国立成功大学	台湾		2022年10月1日～2023年3月31日
	山東大学	中国		2022年10月1日～2023年9月30日
	パリ・ナンテール大学	フランス		2022年10月1日～2023年9月30日
	パリ大学	フランス		2022年10月1日～2023年9月30日
	ベルリン自由大学	ドイツ		2022年10月1日～2023年9月30日
	リール大学	フランス		2022年10月1日～2023年9月30日
トリーア大学	ドイツ		2022年10月1日～2023年9月30日	
2023 年度	トリーア大学	ドイツ		2023年10月1日～2024年3月31日
	復旦大学	中国		2023年10月1日～2024年3月31日
	復旦大学	中国		2023年10月1日～2024年9月30日
	山東大学	中国		2023年10月1日～2024年9月30日
	南京大学	中国		2023年10月1日～2024年3月31日
	ヴェネツィア大学	イタリア		2023年10月1日～2024年3月31日
	中国海洋大学	中国		2023年4月1日～2023年9月30日
	南京大学	中国		2023年4月1日～2023年9月30日
	国立政治大学	台湾		2023年4月1日～2024年3月31日
	ヤゲヴォ大学	ポーランド		2023年4月1日～2023年9月30日
2024 年度	リヨン高等師範学校(2名)	フランス	神戸大学基金	2024年4月1日～2024年9月30日
	中国海洋大学(2名)	中国	神戸大学基金	2024年4月1日～2024年9月30日
	グラーツ大学	オーストリア		2024年4月1日～2024年9月30日
	パリ・シテ大学	フランス		2024年4月1日～2025年3月31日
	南京大学(2名)	中国		2024年4月1日～2024年9月30日

	コメニウス大学	スロバキア		2024年4月1日～2024年9月30日
	復旦大学	中国		2024年10月1日～2025年3月31日
	トリノ大学	イタリア	神戸大学基金	2024年10月1日～2025年3月31日
	南京大學	中国		2024年10月1日～2025年3月31日

※ JASSO：日本学生支援機構

《資料Ⅱ-16：交換留学（派遣）実績》

年度	派遣大学名	派遣国	奨学金	期 間
2022年度	パリ・ナンテール大学	フランス		2022年8月25日～2023年7月31日
	エクス=マルセイユ大学	フランス		2022年8月29日～2023年1月15日
	インスブルック大学	オーストリア		2022年10月1日～2023年6月30日
	ニューサウスウェールズ大学	オーストラリア		2023年2月13日～2023年8月24日
2023年度	インスブルック大学	オーストリア		2023年10月1日～2024年6月30日
	ソウル国立大学校	韓国		2023年9月1日～2023年12月21日
	エクス=マルセイユ大学	フランス		2023年9月4日～2024年5月18日
2024年度	ベルリン自由大学	ドイツ		2024年10月1日～2025年7月19日
	ハンブルク大学	ドイツ		2024年10月1日～2025年9月30日
	ボローニャ大学	イタリア		2025年2月10日～2025年7月31日
	ソウル大学	韓国		2025年3月1日～2025年12月19日
	国立台湾大学	台湾		2025年2月7日～2025年6月9日

3. ダブルディグリー・プログラム

人文学研究科は、2015年度より北京外国語大学北京日本学研究中心との間でダブルディグリー・プログラムを実施している。これは、博士前期課程の学生が在籍中に派遣先大学に最低1年間留学して所定の単位を修得し、北京外国語大学日本学研究中心と本研究科それぞれに修士論文を提出することによって、最短2年間で2つの学位を取得できるプログラムである。2015年度と28年度に各1名を派遣しており、2016年度には2名を受け入れている。

4. 連携講座

本研究科では、博士後期課程社会動態専攻に文化資源論講座を置き、奈良国立博物館や大和文華館と連携して、文化財学、文化資源学に関する教育を行い、博物館、美術館および自治体において、文化財保全、文化財行政を担当できる高度な知識を持った人材を養成している。

5. 日本語日本文化教育の取組み

本研究科では、学生が専攻する専門分野の特性を活かしながら、非日本語母語話者に対する日本語日本文化教育を行うための知識と能力を身につけることを目指す「日本語日本文化教育プログラム」《資料Ⅱ-17》を2008年度から受講を希望する博士課程前期課程の学生を対象に展開している。2010年度以降、主にこのプログラムの修了者を対象に、海外の大学における日本語日本文化教育インターンシップを実施している《資料Ⅱ-18》。

《資料Ⅱ-17：日本語日本文化教育プログラム授業科目》

別表 授業科目および必要修得単位数

	授業科目	単位数	合計単位数
必修	日本語日本文化教育演習	2	12
Ⅰ群	多文化理解演習	4	
	日本語教育研究Ⅰ		
	日本語教育研究Ⅱ		
	日本語教育内容論Ⅰ		
	日本語教育内容論Ⅱ		
	日本語教育方法論Ⅰ		
	日本語教育方法論Ⅱ		
	日本語教育方法論Ⅲ		
	海外日本語日本文化教育実習		
Ⅱ群	日本語研究	2	
	国語学特殊研究Ⅰ		
	国語学特殊研究Ⅱ		
	国語学特殊研究Ⅲ		
	国語学特殊研究Ⅳ		
	国語学特殊研究Ⅴ		
	日本語学特殊研究		
	応用言語学特殊研究		
	認知言語学特殊研究Ⅰ		
	認知言語学特殊研究Ⅱ		
	音声学特殊研究Ⅰ		
音声学特殊研究Ⅱ			
Ⅲ群	日本社会文化演習Ⅰ	2	
	日本社会文化演習Ⅱ		
	国文学特殊研究Ⅰ		
	国文学特殊研究Ⅱ		
	国文学特殊研究Ⅲ		
	国文学特殊研究Ⅳ		
	国文学特殊研究Ⅴ		
	国文学特殊研究Ⅵ		
	日本古代中世史特殊研究Ⅰ		
	日本古代中世史特殊研究Ⅱ		
	日本中世史特殊研究Ⅰ		
	日本中世史特殊研究Ⅱ		
	日本近代史特殊研究Ⅰ		
	日本近代史特殊研究Ⅱ		
	日本現代史特殊研究Ⅰ		
日本現代史特殊研究Ⅱ			
Ⅳ群	日本語教育内容論特殊講義	2	

(国際文化学 研究科目)	日本語教育方法論特殊講義	
	日本語教育応用論特殊講義	
	言語コミュニケーション論演習 [齊藤・川上] ※	

※ 言語コミュニケーション論演習は齊藤・川上担当のものに限る。

[日本語日本文化教育演習]を2単位、I群から4単位、II群・III群から各2単位、及びI群・II群・III群・IV群のいずれかから2単位、合計12単位を必要修得単位数とする。

《資料Ⅱ-18：日本語日本文化教育インターンシップ派遣実績》

年度	派遣先機関	派遣国	期 間
2021年度	ディミトリエ・カンテミル大学日本語学科	ルーマニア	2021年11月1日～2021年11月26日
	トリーア大学日文学科	ドイツ	2021年11月2日～2021年11月19日
2022年度	ディミトリエ・カンテミル大学日本語学科	ルーマニア	2022年11月1日～2022年11月30日
	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日文学科	ドイツ	2022年11月6日～2022年12月25日
	オックスフォード大学東洋学部日文学科	連合王国	2023年2月20日～2023年3月10日
2023年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日文学科	ドイツ	2023年11月2日～2024年2月1日
	北京外国語大学日本語学科	中国	2023年11月5日～2023年11月28日
2024年度	北京外国語大学日本語学科	中国	2024年11月3日～2024年11月23日
	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日文学科	ドイツ	2024年11月16日～2025年1月19日
	オックスフォード大学東洋学部日文学科	連合王国	2025年2月15日～2025年3月10日

※新型コロナウイルスの影響により 2020年度は派遣なし、2021年度はオンラインにて実施。2022年度のハンブルク大学はオンラインにて実施したが、それ以外は現地に派遣。

6. グローバル教育への取組み

人文学研究科では、文部科学省、日本学術振興会によって採択された教育研究プログラムを通じて、国際的な場で活躍できる学生の育成をはかってきた。この目的を達成するため、研究科共通科目にグローバル教育のための科目を新たに設置するなど、教育課程を充実させてきた。2012年度に文部科学省グローバル人材育成推進事業等に採択された「問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成」プログラムに基づき、人文学研究科博士課程前期課程では、高度な国際感覚を育成するための外国語授業科目群（グローバル人文学科目群）と、「アカデミック・ライティング」など優れた外国語能力とコミュニケーション能力を育成するための授業科目群（グローバル対話力育成科目群）からなる、「グローバル人文学プログラム」を実施している。このプログラムは、すべて外国語で授業が行われており、所定の単位を取得し、「外国語力スタンダード」（TOEFL等の外国語資格試験等における所定のスコア）を達成した者には、修了時に「グローバル人文学プログラム修了証」を授与している。

その結果、本プログラムが目的として掲げる「人文学的課題をグローバルな視点から考察し、日本文化の深い理解を基に異文化との対話を重ねながら、現代社会における諸問題を解決に導いていくリーダーシップとコミュニケーション能力を持った人材」が育っている。（「グローバル人材育成推進事業」については、第2部Ⅰ-1. 運営費交付金機能強化経費：実践型グローバル人材育成事業「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」を参照。）

II-4. 教育方法

II-4-1. 授業形態の組合せと学習指導法上の工夫

教育を展開する上での指導法の工夫として、例えば景観文化財の現地保存について北野の伝建地区に赴くなど、フィールド型授業も重視している《資料II-19》。

《資料II-19：「歴史地理学特殊研究II」シラバス》

基本情報			
科目分類	大学院科目	開講年次	1・2年
時間割コード	3L838	開講区分	後期
開講科目名	歴史地理学特殊研究II	曜日・時限等	水1(対面)
成績入力担当	菊地 真	単位数	2.0
授業形態	講義	ナンバリングコード	

担当教員一覧

詳細情報
■授業のテーマ
博物館・文化芸術施設と労働
■授業の到達目標
目標は、受講生が博物館等に関する基礎的知識を身につけること、自ら調べ考える好奇心を持つことである。
■授業の概要と計画
文化芸術を市民に提供する仕事とは、そもそもどのような中身かをまず学ぶ。そのうえで、博物館や図書館で働く職員は当然労働者であり、労働にまつわる諸課題が生じている。例えば非正規公務員、会計年度任用がニュースで取り上げられるが、これは文化芸術職も無縁ではない。労働基盤を守り、同時に仕事を発展させられるのか。現状を分析し、先を見据えたい。
■成績評価方法
講義形式によるが、授業のコメントペーパー、最終レポートを総合して評価する。
■成績評価基準
秀、優、良、可、不可に基づく。
■履修上の注意（関連科目情報）
専門的知識より、博物館や図書館、文化遺産などに興味があることを重視します。
■事前・事後学修
図書館に用意した参考文献を適宜読み解き、事前事後学修をしてください。
■学生へのメッセージ
博物館や図書館を利用する私たちも、資料ひいては、その施設や職員を支え協同する立場にあることに、気づいていきましょう。
■教科書

また実社会に応用できる能力を身につけることを目的として、実習型の授業も重視している。例えば、日本語教育に関連する基礎的知識を修得した上で、3週間にわたって実施される「神戸大学夏期日本語日本文化研修プログラム」等において実習を行うことで、異文化交流と日本語教育の実体験ができる授業を行っている《資料Ⅱ-20》。

《資料Ⅱ-20：「日本語日本文化教育演習」シラバス》

基本情報			
科目分類	大学院科目	開講年次	1・2年
時間割コード	3L841	開講区分	後期
開講科目名	日本語日本文化教育演習	曜日・時限等	火3(対面)
成績入力担当	阪上 彩子	単位数	2.0
授業形態	演習	ナンバリングコード	

[担当教員一覧](#)

詳細情報
<p>■授業のテーマ</p> <p>現在、日本語教育の世界は急激に多様化しており、学習のニーズ、教授法、ICTツール、評価のあり方等、様々な面で柔軟に対応できる日本語支援者が求められています。この授業ではそのような現状を踏まえ、今の時代に求められている日本語支援者の育成を目指します。</p>
<p>■授業の到達目標</p> <p>①日本語教師としての仕事、役割を理解することができる ②学習者や到達目標を考えて、日本語の授業を組み立てることができる ③日本語教材の特徴、例えばシラバスや対象者について説明できる。 ④CEFRが生まれた背景やCEFRの理念を説明できる。 ⑤学習者によってどの評価法を利用するか選択することができる。</p>
<p>■授業の概要と計画</p> <p>①本演習はハイブリッド(対面授業と遠隔授業を併用した形)で実施します。具体的な各回の内容は以下のとおりです。なお、新型コロナウイルス感染拡大により授業形態が変更となった場合は Teams でお知らせします。 ②授業の概要と計画： 第1回：(対面：教室) 授業の概要説明/日本語教育の現状と日本語教員の役割 第2回：(対面：教室) コースデザイン 第3回：(対面：教室) シラバス 第4回：(対面：教室) 日本語教材分析 第5回：(リアルタイム型授業(使用システム:Teams)詳細は Teams にて指示します。) 発表 第6回：(対面：教室) 日本語教授法 第7回：(対面：教室) JF日本語教育スタンダード 第8回：(リアルタイム型授業(使用システム:Teams)詳細は Teams にて指示します。) Can-Doを作る 第9回：(対面：教室) CEFR① 第10回：(対面：教室) CEFR② 第11回：(対面：教室) CEFR③ 第12回：(対面：教室) 評価とテスト 第13回：(リアルタイム型授業(使用システム:Teams)詳細は Teams にて指示します。) 発表① 第14回：(リアルタイム型授業(使用システム:Teams)詳細は Teams にて指示します。) 発表② 第15回：(リアルタイム型授業(使用システム:Teams)詳細は Teams にて指示します。) 発表・全体のふりかえり</p>
<p>■成績評価方法</p> <p>小テスト15%、発表2回30%、課題25%、コメントシート15%、授業への参加度15%で評価する。</p>

《資料Ⅱ-21：学修プロセスフロー》

年次		時期	事項
人文学研究科学生の学修プロセスフロー図			
【博士課程前期課程】			
1年次	4月20日まで		■ 「前期課程研究指導計画書」提出（主指導教員）
	5月20日まで		■ 「 <u>修士論文作成計画書</u> 」提出
2年次	4月10日まで		■ <u>修士準備論文を1部提出</u>
	4月20日まで		■ 「前期課程研究指導計画書」提出（主指導教員）
	6月第3水曜日		前期課程公開研究報告会
	前期課程公開研究報告会の翌週の金曜日		■ 「前期課程公開研究報告会終了報告書」を提出（主指導教員）
	11月16日まで		■ 「 <u>修士論文題目届</u> 」提出
	1月16日まで		■ <u>修士論文を1部提出</u>
	2月中旬		最終試験
	3月上旬		博士課程前期課程修了判定
	3月下旬		学位記授与式
【博士課程後期課程】			
1年次	4月20日まで		■ 「後期課程研究指導計画書」提出（主指導教員）
	5月31日まで		■ 「 <u>博士論文作成計画書</u> 」提出
2年次	4月20日まで		■ 「後期課程研究指導計画書」提出（主指導教員）
	7月1日まで		■ 「後期課程公開研究報告会発表題目」を提出（主指導教員）
	9月30日		後期課程公開研究報告会
	10月10日まで		■ 「後期課程公開研究報告会終了報告書」提出（主指導教員）
3年次	4月20日まで		■ 「後期課程研究指導計画書」提出（主指導教員）
	5月31日まで		■ <u>博士予備論文を3部提出</u>
	6月最終水曜日または7月第1水曜日		博士予備論文公開審査
	博士予備論文公開審査の翌週の金曜日		■ 「博士予備論文公開審査報告書」提出（主指導教員）
	12月1日～12月10日		■ <u>博士論文を5部提出</u>
	1月～2月		最終試験
	3月上旬		博士課程後期課程修了者（学位授与）認定
	3月下旬		博士学位授与
備考：_____は、学生が提出するもの。			
■は教務学生係に提出するもの。			
博士課程前期課程9月修了者の修士論文題目は5月15日まで、修士論文提出は7月15日まで。			
博士課程後期課程9月修了者の博士論文提出は、7月1日から7月10日まで。			
(注) 時期が休日にあたる時は、その前日とします。ただし、修士論文提出については、その翌日とします。各年度の時期については、前年度の12月に掲示により通知します。			

学位論文の提出条件・作成要領は、人文学研究科博士課程後期課程の一期生が学位論文を提出するのに合わせて、2009年度に「学位論文受理条件（申合せ）」および「学位論文等作成要領」を作成して明文化し、学生に周知した《資料Ⅱ-22》《資料Ⅱ-23》。

《資料Ⅱ-22：学位論文受理条件（申合せ）》

論文博士 [2009年11月より適用]

原則として、出版されている研究書あるいは出版が内約されている研究書であること。出版が予定されていない場合には、2本以上の査読誌掲載論文を含んでいること。その場合、学位取得後1年以内に電子媒体サービス等を利用して刊行すること。

課程博士 [2010年4月入学者より適用]

- (1) 学位論文の内容を、査読誌ないしはそれに準ずる研究誌に刊行していること（採択済みも含む）。なお、主指導教員が所属している教育研究分野でしかるべき規定を設けている場合には、この規定に加えて、当該教育研究分野の規定を尊重する。
- (2) 特段の理由がない限り、電子媒体サービス等を利用して、学位論文を学位取得後1年以内に刊行すること。

《資料Ⅱ-23：学位論文等作成要領》

学位論文の審査を願ひ出る者は、この作成要領に従って以下の書類を用意提出すること。

1 申請書類について

次に掲げる書類等を主指導教員を経て研究科長に提出するものとする。ただし、提出にあたっては、必ず主指導教員及び教務学生係の点検を受けること。

- | | |
|------------------------------|-----------|
| (1) 学位論文審査願 | 1部 |
| (2) 学位論文提出承認書 | 1通 |
| (3) 論文目録 | 1部 |
| (4) 学位論文 | 5部 |
| | 1部（電子データ） |
| (5) 論文内容の要旨（4,000字程度、日本語による） | 7部 |
| | 1部（電子データ） |
| (6) 履歴書 | 1部 |
| (7) 参考論文 | 1部 |

2 学位論文について

- ・ 製本すること。（簡易製本可）
- ・ 規格は自由であるが、A4版が望ましい。
- ・ 表紙には、提出日、論文題目等を明記すること。
- ・ 提出後は、訂正、差し替えができないので、誤字、脱字等がないように注意すること。
- ・ 外国語による論文の場合は、提出論文の扉に、論文題目とその和訳（括弧書き）を併記すること。
- ・ 共著論文のうち、次の条件を満たしているものは、学位論文として受理することができる。
 - ①論文提出者が研究及び論文作成において主たる役割を務めていること。
 - ②学位論文の共著者から、当該論文を論文提出者の学位論文とすることについての承諾書が得られること。（別紙承諾書添付）
- ・ 電子データについてもメールにて提出すること。

3 論文目録について

(1) 題目について

- ① 題目（副題を含む）は、提出論文のとおり記載すること。
- ② 外国語の場合は、題目の下にその和訳（括弧書き）を併記すること。

(2) 印刷公表の方法及び時期について

- ① 公表は、単行の書籍又は学術雑誌等の公刊物（以下「公表誌」という。）に登載して行うものであること。
- ② 論文全編をまとめて公表したものについては、その公表年月、公表誌名（雑誌の場合は、巻・号）又は発行書名等を記載すること。また、論文を編・章等の区分により公表したものについては、それぞれの区分ごとに公表の方法・時期を記載すること。
- ③学位論文（編・章）について、別の題目で公表した論文をもって公表したものとする場合は、その題目（公表題目）を（ ）を付して併記すること。
- ④ 未公表のものについては、次の記載例を参照の上、その公表の方法、時期の予定を記載すること。

(記載例)

イ すでに出版社等に提出し、出版が内約されている場合。

題目 ○○○○○○○○○ ○○○出版社から○○○○年○○月 刊行予定

ロ すでに投稿し、学会等において、掲載期日が決定しているが、申請手続の時点において、印刷公表されていない場合。

題目 ○○○○○○○○○ ○○○学会誌○巻○号
○○○○年○○月○○日 掲載予定

ハ 現在投稿中の場合。

題目 ○○○○○○○○○ ○○○学会誌 投 稿 中
○○○○年○○月○○日 投稿済

ニ 近く投稿する予定の場合。

題目 ○○○○○○○○○ ○○○学会誌
○○○○年○○月投稿予定

⑤ 共著の場合は必ず共著者名を付記すること。

(3) 冊数について

学位論文1通についての冊数を記載すること。

(4) 参考論文について

すでに学会誌等に発表した論文題目を記載し、その論文を添付すること。

4 履歴書について

(1) 氏名について

戸籍のとおり記載し、通称・雅号等は一切用いないこと。(旧姓でも可)

(2) 学歴について

① 高等学校卒業後の学歴について年次を追って記載すること。

② 在籍中における学校の名称等の変更についても記載すること。

(3) 職歴・研究歴について

原則として常勤の職について、機関等の名称、職名等を正確に年次を追って記載すること。ただし、学歴と職歴に空白となる期間があり、非常勤等の職歴がある場合はこれを記入し、職歴等に不明な期間がないように記載すること。

(4) 賞罰について

特記すべきと思われるものを記載すること。

5 論文内容の要旨について

記載方法については、記入例を参照。

ティーチングアシスタント (TA) は、授業の必要性に応じて適宜配置している《資料Ⅱ-24》。TA 採用者に対しては「TA ハンドブック」を配布するとともに、授業担当者から個別にガイダンスを行っている。

《資料Ⅱ-24：TA の人文学研究科への配置実績 (2020年度～2024年度、単位：人)

年度	講義科目	演習・実習科目等
2020年度	0	12
2021年度	4	19
2022年度	4	11
2023年度	6	9
2024年度	3	15

Ⅱ-4-2. 主体的な学習を促す取組

シラバスは、すべてウェブサイト上に公開しており、担当教員名、講義目的、授業内容、成績評価・基準、準備学習等についての具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等の履修情報を掲載し、学習の便宜を図っている。履修科目登録にあたっては、指導教員が点検し、学生の意欲や関心に沿った履修を促している。シラバスに参考文献や授業の履修条件を適宜示すことにより、学生の主体的学修を促している。また、オフィスアワーや連絡先が各教員のシラバスに記載されており、授業時間外に学修・学生生活に関する質問・相談

に応じている。

大学院生の学習意欲を高めるために、海外での研究発表や調査・実験を行う機会を提供している。特に後期課程の大学院生に対しては、特に海外で開催される学会への参加について、大学院学生海外派遣援助事業などを活用して支援してきた《資料Ⅱ-25》《資料Ⅱ-26》。また、海港都市研究センターは、台湾・大韓民国・中華人民共和国の大学と連携して、大学院生の研究発表を中心とする国際シンポジウム（海港都市国際シンポジウム）を継続的に開催している。2017年度には提携校と連携して国際シンポジウムを開催し、大学院生の海外派遣を行った。2020年度と2021年度は新型コロナウイルスの影響で海外派遣がストップしていたが、2022年度には再開することができた。

《資料Ⅱ-25：2020年度から2024年度までの大学からの資金援助を得た海外派遣件数》

年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
件数	0	0	3	5	23

《資料Ⅱ-26：2024年度における大学からの資金援助を得た海外派遣》

教育研究分野	派遣先	派遣目的	発表論文名
英米文学、社会学	国立台湾大学（台湾）	国際会議 INTERFACEing2024 参加、研究発表	
社会学	韓国海洋大学、国立慶州歴史博物館（韓国）	世界海洋史大会参加、「多文化子ども・若者の育ちと進路に関する聞き取り調査」にかかる報告、資料収集	
国文学、中国・韓国文学（3名）、社会学（2名）	復旦大学（中国）	神戸復旦北京三大学人文フォーラムに参加、研究交流	
中国・韓国文学（2名）	北京外国語大学（中国）	「中国の日本学研究と日本の中国学研究国際学術大会（邦訳）」への参加、発表	
芸術学（3名）	パリ大学ナンテール校、フランス国立図書館 他（フランス）	パリ大学ナンテール校での学生シンポジウム参加 等	
国文学	ソウル大学校 他（韓国）	次世代研究者挑戦的研究プログラムによる学会参加、調査・情報収集	
社会学	コンコルディア大学（カナダ）	次世代研究者挑戦的研究プログラムによる学会参加、報告・資料収集	
社会学	ヴロツワフ大学（ポーランド）	次世代研究者挑戦的研究プログラムによる学会参加、報告・資料収集	
日本史学	呉越文化博物館、浙江大学、温州博物館、浙江師範大学、金華博物館 他（中国）	次世代研究者挑戦的研究プログラムによる研究会参加、報告・資料収集	
芸術学	フランス国立図書館（フランス）	次世代研究者挑戦的研究プログラムによる資料調査、研究打合せ	
芸術学	リエカ大学、ザグレブ大学（クロアチア）	次世代研究者挑戦的研究プログラムによる学会参加・発表、資料調査	
国文学	ソウル大学（韓国）	次世代研究者挑戦的研究プログラムによる資料収集、論文執筆	
国文学	北京外国語大学（中国）	2024年度日本語日本文化教育インターンシップ活動参加	
社会学	ハンブルク大学（ドイツ）	2024年度日本語日本文化教育インターンシップ活動参加	

環境面では、2007年度の学舎改修に際して学生用スペースを拡張したが、2010年度以降にはラーニングコモন্ズの設置、情報処理室の拡充などを行うことで、《資料Ⅱ-27》のように主体的な学修を促す環境を整備している。

《資料Ⅱ-27：主体的な学習を促す環境の整備項目》

施設等	概要
図書館 (日本文化資料コーナー)	人文学研究科・文学部の人文科学図書館は書籍約33万冊を有し、毎年確実に蔵書数を増やしている。授業期間中は、平日（8時45分～19時）および土曜日（10～18時）、試験期間中は、平日の夜間（21時まで）も開館している。（注：2022年度はCOVID-19の影響により時間短縮・臨時閉館などの措置が随時なされた。また現在、日祝日は閉館している） 「日本文化資料コーナー」を設けて資史料、貴重図書、レファランズ類を集中的に配架し、複数の辞書類・資料を同時に縦覧する必要がある歴史・文学系等の学生の利便を図っている。
学生用 共同研究室	学生が個人あるいはグループで調査・研究するために使用できる「共同研究室」を教育研究分野ごとに設置し、学生の自主学習に配慮している。共同研究室には辞書や専門書等も整備されており、学生はここで授業の予習や復習、研究発表のための資料作成などを行うことができる。
コモンルーム	学生がグループ学習や研究会などのために自由に使用することのできる「コモンルーム」を3ヵ所設置し、学生の自主学習へ配慮している。ホワイトボードを使っての議論の場として活用したり、研究発表や面接の練習をしたりするなどさまざまな形で使われている。
共同談話室	教員と学生が共同研究、読書会など行うために使用することができる「共同談話室」を5ヵ所設置し、自由な共同学習や演習等の授業に活用している。各種の読書会、研究会の会合などが活発に行われている。
情報機器	学生が利用できるコンピューターを人文科学図書館に16台設置するとともに、各専修の共同研究室や実験室などにも適宜配置している。実習などの授業のほか、学生の自主学習に利用されている。
教育機器	視聴覚機材を2009～2011年度にB棟、2012年度はC棟にも設置し、ほとんどの教室で視聴覚機材（プロジェクター、スクリーン、DVDなど）を活用した授業ができるようになった。Webカメラなどの遠隔設備を数ヵ所に導入し、双方向の遠隔授業を可能とするなど、機器の更新を随時行っている。
ラーニング コモন্ズ	自由に机と椅子を組み合わせ、図書館資料を自在に使用し、グループで議論しながら学習を進めることのできるスペースとして、「ラーニングコモন্ズ」が人文科学図書館に設置された。2013年度から運用が始まり、自主学習や演習等の授業に活用されている。

Ⅱ-5. 学業の成果

Ⅱ-5-1. 学生が身に付けた学力や資質・能力

本研究科博士課程前期課程の学位取得等の状況は、《資料Ⅱ-28》のとおりである。ここ数年、人文学研究科博士課程前期課程の入学者の標準修業年限（2年）内修了者の比率は、平均約80%となっている。本研究科博士課程後期課程の学位取得状況は《資料Ⅱ-29》のとおりである。2007年度の人文学研究科への改組以後は、修業年限（3年）内の学位取得者の比率は平均14.73%となっている。2024年度の修士論文題目を《資料Ⅱ-30》に、博士論文題目を《資料Ⅱ-31》に示した。また、専修教育職員免許状の取得状況は《資料Ⅱ-32》のとおりである。

多数の学生が国際学会や全国規模の学会等で研究成果を発表し、優秀論文賞を受賞するなど、在学生の研究成果が各種学会等において高く評価されている《資料Ⅱ-33》。

《資料Ⅱ-28：人文学研究科（博士課程前期課程）の修士学位取得状況一覧 2025年3月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者数 (a)	修了者数 (b)	(内数)標準年限内 修了者数 (c)	標準年限内修 了率 (c/a)
2019年 (2020年)	45	47	36	80%
2020年 (2021年)	40	43	36	90%
2021年 (2022年)	43	37	33	76.7%
2022年 (2023年)	49	46	44	89.8%
2023年 (2024年)	37	33	30	81%

《資料Ⅱ-29：人文学研究科（博士課程後期課程）の博士学位取得状況一覧 2025年3月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者数 (a)	修了者数 (b)	(内数)標準年限内 修了者数 (c)	標準年限内修 了率 (c/a)
2018年 (2020年)	19	16	4	21.1%
2019年 (2021年)	20	14	4	20.0%
2020年 (2022年)	15	15	3	20.0%
2021年 (2023年)	17	8	3	17.6%
2022年 (2024年)	16	10	0	0%

《資料Ⅱ-30：2024年度人文学研究科博士課程前期課程修了者の修士論文題目》

専攻	教育研究分野	修士論文題目
文化構造専攻	国文学	日本語学からの台湾語仮名の考察 —2 モーラ表記を対象に—
	国文学	椎名麟三研究：受洗前の作品を中心に
	国文学	御伽草子『うたたね草紙』の研究 —石山観音信仰圏の物語として—
	国文学	遠藤周作研究—人種と宗教の問題
	中国・韓国文学	早期朱西甯論
	中国・韓国文学	蕭紅の描く人と自然-『生死場』『呼蘭河伝』を中心に-
	中国・韓国文学	巖歌苓の小説における「文工団」
	中国・韓国文学	『三体』におけるフェミニズム翻訳実践—日本語訳を中心に—
	英米文学	A Comparative Study of Harold Pinter's <i>Old Times</i> and <i>Ashes to Ashes</i>
	英米文学	A Lacanian Analysis of Philip K. Dick's <i>VALIS</i>
	ヨーロッパ文学	エリック・サティの「エクリチュール」—音楽をとりまく言語表現について—
ヨーロッパ文学	E. T. A. ホフマン『ブランビラ王女』における〈衣装〉と自己	
社会動態専攻	日本史学	明治初期の三田町における町制の展開
	日本史学	国家形成期における旦波と倭王権との政治的関係
	日本史学	国家形成期における讃岐と地域間交流
	日本史学	自治党構想と防長倶楽部
	日本史学	中世成立期の寺社造営事業と杣・津
	西洋史学	18世紀パリにおける劇場の運営と観客 —王立劇団コメディ＝フランセーズを中心に—
	西洋史学	アンシャン・レジーム期フランスにおける死刑執行人と治安維持 —パリと地方の視点から—
	言語学	日本語におけるコピュラ「ある」と二重否定の分析
	言語学	日本語関係節の統語構造とその派生—島の制約を再考する—
	言語学	但馬方言における疑問文イントネーションの変化と形態・意味・音韻構造

社会学	「被災経験」の社会学的再定義—複数の立場からの「災害の語り」—
社会学	VTuber の労働と人生—VTuber 本人の語りから
社会学	探究学習をめぐる学校現場のポリティクス—ある地方公立高校のモノグラフ
社会学	ジェンダーからみた現代中国潮汕地域の家族と社会 —重男軽女思想を軸にした広東省普寧市でのフィールドワークから
社会学	中国農村における世代間関係の実態と変容—四川省C村のフィールドワークより—
社会学	ポスト・トゥルース時代における中国のメディアと社会 —「胖猫事件」と「姜萍事件」をめぐる世論戦に関する考察—
美術史学	マティスのニース期について—オダリスク作品再評価の試み
美術史学	狩野孝信における風俗画制作—「北野社頭遊楽図屏風」を中心に
美術史学	パオロ・ヴェロネーゼ《レパントの海戦の寓意》 (ヴェネツィア、アカデミア美術館蔵) について
美術史学	山本芳翠《浦島》について
地理学	植民地都市における植民者と被植民者の場所の経験 —アルジェを舞台とした比較文学による—

《資料Ⅱ-31：2024年度人文学研究科博士課程後期課程修了者の博士論文題目》

専攻	教育研究分野	博士論文題目
文化 構造 専攻	国文学	豊島与志雄研究
	国文学	五木寛之作品研究—エンターテインメントの戦略—
	英米文学	ブランウェル・ブロンテ初期作品の世界—ハワースから英国社会と大英帝国を観察した作家
社会 動態 専攻	日本史学	一九三〇年代における東京都制問題の研究
	日本史学	満鉄調査部と「満洲」農村実態調査
	西洋史学	元首政期ローマ帝国におけるギリシア都市間の相互不和と帝国統治
	言語学	大阪方言の音調とその世代間変化
	社会学	G・ジンメル社交性論の研究—ドイツ語圏社会学における「個と社会」思想の系譜と問題系から—
	社会学	Rhythm and disruption in the fields: A phenomenological examination of agricultural working mobilities and rural landscape (re)generation in an upland Japanese village (日本山間部農村のリズムと非リズム—農業労働の移動性と農村景観の(再)生成に関する現象学的研究)
美術史学	1960年代における抽象画家に関する研究—ウィレム・デ・クーニングとロバート・ライマンを事例に	

《資料Ⅱ-32：2020年度～2024年度教育職員免許（専修免許状）取得者数》

年 度	中学校専修	高等学校専修
2020年度	2	3
2021年度	8	9
2022年度	2	3
2023年度	9	11
2024年度	8	12

《資料Ⅱ-33：学生受賞者一覧（2011年度以降）》

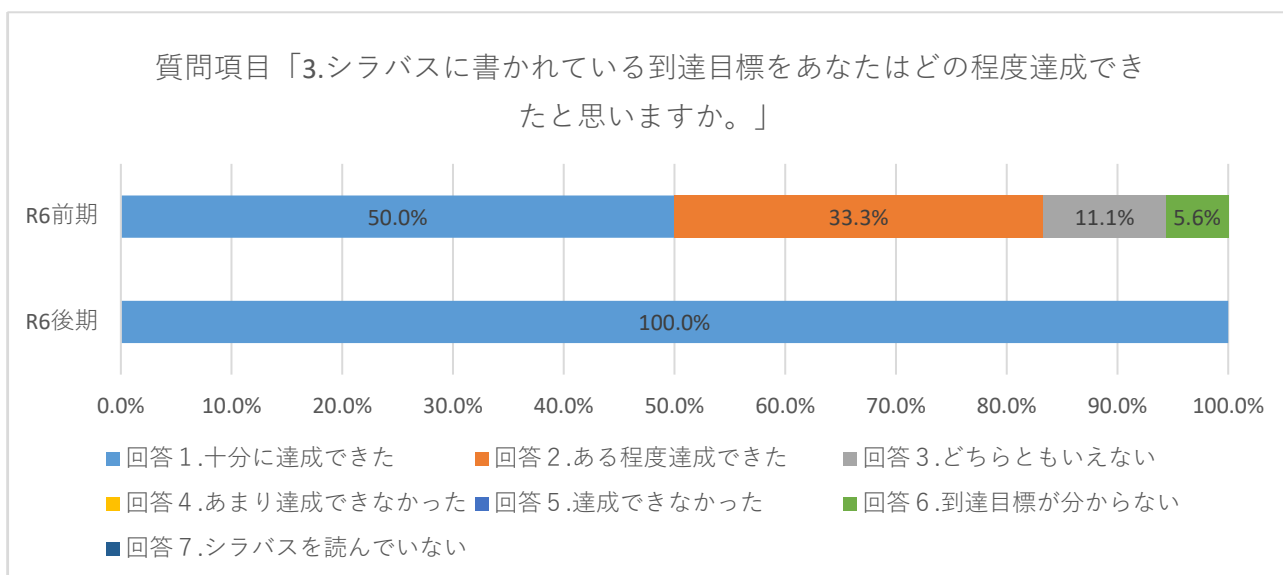
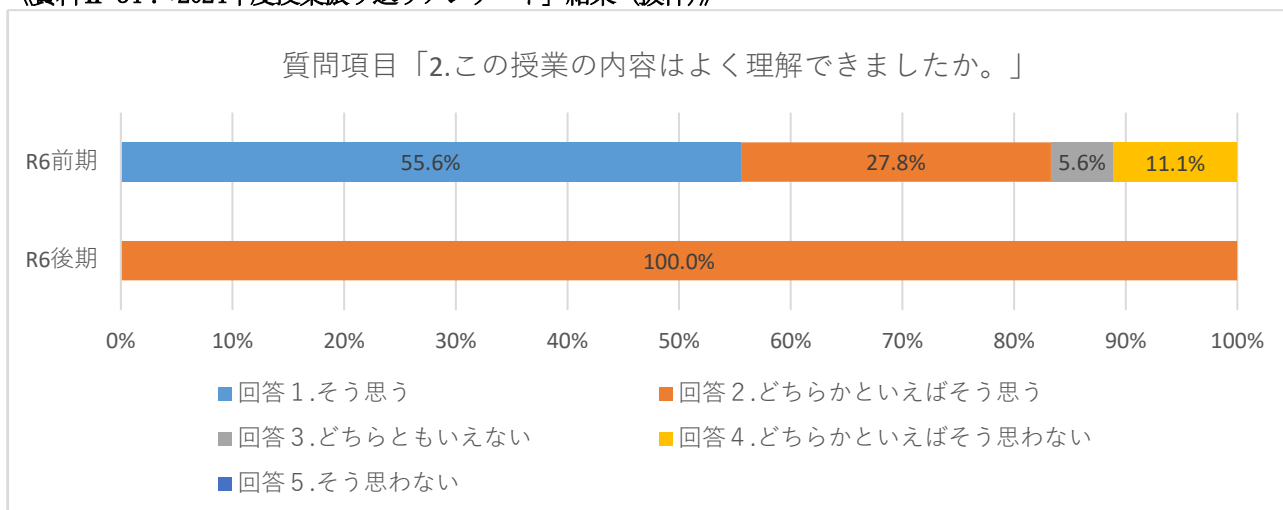
氏名	所属（受賞時）	成績功績等の概要
李瑩瑩	人文学研究科 博士課程後期課程	論文「上代漢字文献における「矣」の用法」が、2011年度漢検漢字文化研究奨励賞・佳作（財団法人 日本漢字能力検定協会）を受賞した。（2011年度）
八木彩乃	人文学研究科 博士課程前期課程	グローバルCOE「心の社会性に関する教育研究拠点」総括シンポジウム「心はなぜ、どのように社会的か？ ～フロンティアとアジェンダ～」(2012年3月17日開催)で若手ポスターアワードを受賞した。（2011年度）
大杉千尋	人文学研究科 博士課程後期課程	論文「イーゼンハイム祭壇画《キリスト復活》に関する一考察 —「オランス型」キリストの機能をめぐって」により、第12回美術史論文賞を受賞した。（2014年度）
Charis Eisen	人文学研究科 博士課程後期課程	選択がないような状況における人々の行動の文化差および自己観による影響を検討した研究内容が独創性や発展性の面で高く評価され、日本社会心理学会の若手研究者奨励賞を受賞した。（2015年度）
竇新光	人文学研究科 博士課程後期課程	中国国家優秀自費留学生賞を受賞した。（2016年度）
王輝楷	人文学研究科 博士課程後期課程	中国国家優秀自費留学生賞を受賞した。（2016年度）
Charis Eisen	人文学研究科 博士課程後期課程	学術研究活動において、国際的規模又は全国的規模の学会から賞を受けたものとして本学の学生表彰を受けた。（2016年度）
田中大貴	人文学研究科 博士課程後期課程	日本人間行動進化学会第9回大会（2016年12月10日-11日）で行ったポスター発表に対して若手奨励賞を受けた。（2016年度）
川上恵理	人文学研究科 博士課程後期課程	美術史の分野では新人の登竜門である鹿島美術財団の優秀賞を受賞した。（2017年度）
佐々木純哉	人文学研究科 博士課程前期課程	権威のあるグレンツェンピアノコンクール第9回全国大会の大学・一般コースにおいて、金賞（最高位）を獲得したことにより本学の学生表彰を受けた。（2017年度）
徳宮俊貴	人文学研究科 博士課程後期課程	関西社会学会第70回大会での研究報告に対して、奨励賞を受けた。（2019年度）
大塚優美	人文学研究科 博士課程後期課程	美術史の分野では新人の登竜門である鹿島美術財団の財団賞を受賞した。（2023年度）
河本真夕	人文学研究科 博士課程後期課程	論文「ナバレーテ・エル・ムード《聖ヤコブの殉教》—描かれた涙とエル・エスコリアル修道院聖具室との関連」で美術史学会の『美術史』論文賞を受賞した。（2023年度）
徐子程	人文学研究科 博士課程後期課程	The English Linguistic Society of Japan 17th International Spring Forum（2024年5月25日～26日）での研究発表に対し、優秀発表賞（佳作）を受賞した。（2024年度）

Ⅱ-5-2. 学業の成果に関する学生の評価

「授業評価アンケート」2024年度の結果では、教育の成果や効果に関する質問項目の「この授業の内容はよく理解できましたか。」については、年間を通じて最上点と次点の回答者の比率がきわめて高い。「シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。」も同様である。《資料Ⅱ-34》。

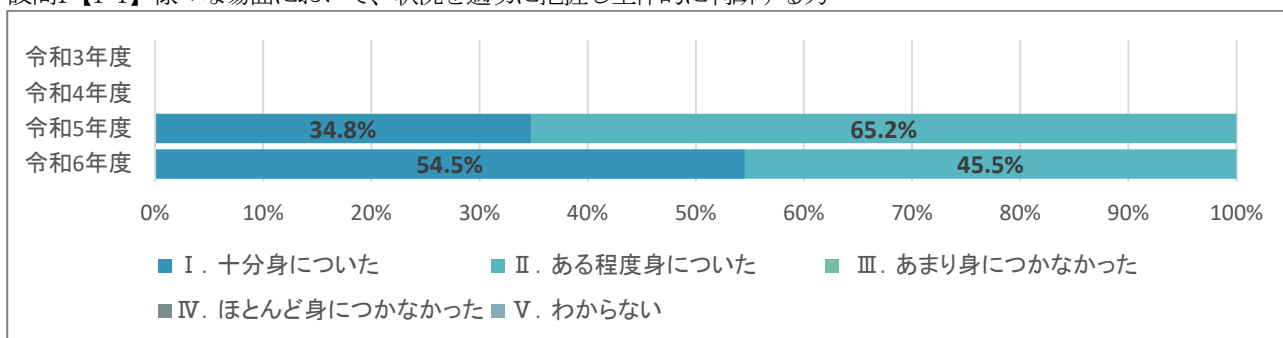
また、2024年度の修了時アンケートでは、「様々な場面において、状況を適切に把握し主体的に判断する力」、「専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力」、「他の学問分野の基本的なものの考え方を学び、自らの専門分野との違いを理解する力」、「能動的に学び、新たな発想を生み出す力」のいずれの設問に対しても、最上点と次点の回答者の比率がきわめて高い。これに比すると「複数の言語で異なる文化の人々と意思を通じ合うことができる力」については同回答の比率が低い。これは「大学院課程において、【外国語の運用・表現能力】がどの程度身についたと思いますか」に対する回答と同じ傾向を反映したものと見なせる。今後、その原因を考えてゆく必要があるだろう 《資料Ⅱ-35》。

《資料Ⅱ-34：「2024年度授業振り返りアンケート」結果（抜粋）》

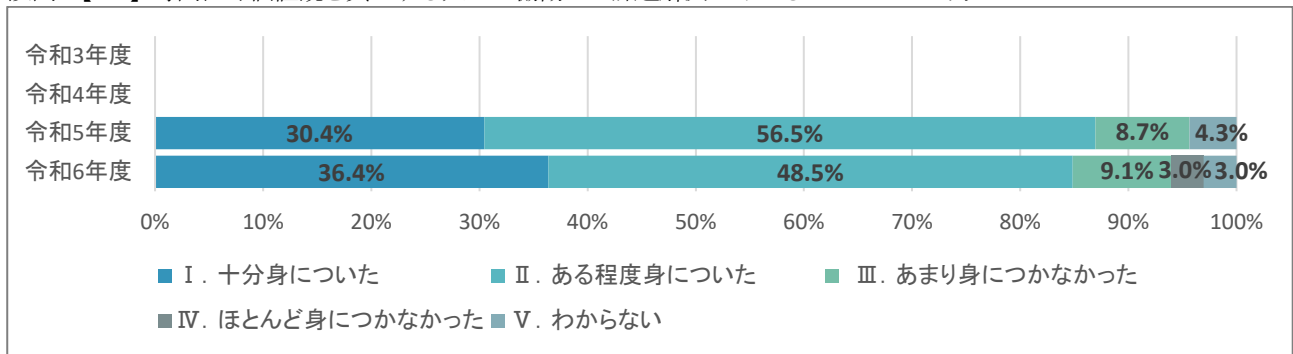


《資料Ⅱ-35 2024年度人文学研究科修了時アンケート」結果（抜粋）》

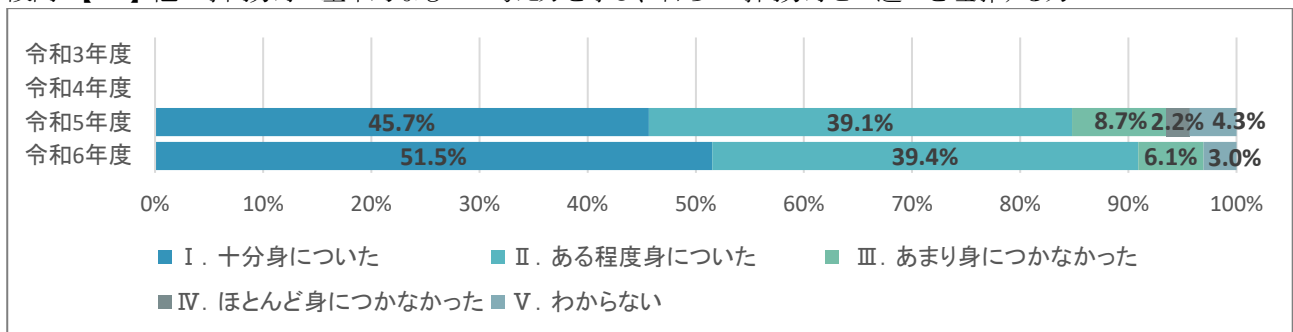
設問1【1-1】様々な場面において、状況を適切に把握し主体的に判断する力



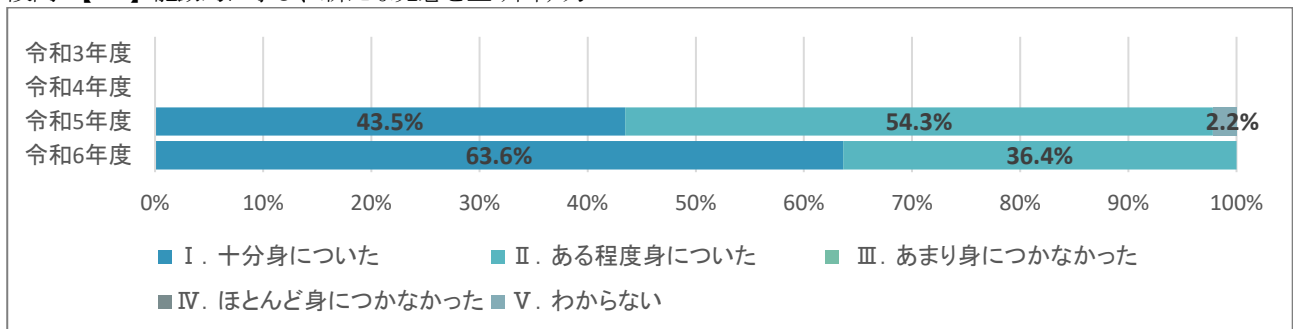
設問2【1-2】 専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力



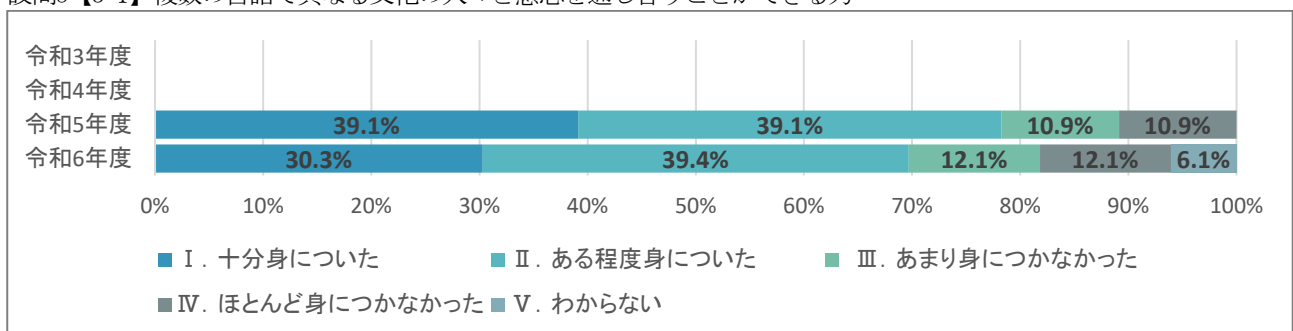
設問3【2-1】 他の学問分野の基本的なものの考え方を学び、自らの専門分野との違いを理解する力



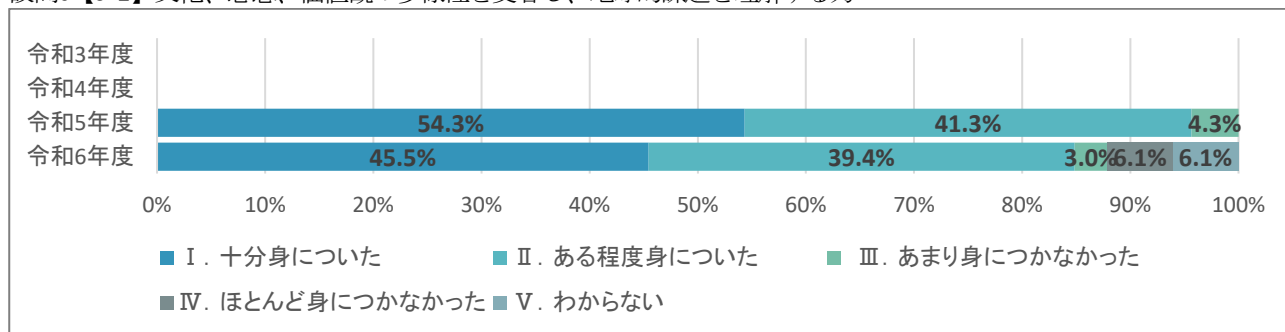
設問4【2-2】 能動的に学び、新たな発想を生み出す力



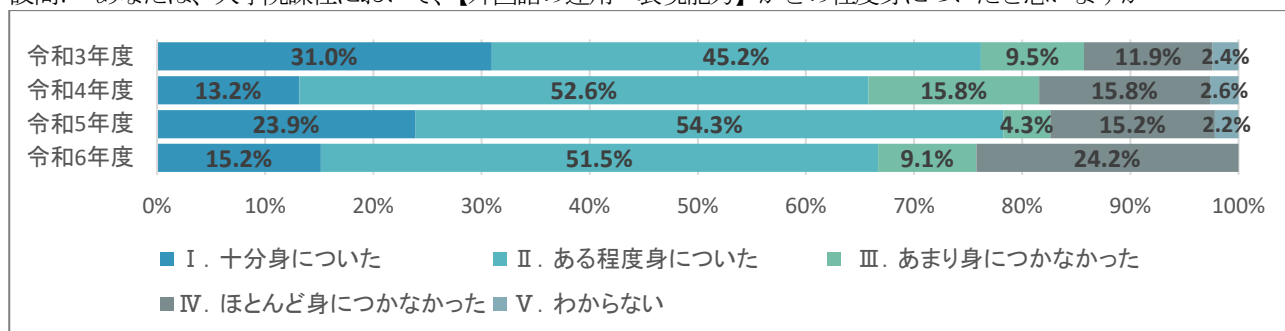
設問5【3-1】 複数の言語で異なる文化の人々と意思を通じ合うことができる力



設問6【3-2】文化、思想、価値観の多様性を受容し、地球的課題を理解する力



設問7 あなたは、大学院課程において、【外国語の運用・表現能力】がどの程度身についたと思いますか



II-6. 進路・就職の状況

II-6-1. 修了後の進路の状況

人文学研究科博士課程前期課程の就職率・進学率は《資料II-36》、進路状況は《資料II-37》のとおりである。進路就職先としては教育・研究関係や公務員など、本研究科の教育成果が活かされる職種に就く者も多いが、近年は一般企業に就職する者も一定数いる。就職希望者の就職率は、一時的に減少傾向にあるが比較的安定しており、前期課程修了が社会で働く上でハンディにはなっていないことがうかがえる。

《資料II-36：人文学研究科（博士課程前期課程）修了者の就職率・進学率》

修了年度	修了者数	進学者	就職者	就職希望者	進学率	就職希望者の就職率
2020年度	47	7	22	40	14.9%	85.1%
2021年度	43	13	19	26	30.2%	73.7%
2022年度	37	10	19	26	27.0%	73.0%
2023年度	51	14	21	37	27.5%	56.8%
2024年度	34	11	19	22	32.4%	86.4%

《資料II-37：人文学研究科修了生（博士課程前期課程）の進路状況》

卒業年度	一般企業	学校教育・その他教育	国家公務員・地方公務員	進学者
2020年度	16	5	1	7
2021年度	12	7	0	13
2022年度	14	2	4	9

2023年度	12	7	2	14
2024年度	13	4	2	11

人文学研究科博士課程後期課程の修了者の就職先（常勤職）は、《資料Ⅱ-38》のようになっている。常勤研究・教育職への就職は昨今の日本において極めて厳しいのが現実であるが、国内外の大学の教員、各種研究機関の研究員、博物館等の学芸員など、専門を生かした職業に就く傾向にある。また、《資料Ⅱ-39》に示すように数年単位で見れば日本学術振興会特別研究員（PD）に採用された者も少なくない。また本研究科は、《資料Ⅱ-40》のように、各種研究プロジェクトに優秀な大学院生を一定数リサーチアシスタントとして採用しているほか、《資料Ⅱ-41》のように、若手研究者を支援する目的で、標準修業年限内に修了した学生を人文学研究科や文学部の非常勤講師として2年間を限度に採用している。さらに、日本学術振興会の教育改革支援プログラムなどの経費によって学位取得者を学術推進研究員として採用している。このような形で、博士号取得後の若手研究者の研究キャリアを支援している。

《資料Ⅱ-38：人文学研究科（博士課程後期課程）修了者の進路（常勤職のみ）》

修了年度	大学教員	各種研究機関研究員	博物館・美術館等学芸員	中学校・高等学校・高等専門学校教員	日本学術振興会特別研究員	本研究科研究員	その他
2020年度	4	0	0	1	1	0	1
2021年度	1	0	0	0	0	1	2
2022年度	1	0	0	0	0	0	1
2023年度	0	0	0	0	0	0	0
2024年度	0	0	0	1	0	0	1

《資料Ⅱ-39：日本学術振興会特別研究員採用数》

年度	PD	DC
2020年度	4	7
2021年度	4	6
2022年度	2	4
2023年度	1	6
2024年度	1	8

《資料Ⅱ-40：リサーチアシスタント採用者数》

年度	採用者数	備考
2020年度	6	本部からの配分のみ
2021年度	5	本部からの配分のみ
2022年度	4	本部からの配分のみ
2023年度	8	本部からの配分のみ
2024年度	4	本部からの配分のみ

《資料Ⅱ-41：標準修業年限内学位論文提出者への支援（新規採用）》

論文提出年度	教育研究分野	職名
2020年度	哲学 社会学 社会学	学術研究員、非常勤講師 学術研究員、非常勤講師 非常勤講師
2021年度	該当者無	
2022年度	哲学 言語学	学術研究員、非常勤講師 学術研究員
2023年度	倫理学	非常勤講師
2024年度	芸術学	学術研究員

Ⅲ. 研究（文学部・人文学研究科）

Ⅲ-1. 文学部・人文学研究科の研究目的と特徴

文学部・人文学研究科は、人文学すなわち人間と文化に関わる学問を扱い、哲学・文学・史学・言語学・行動科学などの人文系諸科学を包括している。以下に文学部・人文学研究科の研究目的、組織構成、研究上の特徴について述べる。

Ⅲ-1-1. 研究目的

1. 文学部・人文学研究科は、人類がこれまで蓄積してきた人間・文化および社会に関する古典的な文献の原理論的研究並びにフィールドワークを重視した社会文化の動態的分析を通じ、新たな社会的規範や文化の形成に寄与する研究を行うという目的を掲げている。
2. この研究目的を達成するため、現行の中期目標に「卓越した研究成果を世界に発信するとともに、現代社会が抱える様々な課題にも取り組む」ことを定めている。
3. また「既存の学術分野の深化・発展と学際的な分野融合領域の開拓だけでなく、未来社会を見据えた重点分野における先端研究を展開し、さらに、将来これらの研究を担う優れた若手研究者の養成・輩出に努める。」という中期目標に沿って複数の専門分野から成る教育研究組織を活用した共同研究を行うとともに、「多様で広範なレベルで国際・地域社会との連携を強め、教育研究活動の成果を広く社会に還元する。」という中期目標に沿って専門分野の業績を一般向けに解説した著書等で研究成果を広く社会へ発信する。
4. 以上を通して、当該分野での国内外の研究水準を引き上げ、さらに人文学のみならず他の専門分野の研究にも貢献することを目指す。

Ⅲ-1-2. 組織構成

これらの目的を実現するため、人文学研究科では《資料Ⅲ-1》のような組織構成をとっている。

《資料Ⅲ-1：組織構成》

専攻	講座	教育研究分野
文化構造	哲学	哲学、倫理学
	文学	国文学（国語学を含む）、中国・韓国文学、英米文学、ヨーロッパ文学
社会動態	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム論	心理学、言語学（英語学を含む）、芸術学
	社会文化論	社会学、美術史学、地理学、文化資源論（連携講座：後期課程のみ）

Ⅲ-1-3. 研究上の特徴

1. 文学部・人文学研究科の研究上の特徴は、人文学の専門分野の諸研究をたえず深化させる一方、その多様な研究方法と研究成果を地域社会の文脈に定位しながら現代日本の諸問題にも適用し、学際的かつ国際的に展開される人文学を構築してきた点にある。
2. 文学部・人文学研究科は、現在「人文学推進インスティテュート」の下に「地域連携センター」「倫理創成プロジェクト」「日本語日本文化教育プログラム」「雰囲気学研究所」「文化交渉学研究プロジェクト」の5共同研究組織を設置し、様々な共同教育研究プロジェクトを異なる分野の教員が協力して実施することを通して、単独の分野のみでは不可能な幅広い視野から人文学の研究を推し進めている。
3. 2003年度に設置された「地域連携センター」は、日本史学をはじめ、地域連携に関係する諸分野が協力しながら運営している。同センターの設置目的は、地域の歴史文化に関する研究成果を当該地域社会に還元し、地域の歴史的環境を生かした街づくり、里づくりを支援していくことである。
4. 「倫理創成研究プロジェクト」を設置し、現代社会で求められる新しい倫理システムの創成に関する研究

を行っている。具体的には、医療・環境・工学・情報などをめぐる現代社会の倫理諸問題を、人文学の多様な観点から分析し、さらには他の人文・社会科学、自然科学の諸分野とも学域横断的に連携しながら、高度科学技術社会として特徴づけられる現代に対応した新しい倫理システムの創成を目指している。また、2022年には東アジアの母性礼賛とミソジニーという下位プロジェクトがスタートした。

5. 「日本語日本文化教育プログラム」は、日本の言語、文化、社会に関する教育・研究を推進するとともに、国際交流を通じて深化・発展させることを目的としている。国内外の教育・研究機関と連携を取りながら、日本語・日本文化の教育・研究両面における成果の発信を目指している。
6. 新学術領域としての「雰囲気学」を創出・展開するために神戸雰囲気学研究所 (KOIAS) はインスティテュート内の研究機関として2022年に発足した。イタリア、カナダ、スロベニア、ドイツ、台湾、ブラジルと協定を締結し、複数の国際学会を開催してきた。また、島津製作所とも共同研究を始めている。
7. 「文化交渉学研究プロジェクト」は、移民問題や植民地問題など、文化接触に伴う対立や交流を主たる研究対象とする分野横断的研究領域であり、2024年度より正式に発足した。中核となる「文化交渉学ユニット」は主として社会学、文学、地理学、史学の教員が携わり、研究を推進すべく、研究会などを重ね、新雑誌『総合文化』を創刊した。東アジアを中心とする文化接触の問題を中心に扱う「海港都市研究センター」は、本プロジェクトの傘下で主に東アジアの学術研究機関と協力し、共同で研究を推進している。またヨーロッパ・スタディーズの推進および学術交流促進のために、パリ10大学との研究交流を重ねる一方、トリーア大学および国立台湾大学と国際学会 INTERFACEing を共同開催している。

Ⅲ-1-4. 研究をサポートする体制

文学部・人文学研究科は、2007年度に特別研究制度（サバティカル制度）を創設し《資料Ⅲ-2》、教育上・学内行政上、著しい貢献が認められ、当該年度に要職を免れた教員に、半年間、教育・学内行政に関する業務を免除し、研究に専念することを認めている。2020年度から2024年度までの間にこの制度を利用した教員の数は《資料Ⅲ-3》のとおりである。

《資料Ⅲ-2：「特別研究制度に関する申合せ」2007年6月13日制定》

人文学研究科に勤務する教員の資質向上と学部・大学院教育の発展を図るため、研究に専念する機会を与え、今後の教育研究活動に資する基盤を提供する。この機会を与えられた者は、授業及び教授会、各種委員会等の仕事を免除され、前期（4月～9月）もしくは後期（8月～翌1月）の半年間、国内外において研究に専念する。

<申請資格>

次の条件をすべて満たしていること。

1. 申請時において神戸大学大学院人文学研究科に3年以上在勤の者。
2. 過去5年間において、夏期休業期間（8月～9月）と土曜日・日曜日・祝日を除き同一年度で通算40日以上の海外出張、研修（ただし、集中講義は除く。）、休暇をとっていない者。ただし、病気休暇・産前休暇・産後休暇・忌引は上記の期間（40日）に含めないものとする。勤務年数が5年に満たない者は、神戸大学大学院人文学研究科着任以降の期間を対象とする。
3. 所属専修及び所属教育研究分野から教育上支障ないとの承認を受けた者。
4. 特別研究期間開始時に定年まで1年以上の在職期間を残す者。

<選考規程>

1. 年度ごとに若干名とする。
2. 教育上及び行政事務上の支障がないと認定された者に限る。
3. 選考委員会において次の条件を記載順に考慮し候補者を選定する。
 - (ア) 優れた研究計画を有する者。
 - (イ) 行政事務において貢献度の高い者。
 - (ウ) 「申請資格」2項の条件を長期間満たしている者。
4. 選考委員会は研究科長、副研究科長及び各講座から1名ずつの委員、教務委員(副)、以上9名により構成される。

5. 選考委員会は特別研究期間の前年7月31日に申し込みを締め切り、9月30日までに選考を行った後、その結果を10月1回目の教授会に諮る。

<附則>

1. 特別研究制度を利用しても、その後の授業負担は増えないものとする。
2. この制度が円滑に実施できるよう、必要に応じ、所属専修及び所属教育研究分野に対し非常勤講師枠配分等の措置を講ずるものとする。
3. 特別研究期間中の当該研究者の行政事務（委員会委員等の職務）は他の教員が代替する。
4. 特別研究期間中は国内外での非常勤講師等を禁止する。ただし、選考委員会がやむをえない事情があると認めた場合には、これを許可することがある。
5. 特別研究期間中の制度を利用した者は、研究期間終了後直ちに研究報告書を教授会へ提出する。

附 則

この申合せは、2007年6月13日から施行する。

附 則

この申合せは、2015年4月22日から施行する。

《資料Ⅲ-3：特別研究制度を利用した教員数》

2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
2	0	0	0	1

Ⅲ-2. 研究活動の状況

文学部・人文学研究科の教育研究の性格を反映して、研究活動は論文・著書の執筆および研究発表に集中している。また、研究活動にあたっては、科学研究費補助金のみならず、各種の外部資金を積極的に獲得して、研究の水準を向上させている。

Ⅲ-2-1. 研究実績の状況

本研究科の2020年度から2024年度の日本語による著書数は年間平均35.6冊、外国語による著書数は年間平均6.2冊であった。また、同期間の日本語による査読付き論文数は年間平均12.6本、外国語による査読付き論文数は年間平均18.8本である《資料Ⅲ-4》。研究業績は多言語で執筆され、これは本研究科の特色および研究目的に合致する。研究業績の学術的意義の高さを示すものとして、《資料Ⅲ-5》に2019年度以降の各種学会賞等の受賞者を挙げる。

《資料Ⅲ-4：研究活動実施状況（2020年度～2024年度）》

		2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
教員数		54	55	58	55	57
著書数	日本語	35(4)	41(8)	42(0)	33(3)	27(3)
	外国語	13(3)	9(0)	2(0)	4(0)	3(0)
招待論文数	日本語	12	18	13	16	15
	外国語	2	3	5	12	6
査読付き論文数	日本語	12	15	13	8	15
	外国語	29	16	15	21	13
その他		78	129	112	162	154

※1 「教員数」については、各年度の5月1日現在の当該学部・研究科等に所属する研究活動を行っている教員（教授、准教

- 授、講師、助教、助手（特任教員・特命教員含む）の人数。
- ※2 著書数については、内数として「単著」の数を記載している。
また、研究科内の教員による共著・分担執筆はそれぞれ1件としてカウントしている。
- ※3 学会発表や「査読付き論文」に当たらない論文などについては、「その他」としてカウントしている。

《資料Ⅲ-5：2019年度以降の受賞》

年度	受賞者	賞の名称
2019年度	奥村 弘	読売あをによし賞
	石山 裕慈	日本漢字能力検定協会 2019年度 漢検漢字文化研究奨励賞（優秀賞）
2020年度	増記 隆介	神戸大学優秀若手研究者賞
	齋藤 公太	第14回 日本思想史学会奨励賞
2022年度	柳澤 邦昭	日本心理学会 86回大会優秀発表賞
	柳澤 邦昭	神戸大学前之園記念若手優秀論文賞
	吉川 圭太	神戸大学学長表彰（サンテレビジョン震災映像公開検討チーム）
	中 真生	第44回 サントリー学芸賞〔思想・歴史部門〕
2023年度	野口 泰基	村尾育英会学術賞
	新川 拓哉	神戸大学前之園記念若手優秀論文賞
	柳澤 邦昭	神戸大学優秀若手研究者賞
	ターン有加里ジェシカ	日本グループ・ダイナミックス学会 第69回大会（ロング・スピーチ）優秀学会発表賞
	出水 清之助	江村栄一記念会 第3回江村栄一記念賞・自由民権学術奨励賞
2024年度	野口 泰基	日本心理学会第88回大会優秀発表賞
	岡野 翔太	日本華僑華人学会研究奨励賞
	Jimmy Aames	アメリカ哲学フォーラム奨励賞
	柳澤 邦昭	日本グループ・ダイナミックス学会 第70回大会優秀学会発表賞

Ⅲ-2-2. 学内共同研究組織における研究活動

○KOBELSI

2023年、「神戸大学生命・自然科学ELSI研究プロジェクト」（略称：KOBELSI）が立ち上がった。高度科学技術社会における現在および将来の様々な倫理的・法的・社会的諸問題を発見・予測し、それらの検討を行うもので、神戸大学デジタルバイオ&ライフサイエンスリサーチパーク（DBLR）」における5つの研究拠点（バイオものづくり研究拠点・先端膜工学研究拠点・医工学研究拠点・健康長寿研究拠点・社会システムイノベーション研究拠点）が展開するさまざまな先端科学技術研究である。DBLRは、未来社会に向けた新たな課題の解決に資する経済的・社会的価値を創造するために、傑出した知と有能な人材を創出するとともに、社会実装につなげる研究環境基盤を強化することを目指して開設されたもので、神戸大学生命・自然科学ELSI研究プロジェクトは、DBLRで展開される医療、生命科学、工学、保健学などそしてそれらの横断的な先端科学技術研究について、ELSI上の問題を検討し、よりよい仕方での社会への導入をめざ

すもので、人文学研究科のほか、国際文化学研究科、法学研究科、経済学研究科、経営学研究科、医学研究科、保健学研究科、人間発達環境学研究科の教員が参加しており、新しい科学技術を実際の社会に導入する際に、科学技術上の問題とは別に生じる様々な倫理的・法的・社会的問題を検討しその解決をめざす。

○人文情報の文理融合研究と地域学創出

日本社会の国際化と地域課題の深刻化に対応する人文学の全国的な知の共有のための研究とそれに基づく社会連携は、現在きわめて重要な課題となっている。「人文情報の文理融合研究と地域学創出」では、この課題を深め、新たな人文学のあり方を模索するために、阪神・淡路大震災以来、この課題に対して持続的な研究を進める人文学研究科を拠点として、大学共同利用機関法人人間文化研究機構と協力し、人文系学術情報の全国的な共有化モデル形成とそれを基礎とした地域学の創出を研究目的とする。そのため人文学研究科は、2016年度に国立歴史民俗博物館と「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」を相互に協力して推進することで合意し協定を結んだ。

上記の協定を発展させる形で、2018年1月に、神戸大学と東北大学と人間文化研究機構（基盤機関：国立歴史民俗博物館）との三者で、「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」（略称：歴史資料保全NW事業）についての連携協定が締結された。この事業は、歴史文化資料保全およびそのための全国的な相互支援体制の構築や、資料保全を担う人材の育成・教育プログラムの研究、地域の歴史文化の継承に係わる大学の機能強化を主な目的としている。拠点機関のひとつである神戸大学は人文学研究科地域連携センターが事業の基盤機関となっている。同事業は2022年度より人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクトに位置づけられ、第1期からの活動を継承・発展させ、各種事業を展開している。2024年度は下記の事業を行った。

- ①「兵庫県文化遺産防災研究会」の開催（主催）、2024年11月28日、於神戸大学文学部、参加33名
- ②「震災資料の収集・公開に係わる情報交換会」の開催（共催）、2024年12月6日、於神戸大学附属図書館社会科学系図書館、参加42名
- ③歴史文化をめぐる地域連携協議会「災害の記憶を継承する—震災資料の活用を考える—」の開催（共催）、2024年12月22日、於神戸大学瀧川記念学術交流会館、参加20機関41名
- ④歴史文化資料保全西日本大学協議会の開催（主催）、2025年1月25日、オンライン開催、参加：13名
- ⑤兵庫県立博物館主催「阪神・淡路大震災30年特別展—阪神・淡路大震災を伝える・知らせる：情報と通信の1990年代—」に協力（学生による展示制作協力）、於兵庫県立歴史博物館、会期2025年1月11日～2025年3月16日（学生による展示解説会：2月22日実施）、来場者延べ6,750名
- ⑥災害文化を担う人材育成・教育プログラムとして、上記⑤に加え、学内の授業「ひょうご神戸学」・「地域社会形成基礎論」（全学共通科目）、「地域歴史遺産保全活用研究」「地域歴史遺産活用演習」（人文学研究科共通科目）に協力
- ⑦その他、兵庫県内や愛媛県伊方町での史料調査・報告会・展示など地域史料の調査研究活動多数

Ⅲ-3. 競争的外部資金の獲得状況

競争的外部資金の獲得状況を《資料Ⅲ-6》に示す。2024年度には219,908千円を獲得している。2019年に大型研究種目（奥村弘教授を研究代表者とする特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」）が採択されて以降の合計額は、200,000千円前後で推移している。受託研究費が近年増加傾向なのは、JSTやAMED等の大型研究の採択が主要因である。

《資料Ⅲ-6：競争的外部資金の獲得状況(2020年度～2024年度)》

年 度	科研費	共同研究	受託研究	その他 競争的資金	寄附金 助成金	合計
2020年度	146,783	12,041	7,933	25,042	2,500	194,299
2021年度	151,627	13,304	12,644	25,151	2,216	204,942
2022年度	160,229	13,752	15,730	20,700	0	210,411
2023年度	173,095	9,427	25,294	27,945	4,650	240,411
2024年度	144,651	14,686	27,311	31,260	2,000	219,908

金額(千円)

Ⅲ-3-1. 科学研究費助成事業

科学研究費助成事業の申請件数が年間平均39件である。2020年度から2024年度までの獲得件数は平均61件(新規19件)で獲得額は平均155,277千円である。申請件数は2012年度が34件とやや少なかったが、2013年度以降40～50件近くを維持しており(2020年度と3年度は新型コロナウイルス感染症の影響があり減)、科研費獲得に積極的となり、その状態が維持されている《資料Ⅲ-7》。また上記のとおり、2019年度には特別推進研究が1件新規採択された。

《資料Ⅲ-7：科学研究費助成事業への申請・獲得件数、獲得額に関するデータ》

年 度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	平均
申請件数	30	37	44	47	37	39
獲得件数 (新規)	49 (8)	55 (14)	53 (16)	73 (32)	75 (26)	61 (19)
金額 (千円)	146,783	151,627	160,229	173,095	144,651	155,277

Ⅲ-3-2. 共同研究、受託研究費等の状況

2020年度から2024年度の共同研究・受託研究・その他競争的資金の推移を《資料Ⅲ-8》に示す。

《資料Ⅲ-8：共同研究・受託研究・その他競争的資金の実施件数および金額》

年 度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
共同研究 件数	8	9	8	6	8
金額 (千円)	12,041	13,304	13,752	9,427	14,686
受託研究 件数	7	8	7	8	8

金額 (千円)	7,933	12,644	15,730	25,294	27,311
その他競争的資金 件数	5	6	2	5	5
金額 (千円)	25,042	25,151	20,700	27,945	31,260

省庁・日本学術振興会・学術機関等からの受入実績を《資料Ⅲ-9》に、自治体からの受入実績を《資料Ⅲ-10》にそれぞれ示す。特に日本史学教育研究分野で自治体からの研究費等の受入れが顕著である。

《資料Ⅲ-9：省庁・日本学術振興会・学術機関等からの受入実績》

年度	相手方	題目	金額(千円) 上段直接経費 下段間接経費
2020 年度	日本学術振興会	社会心理学・神経科学・内分泌学の連携による文化差の遺伝的基盤の解明	600 0
		生命・環境技術の社会実装に関する先端融合研究 — 21世紀型参加のビジョンと試行 —	185 11
		2次叙述に関する文法制限の研究	2,375 0
		学術研究動向調査研究	1,200 360
	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構	歴史文化資料保全の大学・共同利用期間ネットワーク事業	12,000 0
	国立国語研究所	統辞・意味解析情報の付与	200 20
	International Visegrad Fund	Visegrad Grant	407 0
			直接経費合計 間接経費合計
2021 年度	日本学術振興会	2次叙述に関する文法制限の研究	2,375 0
		学術研究動向調査研究	1,200 360
	科学技術振興機構	孤独リスクモデルの個人・状況要因の心理学的検討	2,000 600
	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構	歴史文化資料保全の大学・共同利用期間ネットワーク事業	12,000 0
	国立国語研究所	統辞・意味解析情報の付与	300 30
	甲南大学	研修員受入	234 0
	京都大学	ヒト脳オルガノイドの意識をめぐる哲学的・倫理学的研究	1,020 306

	International Visegrad Fund	Visegrad Grant	282 0
			直接経費合計 19,411 間接経費合計 990
2022 年度	科学技術振興機構	孤独リスクモデルの個人・状況要因の心理学的検討	5,000 1,500
		新生児の匂いと羊水の匂いの安全・安心利用：心理的効果の探索	200 60
	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構	歴史文化資料保全の大学・共同利用期間ネットワーク事業	12,000 0
	広島大学	ヒト脳オルガノイドの意識をめぐる哲学的・倫理学的研究	1,900 570
			直接経費合計 19,100 間接経費合計 2,130
2023 年度	日本学術振興会	学術研究動向調査研究	1,200 360
	科学技術振興機構	孤独リスクモデルの個人・状況要因の心理学的検討	12,000 3,600
		ヒト脳培養の ELSI に関する研究、および量的調査	400 120
	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構	歴史文化資料保全の大学・共同利用期間ネットワーク事業	11,500 0
	国立国語研究所	「てにをは」バンク構築のための基盤研究	1,000 100
	国際交流基金	海外日本語教育インターン（大学連携日本語パートナーズ）派遣プログラム	185 0
	広島大学	ヒト脳オルガノイドの意識をめぐる哲学的・倫理学的研究	1,200 360
		直接経費合計 27,485 間接経費合計 4,540	
2024 年度	日本学術振興会	学術研究動向調査研究	1,200 360
		二国間交流事業共同研究	2,500 0
	科学技術振興機構	孤独リスクモデルの個人・状況要因の心理学的検討	13,990 4,197
		ヒト脳培養の ELSI に関する研究、および量的調査	380 114
	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構	歴史文化資料保全の大学・共同利用期間ネットワーク事業	11,500 0
国立国語研究所	「てにをは」バンク構築のための基盤研究	1,000 100	

	広島大学	ヒト脳オルガノイドの意識をめぐる哲学的・倫理学的研究	600 180
			直接経費合計 31,170
			間接経費合計 4,951

《資料Ⅲ-10：自治体からの受入実績》

年度	相手方	題 目	金額（千円）
			上段直接経費 下段間接経費
2020 年度	明石市	明石市における地域史料の調査研究業務委託	4,100 0
	朝来市	朝来市石川家文書の史料調査研究並びに山田家文書調査に係る指導助言	500 0
	小野市	小野市小野藩家老家伊藤家文書を用いた明治初期小野市域地租改正実施過程の歴史研究	200 0
	加西市	鶴野飛行場跡滑走路調査委託	517 0
		加西市戦争遺跡総合調査委託	1,950 0
	神戸市	歴史資料の公開に関する研究	1,494 149
	丹波市	丹波市内古文書等歴史資料調査業務	1,870 0
	丹波篠山市	兵庫県丹波篠山市における市史編さんのための研究と検討	3,830 0
	豊岡市	兵庫県豊岡市の外国人住民に関する調査研究	1,826 274
	福崎町	福崎町の地域歴史遺産掘り起こし	1,200 0
		三木家住宅資料調査	1,000 0
	三木市	三木市史編さん事業	8,700 0
	三田市	旧三田藩主九鬼家資料の総合調査	180 18
			直接経費合計 間接経費合計
2021 年度	明石市	明石市における地域史料の調査研究業務委託	4,100 0
	朝来市	朝来市石川家文書の史料調査研究並びに山田家文書調査に係る指導助言	500 0
	小野市	小野市小野藩家老家伊藤家文書を用いた明治初期小野市域地租改正実施過程の歴史研究	200 0
		小野市域の村堂調査にかかるデータの整理と分析	423 0

	加西市	加西市戦争遺跡調査委託	1,674 0
		加西市戦争遺産資料拡充調査委託	1,997 0
	神戸市	神戸村文書の解読（翻刻）に関する研究	250 25
		歴史資料の公開に関する研究	1,494 149
	丹波市	兵庫県丹波市を中心とした地域歴史遺産（古文書等）の調査	1,870 0
	丹波篠山市	兵庫県丹波篠山市における市史編さんのための研究と検討	6,818 0
	豊岡市	兵庫県豊岡市の外国人住民に関する調査研究	522 78
	福崎町	福崎町の地域歴史遺産掘り起こし	1,200 0
		三木家住宅資料調査	500 0
	三木市	三木市史編さん事業	8,700 0
	三田市	旧三田藩主九鬼家資料の総合調査	180 18
			直接経費合計
		間接経費合計	270
2022年度	明石市	明石市における地域史料の調査研究業務委託	4,100 0
	朝来市	朝来市石川家文書の史料調査研究並びに山田家文書調査に係る指導助言	500 0
	小野市	小野市小野藩家老家伊藤家文書を用いた明治初期小野市域地租改正実施過程の歴史研究	300 0
	加西市	加西市戦争遺跡調査委託	1,000 0
		加西市戦争遺産資料拡充調査委託	692 208
	神戸市	神戸村文書の解読（翻刻）に関する研究	600 60
		歴史資料の公開に関する研究	1,494 149
	丹波市	兵庫県丹波市を中心とした地域歴史遺産（古文書等）の調査	1,870 0
	丹波篠山市	兵庫県丹波篠山市における市史編さんのための研究と検討	7,081 0
	福崎町	福崎町の地域歴史遺産掘り起こし	1,200 0
		三木家住宅資料調査	800 0

	三木市	三木市史編さん事業	8,700 0
	三田市	旧三田藩主九鬼家資料の総合調査	180 18
		直接経費合計 間接経費合計	28,517 435
2023 年度	明石市	明石市における地域史料の調査研究業務委託	4,100 0
	朝来市	朝来市関連の古文書及び歴史調査に係る指導助言	500 0
	小野市	小野市小野地区歴史調査及び近藤廣家文書目録作成	300 0
	加西市	加西市戦争遺跡調査委託	550 165
		加西市戦争遺産資料拡充調査委託	922 277
	神戸市	歴史資料の公開に関する研究	1,494 149
	丹波市	兵庫県丹波市を中心とした地域歴史遺産（古文書等）の調査	1,870 0
	丹波篠山市	兵庫県丹波篠山市における市史編さんのための研究と検討	3,614 0
	福崎町	福崎町の地域歴史遺産掘り起こし	1,200 0
		三木家住宅資料調査	800 0
	三木市	三木市史編さん事業	8,700 0
		直接経費合計 間接経費合計	24,050 591
2024 年度	明石市	明石市における地域史料の調査研究業務委託	4,100 0
	朝来市	朝来市関連の古文書及び歴史調査に係る指導助言	500 0
	小野市	小野市大部地区歴史調査及び小野市市場町近藤廣家文書目録作成	300 0
	加西市	加西市戦争遺産資料拡充調査委託	1,200 0
	神戸市	多文化の背景を持つ子供・若者の育ち・学び・未来に関する実証研究	950 0
		歴史資料の公開に関する研究	1,494 149
	丹波市	兵庫県丹波市を中心とした地域歴史遺産（古文書等）の調査	1,870 0
丹波篠山市	兵庫県丹波篠山市における市史編さんのための研究と検討	7,400 0	

	豊岡市	兵庫県豊岡市多文化共生推進に関する共同研究	446 67
	福崎町	福崎町の地域歴史遺産掘り起こし	1,200 0
		三木家住宅資料調査	800 0
	三木市	三木市史編さん事業	8,700 0
			直接経費合計 間接経費合計

民間企業からの受入実績は《資料Ⅲ-11》のとおりである。

《資料Ⅲ-11：民間からの受入実績》

年度	相手方	題 目	金額（千円）	
			上段直接経費	下段間接経費
2020 年度	無	無	0 0	
			直接経費合計 間接経費合計	0 0
2021 年度	無	無	0 0	
			直接経費合計 間接経費合計	0 0
2022 年度	無	無	0 0	
			直接経費合計 間接経費合計	0 0
2023 年度	株島津製作所	KOIAS 及び KOJSP に関する共同事業	4,615 1,385	
			直接経費合計 間接経費合計	4,615 1,385
2024 年度	株島津製作所	KOIAS 及び KOJSP に関する共同事業	5,385 1,615	
	ダイキン工業(株)	新しい研究を創出する取組	836 124	
			直接経費合計 間接経費合計	6,221 1,739

Ⅲ-3-3. 奨学寄附金の受け入れ

人文学研究科・文学部が財団・団体から受け入れた奨学寄附金・助成金の推移を《資料Ⅲ-12》に、その詳細を《資料Ⅲ-13》にそれぞれ示す。

《資料Ⅲ-12：奨学寄附金・助成金の推移》

年 度	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度
件数	2	3	0	4	3
金額 (千円)	2,500	2,216	0	4,650	2,000

《資料Ⅲ-13：財団・団体からの奨学寄附金・助成金の受入件数と金額》

年度	助成団体名等	寄付金名称	寄附目的	寄附金額 (千円)
2020 年度	公益財団法人木下記念事業団	公益財団法人木下記念事業団研究助成金	中世以降における「日常使用」漢字音の実態研究	1,000
	公益財団法人 JFE21 世紀財団	2020 年度 JFE21 世紀財団アジア歴史研究助成金	地籍図と GIS を活用した台湾の災害復興支援プロジェクトの試み	1,500
2021 年度	公益財団法人村田学術振興財団	公益財団法人村田学術振興財団研究助成金	芸術文化関係職員等の労働環境とコロナ禍での変容に関する国際比較	700
	公益財団法人サントリー文化財団	公益財団法人サントリー文化財団助成金	学術研究に対する研究助成	1,100
	公益財団法人高梨学術奨励基金	公益財団法人高梨学術奨励基金	自由民権期における政党連帯運動の研究 — 無形の「広域地方結合論を中心に —」に対する研究助成	416
2022 年度	無	無	無	0
2023 年度	一般財団法人ノーリツぬくもり財団	2023 年度ノーリツぬくもり財団助成金	マルチレベルベクトル自己回帰モデルによる入浴の心理的効果の検証	1,200
	公益信託福原心理教育研究振興基金	2023 年度福原心理教育研究振興基金助成金	「記憶や感情の「不安定さ」の神経基盤：メンタルヘルスへの応用」に対する研究助成	1,000
	公益財団法人 JFE21 世紀財団	2023 年度 JFE21 世紀財団アジア歴史研究助成	地図・地誌類に基づく日本における東アジアの地理的認識および交渉の発達に関する研究	1,500
	公益財団法人科学技術融合振興財団	2023 年度科学技術融合振興財団調査研究助成	「分業型公共財ゲーム」において効率かつ公平とされる分担方法から乖離する条件の検討	950
2024 年度	公益財団法人野村財団	公益財団法人野村財団 2024 年度社会科学助成	効率かつ公平な分業から乖離する条件の検討	700
	公益財団法人カシオ科学振興財団	第 42 回 (2024 年度) 公益財団法人カシオ科学振興財団研究助成金	地方部の基盤産業における「外国人材」の受入とその持続可能性に関する調査研究	500
	公益財団法人日立財団	2024 年度 (第 56 回) 倉田奨励金	パーソナルデータの収集・利用における適切なインフォームド・コンセントに関する研究	800

第2部

I. 外部資金による教育研究プログラム等の活動

I-1. 戦略的事業経費（ミッション実現戦略分）

「人文学推進インスティテュートに係る戦略的事業経費」

[1] 本事業について

2023年度に引き続き、「人文学推進インスティテュートに係る戦略的事業経費（ミッション実現戦略分）」を獲得した。人文学推進インスティテュートは「神戸オックスフォード日本学プログラム（KOJSP）」（オックスフォード大学アジア・中東学部日本語専攻の2年生全員が文学部で1年間学ぶ、ユニット受入れ型のプログラム）のほかに5共同組織である地域連携センター・文化交渉学研究プロジェクト・神戸雰囲気学研究所（KOIAS）・倫理創成プロジェクト・日本語日本文化教育プログラムの支援と事業間の調整及び評価を行うものである。各共同組織がその内部で新規のプロジェクトを興すことも支援しており、さらに工学部との文理融合型教育プログラムも実施された。

[2] 2024年度の取組み

① 「神戸オックスフォード日本学プログラム（KOJSP）」の充実

- ・【教育】 KOJSP では、例年どおり、受講生に対して日本語演習（月～金、毎日2コマ）と文学部の専門の授業（週2コマ）を1年間、KOJSP 演習（週1コマ）を半年間実施した。また広島でのアクティブラーニングなどを提供した他、インターナショナルアワーなどの交流の機会を定期的に設けることで、プログラムの充実を図った。2023年10月にプログラムを開始していた第12期生は2024年8月に8名が修了した。2024年10月からは第13期生のプログラムを開始した。
- ・【教育支援】 KOJSP アドバイザリーボード委員の教員がオックスフォード大学アジア・中東学部を訪問し、教育内容について意見交換を行い、さらに第13期受入予定の学生について情報を得た。
- ・【教育支援体制充実】 KOJSP 生に対してきめ細かいケアを行うため、グローバル教育センター主配置の助教を1名雇用した。
- ・【インターンシップ】 インターンシップを開始し、島津製作所をはじめ2機関に2名を派遣した。
- ・【共同事業】 島津製作所と共同事業を開始し、島津製作所本社でワークショップなどを開催した。
- ・【国際的学术交流】 オックスフォード大学の研究者による研究会を2回開催した（6月19日、11月20日）。

② 地域連携センター

- ・【大学・共同利用機関ネットワーク事業】 大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・ネットワーク型基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」の拠点校として、西日本各地の大学や資料ネットと連携し、地域における歴史文化をとりまく諸課題に対応している。
- ・【自治体との連携事業】 兵庫県内を中心とする自治体、および地元企業との連携も継続して行った。2024年度は23の事業を展開した。主なものとして、明石市・丹波篠山市・三木市における自治体史編纂事業への協力、国際文化学研究所と連携した神戸ユニオン協会資料の調査研究、附属図書館震災文庫と連携したサンテレビとの阪神・淡路大震災関連映像の保存活用事業などがある。

- ・【震災関連事業】阪神・淡路大震災発生 30 年を控え、震災資料の保全・活用・継承に関わる事業を多数展開し、兵庫県立博物館で開催された特別展（1 月 11 日～3 月 16 日）に協力した。
- ・【地域連携協議会】兵庫県下を中心とした自治体職員、地域住民団体、コンサルタント業者、歴史およびアーカイブ研究者による地域連携協議会を開催した。
- ・【教育活動】地域の歴史遺産の保全活用を多角的に学ぶ講義、実習、地域歴史遺産活用企画演習を実施した。
- ・【社会還元】「神戸大学文学部公開講座まちづくり地域歴史遺産活用講座 2024」（11 月）を開催した。

③ 倫理創成プロジェクト

- ・【アスベスト問題】公開講座「震災の経験を記録する：阪神・淡路大震災とアスベスト被害を聞き取り、語り継ぐために」（「災害とアスベスト：阪神淡路 30 年プロジェクト」実行委員会／神戸大学文学部地理学教室主催、5 月 26 日、6 月 23 日）を共催した。
- ・【国際シンポジウム】香港嶺南大学と HKCRC-Mimir-P.I.E. Workshop on Ethics, Technology, and the Future を開催した（7 月 14 日～15 日）。
- ・【ワークショップ、セミナーなど】KOBELSI（神戸大学生命・自然科学 ELSI プロジェクト）との共催で、ELSI ワークショップ（5 月 13 日、2 月 10 日）を実施し、また KOBELSI セミナー（12 月 8 日）を主催した。この他、公開セミナーKobe Philosophy Seminar Series を計 7 回開催し、この際、スペイン、イギリス、アメリカ、フランス、イタリアなど国内外の研究機関から研究者を招聘した。
- ・サブプロジェクト「東アジアの母性礼賛とミソジニー」による国内研究会を 3 回にわたって実施した。

④ 日本語日本文化教育プログラム

- ・【国際シンポジウム】日本言語学会と共催で「日本言語学会夏期講座 2024」（8 月 26 日～31 日）、国立国語研究所と共催で国際シンポジウム「第 3 回 Evidencial-Based Linguistics (EBL)」(9 月 21 日)、日本音声学会と共催で「第 34 回音声学セミナー」（11 月 16 日）、関西音韻論研究会・東京音韻論研究会との共催で「第 20 回音韻論フェスタ」（3 月 4 日～5 日）を開催した。
- ・【研究者招聘】荻原俊幸教授（ワシントン大学）を 7 月（言語コロキウム）に、L. ラブリュヌ教授（ボルドー・モンテーニュ大学）を 3 月（音韻フェスタ）に招聘した。
- ・【古典籍 DB】サブプロジェクトとして古典籍 DB プロジェクト推進のため国内研究会を 1 回開催した。
- ・【教育】日本語論文・レポート作成を行える留学生と、チュートリアル形式で日本語論文・レポート作成の支援が行えるような日本人学生を養成するための授業を 2024 年度も開講した。また海外の教育機関等で日本語日本文化教育を担う人材を養成するための教育プログラムの充実を図った。
- ・【海外インターンシップ派遣】日本語日本文化教育に関する海外インターンシップを実施した。2024 年度は、日本語日本文化海外インターンシップ制度により、北京外国語大学に博士課程前期課程 1 名、ハンブルク大学に博士課程前期課程 1 名、オックスフォード大学に博士課程前期課程 1 名、計 3 名を派遣した。

⑤ KOIAS (神戸雰囲気学研究所)

- ・【国際的学术交流】世界雰囲気学会設立準備大会(8月6日、ローマ第2大学)、国際シンポジウム(9月29日～10月1日、台湾中央研究院)を開催した。またブラジル雰囲気学コロキウム発足記念大会(3月24日～25日、ニテロイ・フルミネンセ連邦大学)にも参加した。さらに定例研究会を開催し、フランス、中国、ドイツ、アメリカ、イギリスなどからを神戸大学に招聘した。
- ・【若手研究者支援】上述の国際シンポジウム等を通じて若手研究者の育成にも取り組み、若手研究者を国際公募により特命助教として採用した。
- ・【学術成果】研究成果はそれぞれ学術論文などで発表した。なかでも国際学術誌『Poligrafi』『Contemporary Aesthetics』『The Philosophical Quarterly』などにメンバーの雰囲気学関連論文が掲載された。
- ・【外部資金】JSPS 研究拠点形成事業にも採択された(2025年度より開始予定)。
- ・【企業などとの共同事業】島津製作所との共同事業も継続して実施し、出張講義などを開催した。また六本木AXIS Galleryの特別企画(島津製作所との共同企画10月、11月)に合わせてトークイベントを実施した。郡山市立美術館の特別展「続・雰囲気を展示する」(1月25日～4月20日)にも企画協力し、特別ギャラリートークを2025年2月24日に実施した。

⑥ 文化交渉学研究プロジェクト

- ・【研究者招聘】国際的研究ネットワークの構築に努め、6月にパリ・ナンテール大学から2名、1月に国立台湾大学から1名の研究者を招聘し、講演会および国際研究会を開催した。
- ・【国際会議開催】国立台湾大学、トリーア大学と共催のINTERFACEing(8月28日～30日、於国立台湾大学)、北京外国語大学との共同シンポジウム(10月26日～27日)、北京大学、復旦大学との三大学人文フォーラム(11月16日～17日)、パリ・ナンテール大学での学生シンポジウム(3月12日)を開催した。
- ・【若手研究者育成】上述の国際会議に多くの大学院生およびPDを派遣して報告の機会を提供した。また国内でもワークショップ(9月20日～24日)を実施した。
- ・【学術誌】新ジャーナル『総合文化』を創刊した。
- ・【自治体との連携事業】神戸市、豊岡市と連携し、多様な背景を持つ子どもたちが抱える問題を解決するための実証研究を行い、10月14日には豊岡市で映画・フォーラム「どうなっとるん？但馬の外国につながる子どもたちの進学」を開催。神戸市とは公開ワークショップ「外国ルーツの子どもに関する調査報告会」(10月20日)、「神戸市外国ルーツの子ども調査最終報告会」(3月20日)を開催した。

⑦ 工学研究科との共同講義

- ・工学研究科、阪神高速道路株式会社と共催した連続講座「神戸港にかかる海上長大橋」の社会的意味を考える」には学部生4名、博士課程前期課程学生1名が参加した。

I-2. 科学研究費補助金「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（研究代表者：奥村弘、課題番号：19H05457）

本研究は、地域歴史資料学の成果を踏まえ、社会構造の大変動による人口減少や大規模災害等により危機に瀕している日本の地域存続の基盤となる、新たな地域歴史文化創成のための実践的研究領域を確立することを目的としている。

具体的には、①地域住民を軸とする地域歴史資料と地域歴史文化の未来への継承方法の確立（「地域歴史資料継承領域」）、②地域歴史文化創成に資するデータの国際標準構築と全国的データインフラストラクチャー構築（「地域歴史資料インフラ構築領域」）、③大災害が連続する日本列島において、地域歴史文化は災害の記憶を蓄積する文化を内包させてきたことを踏まえ、地域歴史文化創成の基礎となる新たな地域社会形成史の通史的提示を行う（「地域社会形成史研究領域」）。

またその中で、災害事象等についての歴史的データの発見、確度の向上をはかり、減災研究にも寄与すること、さらに地域社会において同様な課題を持つ世界各地の研究者間の課題共有をはかり、国際的な学術研究プラットフォーム形成を進めることを目指している。

本学人文学研究科地域連携センターは、本研究の実践・研究のための拠点施設に位置付けられている。

2024年度はかかる目的のために以下の研究活動を展開した。

第一に、「地域社会形成史研究領域」に関わって、前年度から引き続き「災害文化と地域社会形成史」研究会を開催した。第24回研究会（2024年7月20日、オンライン開催）では、「科研関連成果本の書評会」と題して、前年度に本研究の成果として出版した松下正和・天野真志編『地域歴史文化のまもりかた―災害時の救済方法とその考え方』に関する書評報告を三村昌司氏（早稲田大学）、古畑侑亮氏（獨協大学）が行った。執筆者である天野真志（国立歴史民俗博物館）・松下正和（神戸大学）のリプライも含めて、この間「地域歴史資料継承領域」で展開してきた地域歴史文化の継承に関わる研究成果が共有されるとともに、今後の課題について議論がなされた。また、第25回研究会（2024年11月17日、オンライン開催）では、「災害文化と地域社会史研究の成果と課題」と題して、前年度に「地域社会形成史研究領域」の成果として出版された『文明動態学』Vol.3「特集 災害・文明と地域社会」所収論文の検証を行った。近世・近代の地域社会史研究を牽引する東野将伸氏（岡山大学）、久野洋氏（ノートルダム清心女子大学）がそれぞれ書評報告を行い、本研究で展開した災害を内包した地域社会像の提示について、その成果と課題を共有し、今後の展望について議論が蓄積された。

第二に、本研究の関連行事について共催・協力等を実施した。具体的には、以下の三つの研究会・シンポジウム等に共催・協力した。

- ① 第6回歴史文化資料保全西日本大学協議会に協力した（2025年1月25日、オンライン開催、主催：人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」、神戸大学大学院人文学研究科）。
- ② 第23回歴史文化をめぐる地域連携協議会「災害の記憶を継承する―震災資料をどう活用していくか―」を共催した（2024年12月22日、於神戸大学瀧川記念学術交流会館、主催：神戸大学大学院人文学研究科、同地域連携センター）。
- ③ 第11回全国史料ネット研究交流集会を共催した（2025年1月12日・13日、於神戸大学統合研究拠点）。

コンベンションホール、主催：第11回全国史料ネット研究交流集会実行委員会、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」)

第三に、能登半島地震に際して発生した被災歴史資料の保全に対応にした。2024年1月の能登半島地震では、被災歴史資料保全が大きな課題となった。被災地との情報交換、被災歴史資料の文化財保存科学の研究成果を応用した対処方法に関する情報提供など、本研究の代表者及び分担者が、災害対応において重要な役割を果たした。

科研を1年間繰り越すことで、災害対応において重要な時期に、本科研の研究者ネットワークが、情報交換の場として有効に機能できた。その成果は、2025年5月歴史学研究会大会特設部会で報告された。

以上の活動を踏まえて、2025年3月29日には最終の総括研究会を開催（オンライン）し、2024年度の研究成果を共有するとともに、繰越年度も含めて6年間にわたった本研究全体の成果・課題および今後の展望等について総合的な討論を実施した。

II. 部局内センター等の活動

* センターの改編に伴い、今回の年次報告書より各センターの記述順を変更する。

人文学推進インスティテュート

[1] 目的

人文学推進インスティテュートは、2014年4月に発足した日本文化社会インスティテュートを前身とする。元来、日本語日本文化教育プログラム、KOJSP、グローバル人材育成などの関連事業を統括して日本文化、社会に関する教育・研究および日本における人文学の教育・方法を深化・発展させるべく活動していた。2022年4月、「人文学推進インスティテュート」に改称、活動範囲を拡大し、地域連携センター、海港都市研究センター、倫理創成プロジェクト、日本語日本文化教育プログラムという人文学研究科内の4共同研究組織を支援し、事業間の調整をするようになった。2023年に神戸雰囲気学研究所(KOIAS)を追加、さらに2024年に文化交渉学研究プロジェクトを追加して、海港都市研究センターを後者の傘下に加えることで、現在は5共同研究組織の支援を行っている。

[2] 活動内容

活動内容については、第2部I-1 運営費交付金機能強化経費：実践型グローバル人材育成事業「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」、第1部I-1-3. 教育上の特徴3のKOJSPに関する項目、等を参照のこと。

[3] 今後の活動

外部資金として戦略的事業経費を獲得済みである。それぞれのプロジェクトでも外部資金を獲得しており、とくに地域連携センター、文化交渉学研究プロジェクトが自治体との共同事業を複数実施している他、KOJSPおよびKOIASは島津製作所との共同研究を行って、外部資金を獲得している。さらにKOIASはJSPS「2025年度研究拠点形成事業」に採択された。研究および学術交流は旧来通り、各プロジェクトが中心となって推進する。KOJSPはオックスフォード大学との協力関係を維持・強化し、文化交渉学研究プロジェクトは、パリ第10大学との交流プログラム、国立台湾大学、トリーア大学と共に開催する国際会議INTERFACEing、北京大学、復旦大学と共同開催する三大学人文学フォーラム、北京外国語大学との共同シンポジウムを中心に国際的な学術交流を推進する。KOIASは、すでにヨーロッパ、アジア、南北アメリカなど世界各地との協力関係を構築しており、新たな国際学会の創設準備を進めて、分野横断的研究の推進を図る。倫理創成プロジェクトも旧来の国際ネットワークに加え、新たにジェノヴァ大学DAFISTとも協定を締結して、緊密な国際連携の下に、神戸大学生命・自然科学ELSI研究プロジェクト(KOBELSI)とも連動して、研究を進展させる。日本語日本文化教育プログラムも、国内外の言語学関連の学会と連携し、国際的な学術交流を継続するとともに、大学院生のインターン派遣事業を継続する。さらに地域連携センターおよび文化交渉学研究プロジェクトを中心に、これまで同様、自治体との共同事業、共同研究も推進する。また、2023年3月に『人文学を解き放つ』を刊行したように、学術上の成果を社会に積極的に還元する。

II-1. 地域連携センター

人文学研究科地域連携センター活動報告

大学院人文学研究科（文学部）では、2002年より「歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業」を開始した。同年11月に地域連携研究員制度を創設、翌年1月に神戸大学文学部地域連携センターが設置された。2007年の改組にもとづき、現在は人文学研究科地域連携センターとなっている。

本事業は、阪神・淡路大震災以来の地域貢献活動を踏まえ、大学が自治体や地域住民と連携し、県内各地の歴史資料の保全・活用や歴史遺産を活かしたまちづくり等に取り組んでいくことを目的としている。現在、連携事業は多岐にわたっているが、おおむね次の4つを軸として展開している。

1. 歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力
2. 歴史資料・災害資料の保全・活用
3. 地域歴史遺産を活用できる人材の育成
4. 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

また、当センターを拠点とする事業として、2019年度に採択された科学研究費補助金特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（研究代表者・奥村弘）が展開中である。また、2018年1月に神戸大学・東北大学・人間文化研究機構（基盤機関：国立歴史民俗博物館）の三者で「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」に関する連携協定が締結された。同事業は2022年度より人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクトと位置づけられ、当センターは拠点校である神戸大学の基盤機関として、第1期からの活動を継承・発展させる形で各種事業を展開している。

このほか年報『LINK【地域・大学・文化】』を刊行するなど、研究および研究成果の公表も行っている。

以下、個別事業ごとに今年度の活動の概要を報告する。

(1) 歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力

①兵庫県との連携事業

- * 兵庫県地域創成局地域遺産課との連携
- * 兵庫県教育委員会文化財課との連携
 - ・ 兵庫県文化遺産防災研修会の開催（11/28、於神戸大学大学院人文学研究科）

②神戸市との連携事業

- * 神戸市文書館との連携
- * 神戸市文化スポーツ局文化財課との連携
- * 大学発アーバンイノベーション神戸事業
 - ・ 「北区を中心とした神戸市域における地域所在資料の保全と活用」が採択

③包括協定にもとづく灘区との連携事業

- * 『篠原の昔と今』『水道筋周辺地域のむかし』の送付依頼に対応

④神戸市を中心とする文献資料所在確認調査

- * 神戸を中心とする文献史料所在確認調査

⑤住吉歴史資料調査会との連携事業

- * 史料調査
 - ・ 下田清五郎氏文書の翻刻
- * 古文書勉強会の開催
- * 『阪神・淡路大震災資料集Ⅳ』の製作
- ⑥大学協定に基づく小野市との連携事業
 - * 共同研究「小野市小野地区歴史調査及び小野市市場町近藤廣家文書目録作成」
 - ・ 小野市立好古館での資料調査および史料撮影、目録作成
- ⑦大学協定に基づく朝来市との連携事業
 - * 委託研究「朝来市関連の古文書及び歴史調査に係る指導助言」
 - ・ 石川家文書整理会の開催（毎月第2・第4火曜日）
 - ・ 多々良木歴史研究会への協力
 - ・ あさご古文書整齐会への協力（毎月第2水曜日）
 - ・ 竹田区有文書整理への協力（毎月第2水曜日）
 - ・ 山田家文書の調査・整理
- ⑧部局協定にもとづく丹波市との連携事業
 - * 共同研究「丹波市内古文書等歴史資料調査業務」
 - ・ 2024年度連続講座「見る・知る・学ぶ 丹波の歴史」（7/28・8/24・9/14・10/26・12/7・2/1、全6回）、第3回（9/14）は「丹波の歴史を災害から守る」と題したWSを開催
 - ・ 古文書調査（山南町高座神社文書、細見綾子生家所蔵資料、池田草庵と佐治中島氏の往復書簡貼付屏風、自治会所蔵文書、柏原藩土松原氏所蔵資料、堂本家文書、等）
 - ・ 〈たんば地域史料叢書2〉『丹波の高札—2020年～2022年度調査資料』の刊行
 - ・ 丹波古文書倶楽部への協力（毎月第2土曜日、8月休会、講師：木村修二）
 - ・ 丹波市文化財保護審議会・丹波市歴史民俗資料館運営委員会委員（井上舞）
- ⑨大学協定にもとづく加西市との連携事業
 - * 加西市戦争遺産資料拡充調査
 - ・ 『鷓野飛行場跡Ⅱ—2021年度～6年度戦争遺跡総合調査』の発行
 - ・ 戦争遺跡、関連施設における展示調査
 - * 加西市文化財審議委員・加西市文化財保存活用地域計画委員（井上舞）
- ⑩尼崎市との連携事業
 - * 尼崎市立歴史博物館文書館部門専門委員（市沢哲）
- ⑪三木市との連携事業
 - * 「三木市と国立大学法人神戸大学との連携に関する協定書」（2013年6月締結）に基づく、新三木市史編さん支援事業
 - ・ 通史編部会（古代史部会、中世史部会、近世史部会、近代史部会、現代史部会、自然環境部会、文化遺産部会、考古部会）への助言・調査協力
 - ・ 地域編部会（三木南部会・細川部会・別所部会）活動の助言指導

- ・ 三木市立みき歴史資料館企画展「地域の歴史を次世代へ—どこにでもあるけど、そこにしかないもの—」(会期：10/19～12/22)
- ・ 企画展関連シンポジウム「地域の歴史を次世代へ」(11/10、於三木市中央公民館)
- ・ 『市史研究みき』第9号、『市史編さんだより』第16号、第17号の発行
- * 商工観光課との連携事業
 - ・ 市民グループ「旧玉置家住宅文書保存会」への活動支援
- * 「みき歴史資料館協議会」委員(会長)(木村修二)

⑫三田市との連携事業

- * 三田市と神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターとの地域文化遺産の保全・活用推進にかかる連携協力に関する覚書の取り交わし
- * 旧三田藩主九鬼家資料の総合調査

⑬丹波篠山市との連携事業

- * 丹波篠山市史編さん資料調査等業務共同研究
 - ・ 専門部会(考古編・古代編・中世編・近世編・近現代編・自然環境編・文化財編)の開催
 - ・ 第5回市史編さん新発見・新収蔵資料展「命が生まれるところ—産婆さんを知っていますか?—」、6/12～6/30
 - ・ 丹波篠山市史編さん便り第3号の発行
 - ・ 2024年度近世編専門部会調査報告会「藩政日記は語る～若者から見た篠山藩青山家文書の世界～」3/9
- * 市立中央図書館「地域資料整理サポーター」活動への協力
- * 市立中央公民館主催「古文書講座(中級編)への出講
- * 部落史研究委員会へのアドバイザー協力
- * NPO法人SHUKUBA主催「古文書講座」への協力

⑭明石市との連携事業

- * 明石藩関連資料調査・公開業務
 - ・ 明石市立文化博物館特別企画展「明石藩の世界XII 藩主忠国が創った『源氏物語』遺跡と俳諧文学」(9/14～10/14、於明石市立文化博物館、同館・センター主催事業)
 - ・ 関連講座「はじめての古文書講座」(10/5、講師：石橋知之)
- * 横河家文書調査・公開業務
 - ・ 企画展「東二見横河家の功績—大坂の陣から近代建築まで—」(6/1～6/30、於明石市立文化博物館、同館・センター主催事業)
 - ・ 目録作成、資料撮影の実施
- * 明石市における地域資料の調査等
 - ・ 卜部和彦家文書調査
 - ・ 尾上家資料調査
 - ・ 古代東播磨地域における明石関係資料の調査

- ・ 近代明石関連の新聞記事調査
- ⑮たつの市における連携事業
 - * 地域資料調査の実施
- ⑯佐用町との連携事業
- ⑰姫路市香寺町との連携事業
- ⑱福崎町との連携事業
 - * 共同研究「福崎町の地域歴史遺産掘り起こし」
 - ・ 松岡家関係資料調査
 - ・ 福崎町立柳田國男・松岡家記念館秋季企画展「柳田國男の旅－秋風帖・雪国の春・海南小記－」（10/5～12/8、於同記念館、センター協力事業）
 - ・ 中島区有文書目録の作成
 - ・ 地域資料調査の実施
 - ・ 『広報ふくさき』への寄稿
 - ・ 調査合宿の実施：3/4・3/5
 - * 共同研究「三木家住宅文献資料調査」
 - ・ 三木家文書のデジタル化
 - ・ 三木家資料保存ワークショップ：5/6、7/1、9/2、11/4、11/12、1/6、3/2
 - ・ 『大庄屋三木家資料集6 三木家宛松岡家関係書簡・葉書②』の発行
 - ・ 大庄屋三木家住宅特別展「大庄屋のお仕事～姫路藩辻川組三木家の奮闘～」(11/1～12/1、於大庄屋三木家住宅、センター協力事業)、(関連事業) 三木家入門講座⑧「姫路藩大庄屋の職務と活動 大庄屋三木家を中心に」(11/12、講師：河野未央(武庫川女子大学)、於大庄屋三木家住宅)
 - * 福崎町文化財保存活用地域計画協議会委員(井上舞)
- ⑲猪名川町における連携事業
 - * 町民グループ「猪名川の古文書を楽しむ会」への協力(毎月第3土曜日、9月・11月・1月・2月は休会)
- ⑳大学協定に基づく大分県中津市との連携事業
 - * 中津市歴史博物館協議会への出席
- ㉑香美町との連携事業
 - * 文堂古墳と山陰道総合調査委員会委員(古市晃・井上舞)

(2) 歴史資料・災害資料の保全・活用

- ① 歴史資料ネットワークへの協力・支援
 - * 災害対応
 - * 神戸市兵庫区平野地区「奥平野古文書勉強会」
- ② 神戸大学附属図書館事業への協力

- * 人文学・社会科学データインフラストラクチャー（JDcat）強化事業、震災資料関係への協力
 - ・ サンテレビ所蔵震災報道映像の震災文庫への提供・公開のための検討会の開催、公開準備作業
 - ・ 郷土資料に関する取り組み：附属図書館所蔵郷土資料のデジタル化作業、若林泰氏旧蔵文書のデータ確認作業
- * 阪神・淡路大震災 30 年関連事業への協力
 - ・ 資料展「阪神・淡路大震災 30 年 あの日の神戸ー記憶の継承ー」（10/22～2025/2/3、於神戸大学附属社会科学系図書館 2 階展示ホール）
 - ・ 「第 14 回被災地図書館との震災資料の収集・公開に係る情報交換会」（12/6、於神戸大学附属社会科学系図書館）
 - ・ 資料寄贈への対応
- * 人文学研究科古文書室の所蔵文書整理

（3）地域歴史遺産を活用できる人材の育成

①地域歴史遺産の活用をはかるリーダー養成プログラム

- * 現代 GP「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成」事業の成果にもとづいて開講された大学院人文学研究科「共通教育科目」への授業提供
 - ・ 地域歴史遺産活用研究 A・B（学部は「地域歴史遺産保全活用基礎論 A・B」、A は「博物館資料論」との同時開講）：A は金曜 1 限、B は木曜 1 限に実施
 - ・ 地域歴史遺産活用演習 A・B（学部は「地域歴史遺産保全活用演習 A・B」、博士課程前期課程は「地域歴史遺産活用演習」、同後期課程は「地域歴史遺産活用企画演習」）。A は 9/11～13 に、B は 2/5～6 に、ともに篠山フィールドステーションにて実施

②2010 年～24 年度特別研究「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業を定着・普及させる活動

- * まちづくり地域歴史遺産活用講座：10/21、10/22、参加者 10 名。主催：人文学研究科・地域連携センター、共催：兵庫県教育委員会、後援：神戸市教育委員会・神戸市灘区
- * オプションプログラム古文書解読初級講座：11/6・13・20・27、講師：河島裕子（尼崎市立尼崎歴史博物館）、参加者 22 名。

（4）地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

①第 23 回歴史文化をめぐる地域連携協議会「災害の記憶を継承するー震災資料をどう活用していくか」

12/22、於瀧川記念学術交流会館、参加：20 機関 41 名

（5）地域連携センターを拠点とするプロジェクト

①科学研究費助成金・特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（研究代表者：奥村弘、課題番号 19H05457）

- * 「災害文化と地域社会史」第24回(7/20)・第25(11/17)回研究会の開催
- * 関連行事の共催・協力等
 - ・ 第6回歴史文化資料保全西日本大学協議会(協力)2025/1/25、オンライン
 - ・ 第23回歴史文化をめぐる地域連携協議会(共催)12/22、於神戸大学瀧川記念学術交流会館
 - ・ 第11回全国史料ネット研究交流集会(共催)2025/1/12・13、於神戸大学統合研究拠点コンベンションホール

②歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業

- * 兵庫県文化遺産防災研究会の開催(主催)11/28、於神戸大学
- * 震災資料や災害の記憶の継承に関する会議の開催
 - ・ 「第14回被災地図書館との震災資料の収集・公開に係る情報交換会」(12/6、於神戸大学附属社会科学系図書館)(共催)
- * 「歴史文化をめぐる地域連携協議会の開催」(12/22、於瀧川記念学術交流会館)(共催)
- * 阪神・淡路大震災に関する資料展示の開催、図録作成への協力
 - ・ 兵庫県立博物館の阪神・淡路大震災30年特別展「阪神・淡路大震災を伝える・知らせる—情報と通信の1990年代—」2025/1/11~3/16、於兵庫県立歴史博物館
- * 西日本大学連携協議会の開催(主催)2025/1/25、オンライン
- * 災害文化を担う人材育成・教育プログラム

(6) 地域連携研究と研究成果の公表

①年報『LINK【地域・大学・文化】』16号の刊行

- ・ 12/26発行、特集「地域歴史遺産を取り巻く多様な取り組み—文化財保存活用地域計画を足がかりにして—」、フィールドレポート2本、「LINKを読む」1本、活動報告3本、時評・展示評4本(総頁数98頁)

②地域関連研究

- * 地域連携センタースタッフによる日本学術振興会科学研究費助成事業
- * 講演、市民講座等への出講多数

以上、活動の詳細は、2025年3月末に発行の、当センターの2024年度事業報告書を参照。また、同報告書は、神戸大学学術成果リポジトリ Kernel に公表されている。

II-2. 倫理創成プロジェクト

[1] 目的

医療・環境・テクノロジー・情報などをめぐる現代社会の倫理諸問題を、人文学の多様な観点から分析し、さらには他の人文・社会科学、自然科学の諸分野とも学域横断的に連携しながら、高度科学技術社会として特徴づけられる現代に対応した新しい倫理システムの創成を目指す。

[2] 研究プロジェクトと人文学研究科の共通科目の実施状況

2024年度前期月曜2限 環境人文学講義 I

この講義では、哲学、倫理学、社会学、地理学などの専門領域の観点から、ESD (Education for Sustainable Development) を主題としたオムニバス形式の講義を行う。日本の社会の現状を踏まえ、広く「持続可能な社会」を生み出すために必要な価値観、社会システム、学問の方法の問題を、哲学・倫理学、心理学、社会心理学、社会学、デザイン学、地理学の立場から、具体的事例を踏まえつつ学際的に検討する。

回	日程	授業内容
1	4/8	「イントロダクション」 茶谷 直人 (哲学)
2	4/15	「バイオエシックス (生命倫理学) とはなにか」 茶谷 直人 (哲学)
3	4/22	「人口政策とリプロダクティブヘルス/ライツ」 中 真生 (倫理学)
4	4/30	「生延長と公衆衛生」 安倍 里美 (倫理学)
5	5/13	「人間と孤独」 柳澤 邦昭 (心理学)
6	5/20	「認知症とその家族」 新川 拓哉 (哲学)
7	5/27	「認知症とその家族」 新川 拓哉 (哲学)
8	6/3	「ジェンダーの心理学」 ターン 有加里 ジェシカ (社会心理学)
9	6/10	「人口と家族」 平井 晶子 (社会学)
10	6/17	「原発問題再考」 白鳥 義彦 (社会学)
11	6/24	「加速する社会とその持続可能性」 梅村 麦生 (社会学)
12	7/1	「建築・都市・環境」 長坂 一郎 (デザイン理論)
13	7/8	「環境社会学の視点」 佐々木 祐 (社会学)
14	7/19	「都市と公衆衛生」 原口 剛 (地理学)
15	7/22	「都市と公衆衛生」 原口 剛 (地理学)

[3] ESD コース (持続可能な開発のための教育コース)

・ESD サブコースの実施状況

2024 年度に、ESD 関連の全学共通科目の担当および哲学・社会学・地理学専修が共同して、以下の授業を行った。

《2024 年度文学部 ESD コース科目授業一覧》

科目名	学期・時限	担当専修 (教員)	備考 (読替など)
ESD 論 A・B	(後期) 水・5	5 学部合同	1 年生対象
環境人文学講義 I	(前期) 月・2	哲学・社会学・地理学など	2 年生以上
環境人文学講義 II	(後期) 水・1	福島 あずさ	自然地理学
ESD 演習	(前後期) 不定期開催	原口 剛	地理学実習 II / 倫理創成論演習

ここでは、2024 年度に文学部で開講、実施された科目についてのみ報告する。

・環境人文学講義 I の授業内容は前掲の表を参照。

・環境人文学講義Ⅱ

この講義は自然地理学に含まれる各学問分野の近年の知見を踏まえつつ、教科「地理」のなかで、自然環境についてどのような観点から授業を展開することができるか、自分の力で考えられるようになることを目標とした。具体的には「統合自然地理学」と呼ばれる複数の手法・視点・表現（地図・グラフ等）・時間軸等から自然環境を含めた地域を分析する考え方についての講義を行った。

・ESD 演習

NPO 等との協働で「震災とアスベスト」を展開し、学生みずからが当事者や支援者に対してインタビューを実施するとともに、それらの調査から得られた知見をシンポジウムにて報告した。具体的なプログラムは以下のとおりである。

年 月 日	プログラム
2024 4 26	震災アスベスト被害についてのレクチャー
5 1	フィールドワーク① ひとと防災未来センターの訪問・見学
5 12	フィールドワーク② 神戸港をあるく
5初旬	課題文献の読解
5 26	連続公開講座「震災の経験を記録する：阪神・淡路大震災とアスベスト被害を聞き取り、語り継ぐために」第1回 テーマ：「被害の経験に向き合うとはどういうことか」 プログラム： 講演①「時を超えて肉声に迫る：アスベスト報道にかかわって」加藤正文（神戸新聞） 講演②「静かな時限爆弾：アスベスト被害の実相と向き合って」西山和宏（ひょうご労働安全衛生センター）
6～	公開講座のフィードバック
6 23	連続公開講座「震災の経験を記録する」第2回 テーマ：「アスベスト被害の経験を聞く」 プログラム： 第Ⅰ部 証言「アスベスト被害の経験」：（登壇者）アスベスト被害の当事者の方々 第Ⅱ部 座談会：（登壇者）当事者の方々・加藤正文（神戸新聞）・神戸大学の学生
7～	公開講座に関する記事の執筆
7 21	公開講座に関する記事への添削・コメント
7 22	戸崎正巳氏（全港湾神戸弁天浜支部）による講演
8～	インタビュー調査
2025 1 12	「阪神・淡路大震災から30年 災害とアスベストを考えるシンポジウム」における研究成果報告

・2024 年度後期月曜 4 時限 応用倫理学講義

この講義では、科学技術と環境、情報、生命・医療などの応用倫理・応用哲学の諸原理と具体的問題について学ぶ。また、応用倫理学の意義とその方法論についても考察する。応用倫理学研究において重要な学際的視点を重視するとともに、事例研究の基礎を修得できるようにする。

回	日程	授業内容
1	10/7	「ガイダンス・イントロダクション」 茶谷 直人
2	10/15	「インフォームド・コンセントの成立経緯と倫理的意義」 茶谷 直人
3	10/21	「生殖技術をめぐる倫理的問題1」 中 真生

4	10/28	「生殖技術をめぐる倫理的問題2」中 真生
5	11/6	「死に臨む哲学1」加藤 憲治
6	11/11	「死に臨む哲学2」加藤 憲治
7	11/18	「生延長と健康1」安倍 里美
8	11/25	「生延長と健康2」安倍 里美
9	12/2	「最先端科学技術をめぐる倫理：人工主体とスマートグラス1」新川 拓哉
10	12/9	「最先端科学技術をめぐる倫理：人工主体とスマートグラス2」新川 拓哉
11	12/16	「生命倫理と宗教1」丸山 栄治
12	12/23	「生命倫理と宗教2」丸山 栄治
13	1/6	「生命倫理と宗教3」丸山 栄治
14	1/14	「中絶規制の根拠の批判的考察」奥井 剛
15	1/27	最終試験

[4] 本学が全学的規模で開始する「神戸大学生命・自然科学 ELSI 研究プロジェクト（通称：KOBELSI）」の発足と関連研究集会の開催

「神戸大学生命・自然科学 ELSI 研究プロジェクト」（KOBELSI）は、本学における神戸大学デジタルバイオ&ライフサイエンスリサーチパーク（DBLR）の設立に伴い、その併設組織として2023年に開設された全学的プロジェクトである。5つの研究拠点（バイオものづくり研究拠点・先端膜工学研究拠点・医工学研究拠点・健康長寿研究拠点・社会システムイノベーション研究拠点）を軸とするDBLRは、未来社会に向けた新たな課題の解決に資する経済的・社会的価値を創造するために、傑出した知と有能な人材を創出するとともに、社会実装につなげる研究環境基盤を強化することを目指して開設されたものである。本プロジェクトは、このように本学が共創的な先端科学技術研究を推進する学内的状況と、ELSI研究についての今般の社会的要請を踏まえ、先端科学技術の社会実装に関わる倫理的（Ethical）・法的（Legal）・社会的（Social）な問題（Issues）を学際的に研究するために立ち上げられた。KOBELSIは、ELSIの基礎に「人々の充実した生（エウダイモニア）」「社会の福利」といった根源的な問題が通底すること、および現代の科学技術社会における倫理的問題の学際的研究を人文学研究科の研究教育センター「倫理創成プロジェクト」が長年にわたり推進してきた経緯に鑑み、倫理創成プロジェクトのメンバーが組織を統括し、学内の様々な部局が参画するという研究体制をとっている。

<研究体制>

・リーダー

茶谷 直人

・人文学研究科

茶谷 直人

新川 拓哉（哲学・本プロジェクト副リーダー）

中 真生（倫理学）

安倍 里美（倫理学）

平井 晶子（社会学）

市澤 哲（日本史学）

原口 剛（社会地理学・都市論）

柳澤 邦昭（社会心理学）

ジミー・エイムズ (哲学) 奥井 剛 (政治哲学)

・国際文化学研究科

塚原 東吾 (科学史・STS)

・法学研究科

高橋 裕 角松 生史 板持 研吾

・経済学研究科

小島 理沙

・経営学研究科

松嶋 登

・医学研究科

森 康子 青井 貴之

・保健学研究科

秋末 敏宏

・人間発達環境学研究科

増本 康平

<イベント>

KOBELSI が 2024 年度に主催・参与した主な研究集会・イベントは以下の通りである。

ELSI ワークショップ「インフォームド・コンセントと刑法」

日時：2024 年 5 月 13 日

場所：神戸大学大学院人文学研究科 学生ホール

講演者と題目

富山 侑美 (沖縄大学経法商学部 専任講師)

「インフォームド・コンセントと刑法」

共催：神戸大学 生命・自然科学 ELSI 研究プロジェクト

Kobe Philosophy Seminar Series (3): AI Consciousness

日時：2024 年 6 月 28 日

場所：Room B232, Department of Humanities and School of Letters, Kobe University

講演者と題目

Aida Elamrani, Institute Jean Nicod, Ecole Normale Superieure

“What is Artificial Consciousness and why we want it”

HKCRC-Mimir-P.I.E. Workshop on Ethics, Technology, and the Future

日時：2024 年 6 月 14-15 日

場所：M+, West Kowloon Cultural District

講演者と題目

Anders Sandberg

“Law, AI, and Leviathan”

Eiji Maruyama and Takuya Niikawa

“Privacy of smart glasses”

Adam Bradley

“AI moral agency”

Joe Roussos

“Unawareness, longtermism and pure time discounting”

Song Fei

“Risk imposition and sequence”

Julia Mosquera

“Accidental panspermia: animal population ethics in space”

Julia Adler

“The effects of climate change on democracy”

Adam Gibbons

“Epistocracy and the Problem of Political Capture”

Karim Jebari

“What is the value of animal welfare?”

共催：Hong Kong Catastrophic Risk Centre, Mimir Center for Long Term Futures Research and Project Innovation Ethics

Kobe Philosophy Seminar Series (4): Metaphysics of Consciousness

日時：2024年7月12日

場所：Room B235, Department of Humanities and School of Letters, Kobe University

講演者と題目

Eleena Takashima, Durham University

“‘Magicalism’ as an Alternative to Panpsychism”

Nicholas Silins, Cornell University

The Lamp that Illuminates Itself: Consciousness and Inner Awareness

Kobe Philosophy Seminar Series (5)

日時：2024年7月29日

場所：瀧川記念学術交流会館大会議室

講演者と題目

Chon Tejedor, Universitat de Valencia

Conditioned Responsibility and Consent in the Wake of New Technologies

Kobe Philosophy Seminar Series (6)

日時：2024年10月11日

場所：神戸大学人文学研究科 B133

講演者と題目

伊藤 遼（早稲田大学文学学術院准教授）

「ブランドムの推論主義と哲学的論理学」

Kobe Philosophy Seminar Series (7)

日時：2024年10月18日

場所：神戸大学人文学研究科 B331

講演者と題目

眞嶋 俊造（東京工業大学リベラルアーツ研究教育院 教授）

「戦争を倫理学する」

Kobe Philosophy Seminar Series (8)

日時：2024年10月24日

場所：神戸大学人文学研究科 B133

講演者と題目

北浦 貴之（山梨県都留市立宝小学校教諭）

鈴木 径一郎（大阪大学社会技術共創研究センター特任助教）

「子どもたちの〈てつがく〉の世界」

Kobe Philosophy Seminar Series (9)

日時：2024年11月22日

場所：神戸大学人文学研究科 B133

講演者と題目

豊川 航（理研CBSートヨタ連携センター（BTCC）計算論的集団力学連携ユニット）

「多本腕バンディット問題を使った社会的学習、集合知、文化進化の研究」

共催：JSPS 科研費課題番号 24H00808（意識経験のナラティブを取得・分析する方法論の構築とその応用）

2024年度 KOBELSI セミナー：「高齢者や認知症の方の同意能力」

日時：2024年12月8日

場所：神戸大学人文学研究科 B135

講演者と題目

成本 迅（一般社団法人日本意思決定支援推進機構理事長/京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学教授）

「高齢期に求められる意思決定とその支援～医療同意を中心に～」

樋山 雅美（一般社団法人日本意思決定支援推進機構リサーチフェロー/京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学）

「高齢期の意思決定を支えるための姿勢～その人らしさとは～」

共催：神戸大生命・自然科学 ELSI 研究プロジェクト (KOBELSI)

JST Research Institute of Science and Technology for Society (RISTEX) [Grant Number JPMJRS22J4].

ELSI ワークショップ「理科大 ELSI プログラムについて：ELSI に関する若干の科学史・科学論的考察を含め」

日時：2025 年 2 月 10 日

場所：神戸大学大学院人文学研究科 C262

講演者と題目

慎 蒼健（シン チャンゴン）（東京理科大学教養教育研究院葛飾キャンパス教養部 教授）

「理科大 ELSI プログラムについて：ELSI に関する若干の科学史・科学論的考察を含め」

補足コメント：村上 学（東京理科大学 教養教育研究院 葛飾キャンパス教養部 教授 東京理科大学 ELSI 教育プログラム担当）

共催：神戸大学 生命・自然科学 ELSI 研究プロジェクト

Kobe Philosophy Seminar Series (10)：「現代哲学の最前線」

日時：2025 年 2 月 17 日

場所：神戸大学人文学研究科 B232

講演者と題目

鈴木 雄大（中京大学 准教授）

「心の哲学における視点的な立場と無視点的な立場の分類」

千葉張 将希（東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程）

「目的論的思考の本性：近年の知見とその含意」

<研究誌>

『21 世紀倫理創成研究』第 17 号を 2024 年度 3 月に刊行した。今号は、松田毅本学名誉教授による論考、同意をテーマに近年刊行された学術書の書評論文を中心に構成されている。（いずれも一般投稿による査読論文ではなく、倫理創成プロジェクトによる依頼論文となる。）

[5] 今後の展望

上述のように倫理創成プロジェクトは、2023 年度に発足した全学的事業「神戸大学生命・自然科学 ELSI 研究プロジェクト (KOBELSI)」の中核的役割を担うこととなった。2024 年度は、前年度に遂行した研究集会などで得られた知見を活かしつつ、応用倫理に関わる多岐にわたる研究教育活動を展開してきたほか、引き続き (KOBELSI) プロジェクトの本格的な事業遂行に邁進してきた。2025 年度も引き続き同様の活動を発展的に継続しつつ、ELSI 研究に限らず、医療・環境・工学・情報などに関する現代社会の応用倫理的諸問題について、引き続きさまざまな原理的かつ具体的研究を展開していきたいと考えている。

II-3. 日本語日本文化教育プログラム

[1] 研究活動

- ・「言語コロキウム」開催 (7 月 12 日)。荻原俊幸教授 (ワシントン大学) を招聘。
- ・「日本言語学会夏期講座 2024」開催 (8 月 26 日～31 日。日本言語学会と共催)
- ・国際シンポジウム「第 3 回 Evidencial-Based Linguistics (EBL)」開催 (9 月 21 日。国立国語研究所と共催)
- ・「第 34 回音声学セミナー」開催 (11 月 16 日。日本音声学会と共催)
- ・「第 20 回音韻論フェスタ」開催 (3 月 4 日～5 日。関西音韻論研究会・東京音韻論研究会との共催)。L. ラブリュヌ教授 (ボルドー・モンテーニュ大学) を招聘。
- ・サブプロジェクトとして古典籍 DB プロジェクトに関する国内研究会を 1 回開催。

[2] 教育活動

【日本語学術文章の作成と指導】

日本語論文・レポート作成を行える留学生と、チュートリアル形式で日本語論文・レポート作成の支援が行えるような日本人学生を養成するための授業を 2024 年度も引き続き開講した。正式には大学院博士課程前期課程の学生を対象とした授業だが、実際には学部生や博士課程後期課程の学生、研究生等も参加している。

授業科目	単位数
日本語学術文章の作成と指導	2 単位

【日本語日本文化教育】

主に博士課程前期課程の学生を対象として、海外の教育機関等で日本語日本文化教育を担う人材を養成するための教育プログラムの充実を図った。具体的には以下の 2 科目を 2024 年度も引き続き開講した。

授業科目	単位数
日本語日本文化教育演習	2 単位
日本語教育方法論	2 単位

【海外インターンシップ】

- ・人文学研究科では「日本語日本文化教育プログラム」修了者（あるいは修了見込み者）に海外教育機関でのインターンシップの機会を与え、真に国際的に通用するグローバル人材の養成を目標として、2010年度以降、日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」と「頭脳循環プログラム」によって中・長期（約2ヵ月～1年）に渡って毎年1名の大学院生もしくはPDをハンブルク大学（ドイツ）に送り出してきた。2015年度以降は学内予算を得て、オックスフォード大学（連合王国）、トリーア大学（ドイツ）、「ディミトリエ・カンテミル」キリスト教大学（ルーマニア）、北京外国語大学（中国）にも各1名、短期間（2週間～1ヵ月）ないし長期（1セメスター）派遣することが可能になり、毎年4～5名の大学院生・学部生がインターンシップを行っている。
- ・2024年度は、日本語日本文化海外インターンシップ制度により、北京外国語大学に博士課程前期課程1名、ハンブルク大学に博士課程前期課程1名、オックスフォード大学に博士課程前期課程1名、計3名を派遣した。

II-4. 神戸雰囲気学研究所 (KOIAS)

[1] 目的・沿革

2022年度、新学術領域「雰囲気学」の創出と展開のために、神戸雰囲気学研究所（以下、略称 KOIAS で表記）を設立した。これまで学術的に等閑視されてきた「雰囲気」に関する総合研究を発展させることを目的として、哲学、文学、歴史学、芸術学、美術史、心理学、建築学、メディア論などの諸分野による共同研究を行っている。神戸大学大学院人文学研究科の若手研究者を中心とした組織であるが、他部局（工学研究科、国際コミュニケーションセンター）および他大学・他機関（岡山県立大学、青山学院大学、東京大学、東北大学、追手門学院大学、郡山市立美術館など）のメンバーも加わっている。また、新学術領域の基盤となる国際研究ネットワークの整備に力点を置いており、2022年度にローマ・トル・ウェルガータ大学の Atmospheric Spaces（イタリア）およびダルムシュタット哲学実践研究所（ドイツ）、2023年度にコンコルディア大学のセンス学研究所（カナダ）およびコペル科学研究センター（スロベニア）、2024年度にロストック大学の新現象学会（ドイツ）および中央研究院の中國文哲研究所（台湾）およびフルミネンセ連邦大学の no.ar ラボ（ブラジル）と、それぞれ研究協定を締結した。このネットワークを基盤として、神戸大学を中心に、雰囲気学の国際学会の設立を目指している。

[2] 2024年度の活動

KOIAS のメンバーでつくる雰囲気学研究チームが、2024年度から3年間の予定で、神戸大学の先端的異分野共創研究プロジェクトに採択された。このプロジェクト予算によって後述のように2024年度後期から特命講師を採用した（2024年10月1日付で着任）。

2024年4月21日にロストック大学の新現象学会（ドイツ）と研究協定を締結した。同月25日にはコペンハーゲン大学で（久山）、27日にはドイツの哲学実践研究所で（久山）、5月2日にはオックスフォード大学で（新川）、それぞれ雰囲気学に関する講演会を開催した。また、6月5日にはシカゴ大学のジェシー・アルペリン氏の講演会を神戸大学で開催した。

KOIAS アートプロジェクトの一環として、ドイツのベルリンを本拠地にして活動するサウンド・アーティ

ストのサム+カトリーネム氏を招聘し、2024年5月に合計4回のイベントを開催した。締めくくりに KIITO で開催されたパフォーマンスとシンポジウム「耳で考える Thinking with Ears」(5月30日)では、KOIAS メンバー(松山、桑山、針貝)のほか、鈴木昭男氏(サウンドアーティスト)や宮北裕実氏(ダンサー)も交えて活発な議論がなされ、神戸新聞で好意的に報道された。さらにもうひとつの KOIAS アートプロジェクトとして、画家の水野暁氏を招いた「視覚の呼吸、絵画の呼吸」講演会とワークショップが7月11日と12日に開催された。いずれのプロジェクトも KOIAS の松山が中心となって企画・運営を行った。

7月21日には KOIAS と東京大学 UTCP および EAA との共催で、「空気」という日本語をテーマとする国際ワークショップが開催された。KOIAS から4名が参加した(マリヌッチ、安倍、桑山、久山)。これを機縁として UTCP および EAA との協働がはじまった。

8月6日には、世界哲学会ローマ大会にあわせて、ローマにて国際雰囲気学会の設立準備のための会合を開いた。KOIAS メンバー(安倍、久山)の他、ローマ・トル・ウェルガータ大学 Atmospheric Spaces、コペル科学研究センター(スロベニア)、中央研究院・中國文哲研究所(台湾)が出席し、2026年度に学会を設立することが決定された。

9月17日にはトリーア大学(ドイツ)で KOIAS の研究発表を行った(久山)。9月18日にはローマ(オンライン)で雰囲気をテーマとするコロキウムが開催され、KOIAS から2名(安倍、久山)が研究発表を行った。

9月29日から10月1日にかけて、台湾の中央研究院で、東アジアにおける雰囲気学の可能性をテーマとする国際ワークショップを共催した。台湾各地およびヨーロッパ各地から30名弱の参加があり、KOIAS からは7名が参加した(早川、有澤、大橋、小寺、マリヌッチ、パリシ、久山)。

2024年10月からは上記のように神戸大学の先端的異分野共創研究プロジェクトの特命講師としてアルベルト・パリシ氏(ハーバード大 PhD)を採用した。パリシ氏は雰囲気学の研究、また異分野共創研究のための KOIAS の運営を主な任務として、国内外で活躍している。氏は、12月4日には神戸大学で、12月17日にはフィレンツェ大学で、それぞれ雰囲気学に関する講演を行った。

10月3日にはディーター・ボルヒマイアー氏(ハイデルベルク大学退任教授、ドイツ文学)およびリンジン・ジャン氏(復旦大学准教授、音楽学)を、10月30日にはマテュー・ゴレーヌ氏(仏・ニーム大学、哲学)を、2025年1月8日と28日にはマニュエラ・サラザー氏(エセックス大学、メディア論)をそれぞれ招聘して神戸大学で講演会を開催した。11月7-8日にチューリヒで開催されたシンポジウム「経験としての芸術」でも KOIAS の研究発表を行った(小寺)。

島津製作所との共同事業はさらに展開している。2024年7月8日には島津製作所のデザイン部の作品を雰囲気学の視点から共同で検討する会合を開き、KOIAS から6名が参加した(有澤、小寺、早川、池野、松井、久山)。10月12日には東京のギャラリー・アクシスで、島津製作所との共同事業の一環として、雰囲気とデザインをテーマにしたトークイベントを行った。この様子は島津製作所のウェブメディア「SHIMADZU TODAY」にも掲載された。2024年10月8日(芹澤)と2025年2月6日(小寺)には、京都の島津製作所本社内 KYOLABS において「島津・KOIAS レクチャー」を行った。

2025年3月24日から25日にかけてはブラジルのフルミネンセ連邦大学で、KOIAS との共催で、南米初の雰囲気学コロキウムが開催された。KOIAS からは3名(安倍、パリシ、久山)が参加した(3月25日に

は研究協定を締結)。

福島県の郡山市立美術館とのコラボレーションも2023年度より継続しており、展覧会「続・〈雰囲気〉を展示する」(2025年1月25日から4月20日まで)を共同企画した。2025年2月24日にはKOIASによるギャラリートーク(久山)を行った。

国内外での口頭発表、英語論文出版(Contemporary Aesthetics, The Philosophical Quarterlyなどに論文掲載)などの成果があった。また、KOIASの活動は、ラジオ関西(2024年6月16日と23日)、毎日新聞(2024年7月18日)や神戸新聞(2024年9月14日夕刊)にも好意的に取り上げられた。2025年度からはJSPSの研究拠点形成事業(A型)に採択されており、雰囲気学の国際学会の設立を目指して、今後も着実に活動の輪を広げていきたい。

II-5. 文化交渉学

文化の衝突・融合・創出に着目する分野横断的研究を目的として、国際会議参加・運営を通じた共同研究・若手育成を行っている。2024年度は以下の4つを軸として展開した。

[1] 海港都市研究センター

2024年度、海港都市研究センター(以下、センターと略称)では、世界海洋文化研究所協議会(WCMCI)第14回国際大会及び神戸・北京・復旦三大学人文フォーラムに参加した。

・WCMCI国際シンポジウム(世界海事史学会国際大会)の参加

本センターは例年、韓国海洋大学・台湾大学・中山大学・長崎大学等をパートナーとして持ち回りで海港都市国際会議を開催し、若手研究者に国際的な場における研究発表の機会を提供するとともに、韓国海洋大学を中心とする世界海洋文化研究所協議会WCMCI(The World Committee of Maritime Cultural Institutes)の枠組みで行われる代表者会議や国際学術シンポジウムにも参加してきた。

2024年度は、2025年3月15日、16日に第15回世界海洋文化研究所協議会学術大会(国際シンポジウム)が長崎大学主催で行われ、早川太基講師が参加し、学術報告「最西端の富士山信仰―「富士基宮清水神社を訪ねて」を行った。

・神戸・北京・復旦三大学人文フォーラムへの参加

人文学研究科は2018年以降、教員人事交流を行っている北京大学及び復旦大学と持ち回りで教員と学生が参加する「三大学人文フォーラム」を開催してきた。2024年からはこのフォーラムを本センターが管轄することとなり、11月16日、17日の二日にわたって上海・復旦大学の会議に参加した。参加者は白鳥研究科長のほか濱田教授、早川講師、そして研究員が一人と博士課程の院生六人(中文三人、社会学二人、国文学一人)が研究報告を行い、復旦大学及び北京大学の教員や院生と充実した研究交流を行った。

[2] パリ大学ナンテール校(旧パリ10大学)

ナンテール校との学術交流については、以下の二点があげられる。

- 1) 2024年6月に、ナンテール校哲学科教授ティエリー・オケ氏と同校研究員ピエール・ニーダーガング氏を招聘した。両氏は生物哲学とジェンダー論に関する現代思想を専門としている。招聘期間中に研究発表

として国際シンポジウムを一度開催し、教育参加として学部向け講義1回、大学院演習1回、学部・大学院共通演習1回を担当してもらった。英語・フランス語を用いた機会を通じて、現代の芸術に内在する生命論やジェンダー論的な問題について、参加した研究者や学生は最新の知見を共有することができた。

2) 2025年3月に、ナンテール校哲学科教授ティエリー・オケ氏および本学大橋の共催で、国際学生シンポジウムをナンテール校にて開催した。神戸大学から博士後期課程大学院生3名が参加し、英語ないしはフランス語で口頭発表を行い、現地の専門研究者から指導や助言を得ることができた。

例年開催されるシンポジウムや招聘を通じて、本学学生は国際的な研究活動の実績を積むのみならず、フランス本国の専門家によるアドバイスを直接受ける機会であり、また大阪大学やパリ大学の同世代の学生との交流を通じて、専門的な研究知見を深め、将来の留学先の選定にも役立つなど、修士論文や博士論文の完成度を高めることにとどまらない広範な成果をもたらしている。

[3] INTERFACEing

2024年8月28日から30日までの3日間、国立台湾大学主催で国際会議 INTERFACEing 2024 が開催され、本研究科教員1名、PD1名、博士後期課程大学院生3名が参加し、研究発表を行った。INTERFACEing は国立台湾大学、トリーア大学（ドイツ）、神戸大学の協力のもと（この3大学は相互に協定校である）、人文系ヨーロッパ研究者が集い、世界的なネットワークを構築する場として、2021年に始まった国際会議で、会議での使用言語は英語・ドイツ語・フランス語・イタリア語・スペイン語・ロシア語の6言語である。第1回大会は2021年に国立台湾大学、第2回大会は2022年にトリーア大学、第3回大会は2023年に本研究科主催で開催された。第4回となる台北大会は“From the Invention of Writing to the Emergence of Artificial Intelligence: Cultural Approaches to Information Technology”を全体テーマとして掲げ、21か国から62名が参加して研究発表を行った。

INTERFACEing の発表者は開催後に国立台湾大学が発行する電子ジャーナル *Interface: Journal of European Languages and Literatures* に投稿できるシステムになっている。2024年には第3回神戸大会の成果を掲載した第23号 (<https://interface.org.tw/index.php/if/issue/view/34>) と第24号 (<https://interface.org.tw/index.php/if/issue/view/35>) が発行され、この編集作業に本研究科教員がゲストエディターとして加わった。また、国立台湾大学との交流を深めるため、2025年1月25日には陳翠蓮教授を招聘して公開セミナー「在日台湾人と戦後日本」を開催し、学内外から30名の参加者があった。

[4] 異分野共創研究ユニット「『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット」

神戸大学学術研究推進機構異分野共創研究企画・創出委員会による異分野共創研究ユニットとして、2023年度から継続して「『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット」が採択され、共同研究を実施した。共同研究の一環として、外部講師を招いた公開研究会、大学院生による報告を中心とするワークショップ等、本ユニット主催・共催企画を以下のとおり開催した。

【主催】

①2024年度夏公開研究会「現代人の生と時間」（日時：2024年8月30日（土）14:30～18:30、形式：オンライン開催）

②文化交渉学ワークショップ2024「植民地と帝国の文化」(日時:2024年9月20日(金)13:00~16:20、24日(火)13:00~16:20、25日(水)14:10~16:20、会場:神戸大学文学部)

【共催】

③神戸大学海事博物館2024年度企画展(神戸大学海事博物館20周年記念)「神戸からの船出~近代日本・貨客船の光彩~」(日時:2024年7月19日(金)~2025年5月16日(金)、会場:神戸大学海事博物館)

④映画・フォーラム「どうなつとるん?但馬の外国につながる子どもたちの進学」(日時:2024年10月14日(月・祝)13:00~16:00、会場:豊岡交流センター豊岡稽古堂)

⑤ワークショップ「外国ルーツの子どもに関する調査報告会」(日時:2024年10月20日(日)14:30~17:30、会場:神戸大学文学部)

同研究ユニットのメンバーにより、学術誌『総合文化』を創刊した(第1号、2025年3月31日刊行、<https://hdl.handle.net/20.500.14094/001002101>)。同号では、上記のワークショップの各報告をもとに執筆された論考を初めとして、共同研究の成果を複数公刊している。また2025年度も同研究ユニットは異分野共創研究ユニットとして採択され、継続して共同研究を実施し、年度末には『総合文化』第2号を刊行する予定である。

Ⅲ. 社会貢献

Ⅲ-1. 公開講座

文学部・人文学研究科では、地域の方を対象に毎年度公開講座を実施している。しかし、2020年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、残念ながら実施できなかった。

なお、2019年度から2024年度までの公開講座のテーマと概要は次のとおりである。

	テーマ	概要
2019年度	「とき」の 人文学	<p>アウグスティヌス（354-430年）は『告白』の中で「ではいったい、時間とは何でしょうか」と問い、「私たちが会話のさい、時間ほど親しみ深く熟知のものとして言及するものはありません。それについて話すとき、たしかに私たちは理解しています。他人が話すのを聞くときも、たしかに私たちは理解しています」と述べますが、しかし「たずねられて説明しようと思うと、知らないのです」と続けます。たしかに、時間は身近なものですが、いざそれが何であるかと問われると、答えるのは容易ではありません。しかも、時代や社会が異なれば、「とき」の意識や感覚も違ってきます。「とき」について、人文学の諸分野でさまざまなアプローチが考えられますが、今回は次のようなテーマを取り上げます。「とき」を超えて過去の日本語の姿に迫るにはどうしたらよいでしょうか。自分の時間を紡ぐ行為である自伝を通じて見える現代中国の自己認識の変化とはどのようなものでしょうか。空間を対象とする地理学で「とき」はどのように研究されているのでしょうか。そして、19世紀前半から現在に至るまでのフランス文学で「時間」はどのように描かれてきたのでしょうか。知的なひとときをお楽しみいただければと思います。</p>
2021年度	病と こころ	<p>昨年来我々を悩ませ続ける疫禍は、世界中の人々の身体、そして心を蝕んできました。感染症は罹患者の身体を冒したばかりではありません。防疫策としてのロックダウン・行動制限は、全ての人々の心に重くのしかかり、目に見えぬウィルスの拡大は、社会全体に不安と疑心暗鬼の雰囲気をもたらし、こうした現象に対して人類はどう対処してきたのでしょうか。私たちはどう向き合っていくべきなのでしょう。たとえ今般の疫禍が終息しようとも、この問題は今後、私たちが常に向き合い続けねばならない問いとなるでしょう。</p> <p>本年度の講義はこの問題に対して、多種多様な人文学諸分野の中でも西洋現代史、社会学、社会心理学、フランス文学、それぞれのアプローチで迫ってみたいと思います。現在、私たちが置かれた状況を俯瞰的に把握し、これからのことを皆さんとともに真摯に、多角的に考えてゆく、そうしたきっかけになればと願っています。</p>
2022年度	日常と 非日常の はざま	<p>2019年以降、世界中で猛威をふるった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）について、まだまだ収束は見通せないものの、日々の暮らしのなかで徐々に「日常」を取り戻しつつあります。しかし、未知の感染症と、それに対する防疫策として行われたロックダウンや行動制限によってもたらされた「非日常」は、いまなお私たちの「日常」に影を落としています。</p> <p>また2022年には、ロシアがウクライナへと侵攻し、ウクライナで暮らす人びとの「日常」がまたたくまに奪われていきました。ウクライナやウクライナから逃れた人びとは言うまでもなく、ロシアや他の国々で暮らす人びとにも、さまざまなかたちで戦争という「非日常」が「日常」のなかに浸潤しています。</p> <p>本年度の講義はこうした「日常と非日常のはざま」に直面する状況に対して、それぞれのアプローチから迫ってみたいと思います。現在、私たちが置かれた状況を俯瞰的に把握し、これからのことを皆さんとともに真摯に、多角的に考えてゆく、そうしたきっかけになればと願っています。</p>

2023 年度	人文学を解 き放つ	<p>今般、神戸大学人文学研究科では『人文学を解き放つ』（神戸大学出版会、2023年）を刊行いたしました。本書の内容は、学術エッセイです。それぞれの学問領域において一頭地を抜くエキスパートである38名の教員・元教員たちが、自分の研究とは何なのかを根本的につきつめながら、最前線の問題意識に基づいて執筆しています。本書において「人文学」は、読者の前に「解き放」たれました。すでにお読みになられたかたは、どのような感想を持たれたでしょうか？そこに現われた「人文学」の姿は、まさに現実の社会問題への挑戦者であり、言葉と概念の創造者であり、古今東西のデータの分析者であり、虚偽不正なる存在への糾弾者であり、学問的真理への求道者でありました。ある意味このような「人文学」そのものが、自由な生命力に富んだ生き物であるとも言えるでしょう。そして今や「解き放」たれた「人文学」が、鳳凰のような翼をふるって無間にひろがる時空を駆けめぐるれば、新たな研究の足掛かりが生まれてゆき、まだ見ぬ世界への扉が開くかもしれません。</p> <p>本講座では『人文学を解き放つ』の執筆者のなかから、4人に登場していただきます。「解き放」たれた「人文学」とは何なのかを、ともに考えてゆきましょう。</p>
2024 年度	人文学を解 き放つⅡ	<p>今般、神戸大学人文学研究科では『人文学を解き放つ』（神戸大学出版会、2023年）を刊行いたしました。本書の内容は、学術エッセイです。それぞれの学問領域において一頭地を抜くエキスパートである38名の教員・元教員たちが、自分の研究とは何なのかを根本的につきつめながら、最前線の問題意識に基づいて執筆しています。</p> <p>本書において「人文学」は、読者の前に「解き放」たれました。そこに現われた「人文学」の姿は、現実の社会問題への挑戦者、言葉と概念の創造者であり、古今東西のデータの分析者、学問的真理への求道者でもありました。このような「人文学」そのものが、自由な生命力に富んだ生き物であるとも言えるでしょう。</p> <p>昨年度、『人文学を解き放つ』の執筆者のなかから4人に登壇いただき、「人文学」の魅力を紐解きました。好評を博した昨年度に続き、本講座では、新たに別のジャンルの講師4名が登場し、本書の内容もしくは問題意識を発展させ、現在の「人文学」研究の最先端を分かりやすくお話しします。</p>

Ⅲ-2. 高大連携事業

文学部・人文学研究科では、高大連携事業として出前授業、模擬授業等を行っている。2024年度に実施された出前授業、模擬授業等の概要は次のとおりである。

《2024年度実施の出前授業・模擬授業等》

高校名	実施日	事業内容	
		事業内容	詳細
淳心学院高等学校	6月7日	模擬授業 施設見学	文学部ってこんなこともできるんだ！—現代社会を作りかえるための最前線の研究紹介—
兵庫県立長田高等学校	6月21日	出前授業	カリブ海のフランス文学？—エメ・セゼールの詩的世界を読む
岡山県立津山高等学校	6月22日	出前授業	片岡鉄兵「綱の上の少女」を読む
大阪府立鳳高等学校	7月10日	授業見学 施設見学	社会学史
徳島県立城南高等学校	7月10日	その他	学部・学科紹介
大阪府立茨木高等学校	7月13日	出前授業	学問発見講座
兵庫県立加古川西高等学校	10月25日	授業見学 施設見学	人文学基礎・日本史学
奈良県立郡山高等学校	10月29日	出前授業	構内学部説明会
兵庫県立兵庫高等学校	11月8日	授業見学 施設見学	人文学基礎・ドイツ文学
神戸海星女子学院高等学校	11月14日	出前授業	西洋美術の読み方
兵庫県立西宮高等学校	11月27日	出前授業	「他者」って何？
兵庫県立北須磨高等学校	12月12日	授業見学 施設見学	芸術学演習
兵庫県立御影高等学校	12月20日	出前授業	空間の履歴をひもとく
神戸大学附属中等教育学校	2月8日	出前授業	国語の授業に視覚教材をどのように取り入れるか
和歌山県立桐蔭高校	3月14日	出前授業	人文知は人類を救えるか？—世界的ベストセラーSF『三体』における科学と人文学の相克

- ※ 出前授業：高校等へ本学教員を派遣し、授業を行うもの
 模擬授業：「大学体験」として高校生への訪問を受け入れ、高校生向けの授業を行うもの
 授業見学：大学で実施される通常授業を高校生が見学するもの
 施設見学：人文科学図書館見学
 その他：上記以外のもの

掲載の表の下から三段目、兵庫県立御影高等学校との連携プロジェクトは、2007年度から継続的に実施されている事業である。このプロジェクトでは、神戸大学文学部が高等学校地理歴史科教員免許取得希望者のために開講している「地歴科教育論」の一環として、兵庫県立御影高校総合人文コースの生徒たちがグループに分かれて「地域」をテーマとする課題研究（探究活動）に参加し、これを支援する取り組み（実習）を行っている。この取り組みは、国立大学の学部（大学院）と県立高校との個別かつ継続的な連携としては、全国的に見ても貴重な実践例であり、大学生（院生）と大学教員が高校生の学習を支援・指導し、高校教員も教員をめざす大学生を指導するという、相互にメリットがある取り組みとして継続されてきた。

第3部

I. 外部評価

I-1. 外部評価委員会

日 時：2026年1月28日（水）15:00～16:30

場 所：人文学研究科A棟1階学生ホール

外部評価委員：前川修（近畿大学文芸学部教授）

人文学研究科：白鳥義彦（2024、2025年度文学部長・人文学研究科長）、中畑寛之（2024、2025年度評議員）、
佐藤昇（2024、2025年度副研究科長）、芦津かおり（2024年度評価委員長）、真下裕之（2024
年度大学院委員）、澤田治（2024年度教務委員）、梶尾文武（2024年度学生委員）、浦田勇二
（事務課長）、長塚卓也（総務係長）

I-2. 外部評価報告書

前川 修（近畿大学文芸学部教授）

本報告書第Ⅰ部、第Ⅱ部の報告内容と1月28日開催の外部評価委員会での情報及び意見交換に基づいて報告いたします。

1. 教育（学部）

神戸大学文学部では「人文学を、古典を通して深く理解するとともに、社会的対話によりそれを実践して行く能力を身につけ、現代社会において活躍できる人材を育成すること」というディプロマ・ポリシー及び、それに基づいたカリキュラム・ポリシーに沿った念入りな教育課程が編成されている。当学部が「人文学の古典的な学問領域である哲学、文学、史学を学ぶ3講座と、人間的知識と感性をシステムとして捉える「知識システム」講座、社会文化に関わる問題をフィールドワーク等によって深めていくことを目指す「社会文化」講座から組織されていることも、現在における人文学を展開する上できわめて納得のいく構成である。

また、学部初年次からきめ細かいカリキュラム編成がなされている点（少人数ゼミ、オムニバス形式の講義、専門分野ごとの入門科目）、FD やピアレビューなどの教育方法の改善検討の機会が設けられている点はもとより、さらに、他学部科目の履修が認められている点、そしてすでに10数年を経て定着した神戸オックスフォード日本学プログラム、交換留学の受け入れと派遣もコンスタントに継続している点、そしてグローバル教育の取り組みによって国際的視座を習得できる教育を目指している点など、多様な人文学的素養を持ち、国際的な広がりを持つ人材を育成していることが明らかである。

学生の「出口」に当たる就職率も2024年度は95%弱、2021年度以来、平均90%を超す高い水準になっており、これは「授業ふり回りアンケート」の良好な回答からもわかるように、少人数教育に軸足を置いた、きめ細かな教育体制の成果だと判断できる。

1、2点だけ今後評価において重視される項目として、学生アンケートのデータの細かな集積（学年ごと、学部全体、全学）、その細かな解析、フィードバックはもう少し前景化しても良い。また昨今の学生の多様な特性に応じたカウンセリングやフォロー体制なども、全国の様々な大学で課題になっている点であり、FDなどの機会ですらこれまで以上に検討してもらった方がより効果が上がるだろう（これは全学的な取り組みとして行なう必要がある）。

2. 教育（人文学研究科）

大学院も、学部と連動し、「人間性」「創造性」「国際性」「専門性」を取得するというDP,CPに基づき、教育課程及び組織編成がなされている。指導に他専攻教員が1名参加すること、履修カルテの徹底など含めた指導プロセスの透明化、研究科共通科目の設置、修士、博士ともに準備論文の提出の義務化などは、院生が自身の研究進捗状況を適時把握する上で理にかなっているし、さらに往々にして密室化しがちと言われる大学院の教育指導の問題点を鑑みると、高く評価すべきポイントである。ここ数年の定員充足率は前期課程が文化構造114,7/社会動態100%、後期課程が文化構造162,5/社会動態155%という高水準を保っており、以上のような教育システムの成果だと推測できる。

交換留学の受入／派遣もコンスタントに行い、ダブルディグリー・プログラム、日本語日本文化教育インターンシップ派遣、グローバル教育の取り組み、学生の海外派遣の促進（2024年度の23名は特記すべきである）など、国際的な活躍を目指す学生の育成のための十分なシステムが整い、成果も出ている。

出口に当たる就職では、前期課程の就職希望者の就職率が86.4%と高い水準にある。後期課程に関しては、人文学研究者若手の常として大学教員職などが修了後すぐにあるわけではないので今後も修了後の若手研究者のための措置は学部・大学内だけではなく全国的に考えるべき問題であろう。

3. 研究

毎年の受賞数、著書数、論文数などからわかるように、高い質をもつ教員で当学部／研究科が構成されていることは明らかである。競争的外部資金もここ数年2億円前後と、全国の大学の平均的値から見ても高い水準で推移している。

部局内センターについては、人文学推進インスティテュートが5共同研究組織（地域連携センター、倫理創成プロジェクト、日本語日本文化教育プログラム、神戸雰囲気学研究所、文化交渉学）をハブとして支援することになり、研究科所属教員を軸に、異分野の研究者が相互に学際的研究協力体制をとっていることは高く評価できる。特にELSIプロジェクト、KOIASなどの取り組みは、現在の人文学が研究を社会に向けて発信するためのこれからの重要な拠点やプロジェクトになると思われる。

4. 全体

以上のように、少人数教育を中心にした、バランスのとれた、一貫性のある、しかもきめ細やかな指導体制をとっている教育システムに基づいて、教育の成果は一定の水準を保っており、研究の側面でも高い水準を保ち、外部資金獲得の面でも問題は見当たらない。ただし、この、全国的に見ても稀な、綿密な組織運営を、きわめて限られた教員数でこなしている点は、この評価報告の表面にはあげられていない点として強調しておきたい。こうした隙間のない教育体制を全てこなし、なおかつ各種の学部・全学委員を務め、その合間に質の高い研究業績を上げ、さらに学会運営の要職も担う…その負担は過酷なものであることは、明言しておきたい。それゆえに、教員補充がポイント制ゆえに数年あいてしまうという問題は、やはり一刻も早く改善すべき問題である。全国的に見てもきわめて高い質を持つ人文学の研究・教育の一大拠点である文学部／人文学研究科を今後も維持していくことは、他の大学にとっても範となることだと判断されるからである。